

澄、侍從葉室光朝、越智三郎、宇野十郎、恩地七郎、贊川左近將監、福塚小太郎、同く孫四郎、湯淺掃部助、眞木孫三郎、和田正頼、其弟小次郎、一色太郎次郎、山名氏眞、小山上總介以下、南朝遺臣の來り集まるもの、二千餘人、皆、身命を抛ちて、擁護し奉つらんと欲す。

二皇孫、乃ち髪を蓄へて、還俗し給ふ、空因法親王は、尊義王と改め、圓胤法親王は、義有王と改め給ふ。

諸臣、相謀り、尊義王を尊んで、南朝中興王と稱し、義有王を推して、征夷大將軍と爲し、年號を建て、天靖と曰ふ。

和泉、紀伊、大和三國の、志を南朝に寄するもの、皆、糧食を送り來る。

足利氏、聞いて、之れを討たんと欲す、其山深く、道峻はしきを憚かりて、敢て發せず。

尊義王、十津川に在はすこと二年、士卒、次第に集まり來りて、三千の多きに達し、兵勢、漸やく遠近に振ふ。

二郎、先づ紀伊を徇へんと欲し、文安二年八月、義有王を奉じて、八幡山に據る、和田正頼、其弟小次郎、恩地七郎、

湯淺掃部助以下、附き隨ふもの、一千六百餘騎。熊野本宮のもの、急を京師に報ず。

管領畠山持國、狀を見て、心に惑ふ、

「斯かる事あらんには、熊野三山より、夫れく注進あるべき筈なるを、唯、本宮のみの知らせに止まれるこそ、訝かしけれ、定めし、何かの訛傳にぞあらん、それとも、新宮、那智の者共は、早、官方となりたりけん、最と心元なし」

半信半疑、心、未だ決せず。

既にして、新宮よりも、那智よりも、亦、報あり、

「今や、愈々疑ふべからず、疾く、人數を差し向け、攻め滅ぼさん」

持國、急に老臣遊佐國長等に命じて、八幡山を攻めしむ。南軍、善く戦ふ、敵迫る毎に撃つて、之れを斥く。

攻戦數日、寄手、多く討たれて、意氣、漸く沮む。

二郎、機を見ること敏し、急に門を開いて、突出し、驀然として、敵の營を衝く。

寄手、不意を撃たれて、大に驚き、弓を棄て、矢を捨て、

倉皇、遁がれ走る。

事、京師に聞ゆ、

「若し、紀伊の一國、盡く官方に付きなば、由々しき一大事ぞ、早く、其根を絶たんこそ、好けれ。」

細川勝元、佐々木高清、宇都宮祥綱をして、往いて、攻めしむ。

勝元等、乃ち三萬餘騎の大兵を率ゐ、進んで、八幡山に迫る。

二郎、敢て意とせず、

「寡兵を以て、大軍を撃ち惱ますは、我が楠木家の軍法ぞ。」

正頼等と與に、士卒を鼓舞して、奮ひ戦ひ、忽ち撃つて、敵を破る。

京軍、衆を恃んで、屈せず、一軍、破るれば、二軍、代り進み、二軍、退けば、三軍、又代り迫る。

南軍、連戦連捷、未だ一度も、鋒を挫かず、日を経る毎に、勇氣、益加はる。

二

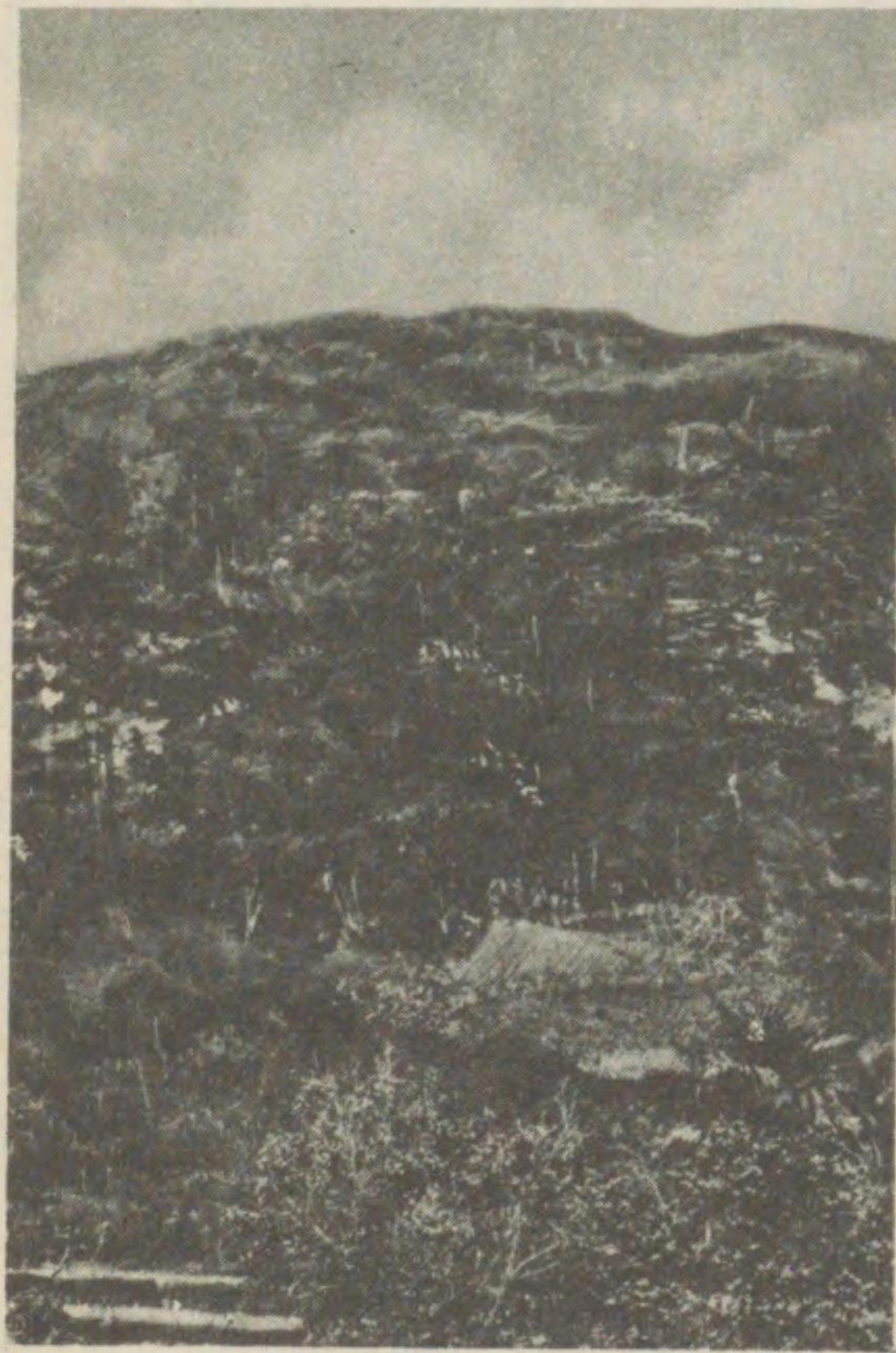
一色太郎次郎、城中に在り、獨り心の中に思ふ、

「味方、今こそ、勝利を得つれ、外に、一兵の援けさへなきものを、何時までか、支へ得らるべき、今の中に、早く、後の圖を運らさんこそ、然るべけれ」

怯夫、早くも、節を變じ、密かに、歎を敵に通じて、宇都宮祥綱の兵を陣中に導く。

ゆくわんど森

紀伊國有田郡御靈村大字吉見に在り此れは蝦夷語にして鹿の集る處と云ふ程の義なり此處に義有王の御墓あり。



二郎等、其れとも知らず、益々守備を嚴にして、敵を待つ。其翌る朝、京軍、猛然として、四面齊しく、城に迫る、二郎等、智力を盡し、矢石を飛ばして、拒ぎ戦ふこと數刻。京軍、忽ち破れて、引き退く。

二郎等、勇み立つ、

『ソレ追へや』

急に門を開きて、突出し、義有王、亦、出でて、敵を追ひ給ふ。

俄頃にして、亂矢、背後より、飛び来る。

二郎等、驚いて、顧視すれば、敵旗、既に城上、高く翻へる。

京軍、斯くと見るより、急に返り撃つ。

『扱は、敵の計略に陥りしか』

二郎等、頓足して、憤ほり、兵を勵まして、奮ひ戦ふ。

南軍、勇と雖も、前後の敵を拒がんやうもあらず、終に敗れて、潰え走る。

三

南軍、地理に精はしく、二郎等、亦、兵事に長けぬ。

一敗の爲めに、敢て志を屈せず、傍近の山中に隠れて、神出鬼没、頻りに、京軍を惱ます。

京軍、敵の旗影を追うて、西に向ひ、東に赴き、果ては、奔命に疲れて、手を出ださんやうもあらず。

二郎等、謀うて、之れを知り、不意に起つて、其營を襲ふ。京軍、錯愕狼狽、先きを争うて、京師に走り還る。

二郎等、乃ち湯淺城に據りて、紀伊半國を定め、更に、大和、河内を徇ふ。

南軍の形勢、復た振ふ。

四

細川勝元、代りて、管領たり、文安三年九月、諸將を會めて、議す、

『近來、官方の形勢、日々に振ひ、大和、河内のものまでも、志を寄せぬこそ、由々しけれ、若し、捨て置かば、終に天下の一大事となり候はん、疾く、攻め滅ぼさんこそ、然るべけれ』

宇都宮祥綱、及び遊佐國長に命じて、之れを討たしむ。祥綱等、乃ち一萬餘騎を率ゐ、進んで、紀伊に入る。

る。

城險にして、兵強し、終に一度の勝をも得ず、將士、意氣漸やく沮む。

二郎等、早くも、窺ひ知りて、勇み立つ、

『イデヤ、敵を蹴散らさん』

忽ち城門を開きて、突出し、猛然として、敵陣に殺到す。京軍、大に驚き慌て、粉川寺に遁れ走り、尋で、京師に引き退く。

南軍の兵勢、益々振ふ。

五

二郎等の、義有王を奉じて、紀伊に入りしより、既に二年。京軍、討てども、克つこと能はず、

文安四年十月、將軍義政、諸將を召し集めて、議す、

『紀州の兇徒、久しく滅びず、若し、諸國の武士、之れに應じなば、遂に由々しき大事に及ぶべし、若かず、大軍を發して、一時に攻め滅ぼさんには』

畠山持國を大將とし、細川勝元を副とし、大舉して、之れを勦滅するに決す。



義有王の御墓
紀伊國有田郡御靈村大字吉見のゆくわんど森に在り古來吉見親王の御墓と傳説せられしもの。

二郎等、斯くと聞くより、要所々々に、柵を樹え、壘を構へて、敵を待つ。祥綱、一舉して、城を抜かんと欲し、士卒を勵まして、ヒタ／＼と、押し寄す。

城兵、斯くと見て、皆、奮ふ。

『宇都宮こそ、八幡山の城を落せし當の敵なれ、イデヤ、一拉ぎに拉いで、會稽の恥を雪がん』

矢石を亂下すること旬日、新手を引き換へ、城に迫

祥綱等、攻圍すること旬日、新手を引き換へ、城に迫

二將、乃ち佐々木高清、宇都宮祥綱以下の將卒三萬餘騎を率ゐて、海陸並び進む、聲勢、頗る張る。存亡の決、繫つて、今日に在り、二郎等、義有王を助け、士卒を勵まして、固く守る。

京軍、鯨波を發して、ヒシ／＼と、城下に迫り、濠を越え、壁に攀ちて、登る。

城兵、矢を發ち、石を投じ、殊死して、拒ぎ戦ふ。

撃ちて、敵を追ひ斥くること、三十餘回。

一戦毎に、敵兵を殲すこと、數十百人、城兵、亦、次第に死傷して、残るもの、僅かに五百騎に過ぎず。

城外を見渡せば、敵の大軍、雲霞の如く、旌旗の影、遠く山野に聯なる、城兵、望み見て、色沮む。

二郎、自若たり、

「我祖正成は、金剛山の城に立て籠つて、百萬の大敵をさへ、撃ち惱ましたるにあらずや、斯ばかりの小敵に對して、何の恐ることやある」

益々士卒を鼓舞して、日夜、守備を修む。

六

孤城を固守すること、既に五旬。糧食、漸やく盡きて、最早、數日を支ふべからず、二郎、今は、心を決す、將に勝敗を一舉に決せんと欲す。乃ち正頼に向ひて告ぐ

「斯くなりては、所詮、城を保たんこと、叶ふべくも候はず、此上は、花々しく、最後の戦に及ばんと存するにこそ、御邊は、城に留まりて、宮を守護し給へかし」十二月二十三日、自ら城兵を率ゐ、吹き荒む曉風を衝いて、驀地に、敵軍を下り撃つ。

二郎、兵を遣ること、臂の指を使ふが如し、足並を揃へ、鋒尖を揃へて、颯と進む、勢ひ、宛がら、疾風に似たり。

敵の一陣を突破すれば、直に進んで、二陣を衝き、二陣を撃破すれば、又進んで、三陣を衝く。

氣節、金石の如し、何の堅か破れざらん。

卯の刻より、未の刻に至るまで、血戦十有七回。

盡く敵の陣々を破り、士卒を殲すこと、數千人、鮮血流るところ、草色、花の如し。

顧みて、味方を見れば、人馬、皆、倒れて、生き残れるもの、僅かに五騎。

二郎も、亦、身に六創を蒙むる。

二郎、意氣、益々奮ふ、憤然として、敵を見遣れば、皆、遠く退きて、敢て迫らず、

「今日ぞ、愈々我が死すべき時なる、イザ、今一度、城に立ち還へりて、宮に辭し奉つらん。」

五騎と與に、馳せて、城中に入れば、敵、亦、隨つて、城を圍む。

砂塵、天を掩うて、日色、慘として昏し。

七

二郎、馳せて城中に入るや、急ぎ義有王の御前に出で、跪づく、

「最早、御運も、是れまでに候なり、此上は、疾く御腹召され候べし、某城外に於て、討死をもせず、斯く馳せ還り候も、全く冥途の御供仕つらんが爲めにこそ候へ」辭色、既に決す。

王、更に、驚かせ給へる氣色もあらず、徐かに、二郎に向

ひて、宣はす、

「事、此に至るも、天なり、命なり、復た何をか嘆くべき、抑も、汝、累代、身命を抛つて、忠節を盡せること、和漢古今に、其例あらず、我れ、泉下に於て此事を申し上げなば、曾祖の帝後醍醐天皇も、如何ばかりか、叡感あらせ給ふらん」

感、極まつて、御涙、ハラ／＼と、御鎧の袖に、滴り落つ。

稍々ありて、屹と、二郎に告げ給ふ、

「逆も、死すべき命なれば、今一度、奮戦して、武名を、萬代に遺さんは、如何に」

今は、最後の快戦をなさんと、思し召す。

二郎、聞くより、感涙、止めがたし、

「扱も、勇ましき仰せを、承はり候ものかな、是れぞ、固より、某の望み候ところ、イザ、左らば、思ふ存分に働らきて、敵の膽玉を拉ぎ候はん」

潔よく、言ひ放てば、正頼、亦、聞いて、勇み立つ。

王、左らばと、寮の御馬を牽かせて、ヒラリと、打ち乗

り給ふ、颯爽たる御英姿、四方を拂はんばかり、當時の大塔宮の御姿も、斯くやと思はれぬ。

頓て、徐々と、御馬を打たせ給へば、付き随ふもの二郎、正頼を始めとして、僅かに二十六騎。

死を決したる身は、目に餘る敵の大軍を、物の數ともせず、忽ち、サツと、城門を開きて、突進す、

「畠山持國、何處に在る、イザ、來つて、勝負を決せよや」

蹄を揃へて、縦横無盡に、駆け廻はり、馳せ廻はり、遮ぎる敵を、切り立て、薙ぎ立て、ドツと、喚いて、持國の本陣に突貫す。

鋭鋒、當るべからず、畠山勢、覺えず、バツと、四方に披く、

持國、憤然として、呼はる、

「敵は、小勢ぞ、何の恐る、事やある、中に押つ取り込めて、一人も餘さず、打ち取れや」

兵を勵まし、又戦ふ。

王、馬を乗り廻はし、戦ひ給ふこと數刻、身に大小

り落ち給ふ、

「今は、是れまでなるぞ」

直ちに刀を、御腹に突き立て、御自害あらせ給ふ、御年四十有一。

正頼、此有様を見るより、猛然として、奮ひ立つ、

「イザ左らば、御供仕つらん」

敵の陣中に突進し、一士と、引つ組んで、與に殪る。

他の二十四騎も、亦、我れもくと、敵と戦つて死す、今は、生き残れるもの、二郎、唯一人。

八

二郎、馬を立て、屹と、敵を見遣る、

「イデヤ、此上は、力限り、魂限り戦うて、潔よく、討死せん」

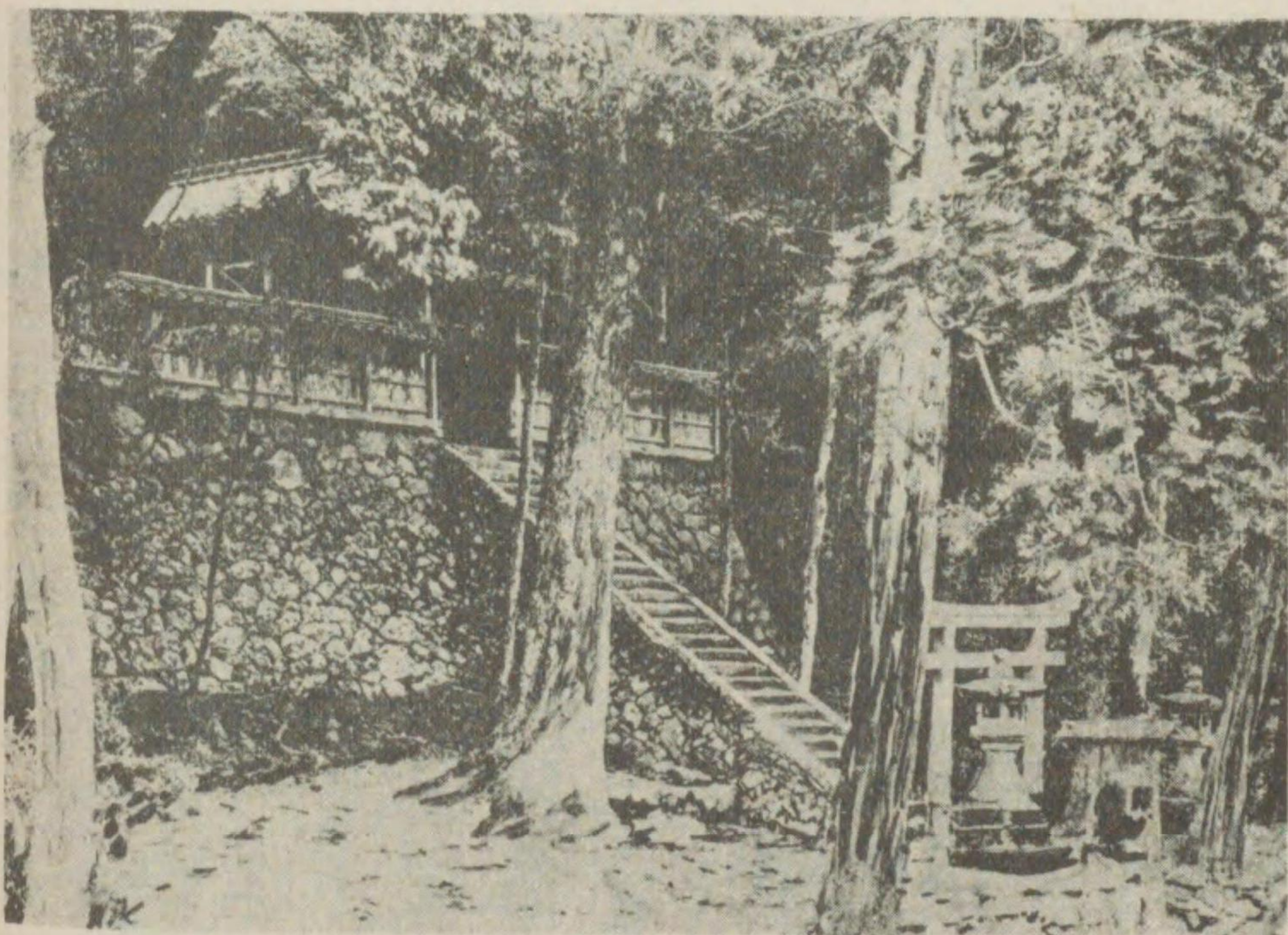
サツと、一鞭を加へさま、佐々木高濤の陣を、目蒐けて、突進す。

高濤の郎等目加田彈正、三井八郎次郎、伊香新左衛門、馳名、夙に高し、斯くと見るより勇む、

「扱は好き敵ぞ、イデ討ち取つて、高名せん」

四創を被むりて、淋漓たる鮮血、泉の如くに噴く。

荒宮神社
紀伊國有田郡御靈村大字吉見の宮の奥に在り義有王の靈を祀る。



王、更に、屈し給はず、益々奮ひ戦うて、一歩も、跡に引き給はず。忽ち敵矢飛び來つて、グサと御身に立てば、何かは堪らん、控とばかりに、馬よ

三騎轡を並べて、駈け來り、左右、前面より、一時に、斬つて懸かる。

二郎、見て莞爾と笑む、

「扱も、優さしき敵の振舞かな、イザヤ來れ」

太刀を振り被つて、奮闘すること數合、陸離たる刀光、電火の如し。

如何なる隙をや見けん、二郎、忽ちヤツと、聲懸けて、打ち下せば、前面の目加田彈正、眞甲を割られて、馬より落つ。

三井八郎次郎、右手に在り、其隙を得たりと、猛然、打つて懸る。

ソレと見たる二郎、忽ち身を開いて、サツと、刀を横に拂ひ、八郎次郎の右の太股を、サツクと、斬つて落す。

伊香新左衛門、突と、馳せ寄りて、ムツと、二郎の左手の脇に、組み付き、渾身の力を籠めて、捻ぢ倒さんとす。

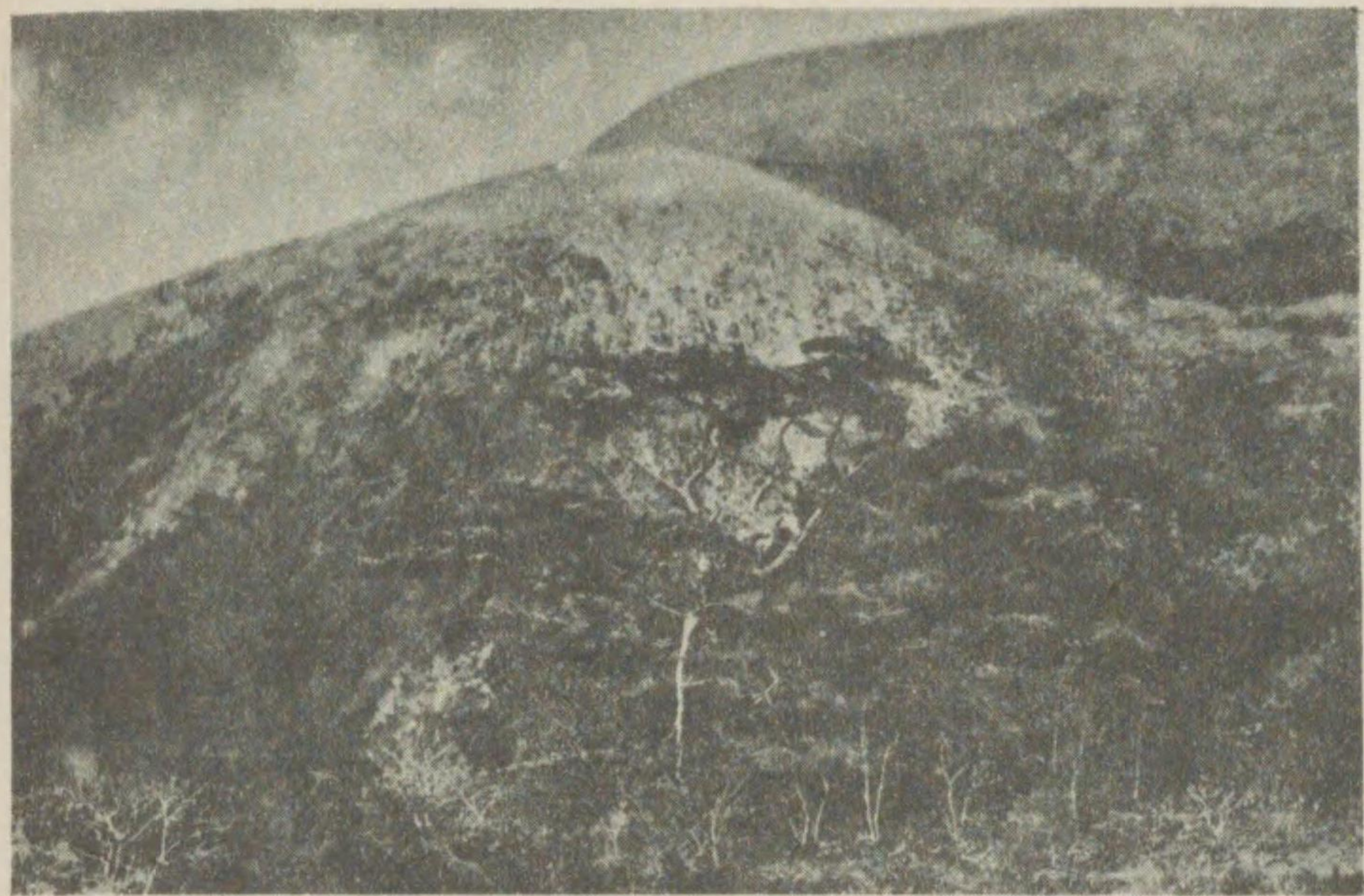
二郎、少しも驚かず、

「左らば斯うぞ」

カラリと、太刀を投げ捨て、右手に、新左衛門の上帯を、

引つ攫み、グツと、高く差し上げて、地上に、はたき付くれば、無惨やな、新左衛門、忽ち血を吐きて、死す。

妙見谷
紀伊國有田郡御靈村大字吉見の妙見森に在り此處に楠木二郎和田正頼の墳墓あり。



剛勇の三士、皆、殲る。

高次の部下、皆、舌を巻きて、驚き恐れ、今は、誰一人、進み戦はんとするものあらず。

高次、見て呼はる、

「近寄らば、味方を損するばかりぞ、唯、遠矢に射よ」
部下、各々矢先を揃へて射る、

萬矢、飛び來つて、頭を過ぎ、面を掠む。二郎、刀を揮うて、拂へども、及ばず、忽ち身に數矢を被むる、

「思ふ程の軍は、既に爲しぬ、今は、想ひ残すこと、少しもあらず、イデ、宮に追ひ付き奉つらん」

屹と、敵陣を見詰めて、大音聲に呼はる、

「如何に、敵の者共、能く承はれ、檢非違使左衛門尉楠木正成の曾孫同苗二郎、父祖の遺志を受け繼ぎて、唯今、此處に、忠死を遂ぐべきぞ、イザヤ、首を取つて、感賞に預かれや」

サツと、鎧を脱ぎ捨て、肌押し寛ろげ、腹を十文字に、掻き切つて、前に仆る。

高次の部下、蒐け來つて、首を掻く、

「流石は、武勇隠れなき楠木殿の後裔ぞ、天晴、目覺しき最後の光景かな」

京軍、何れも、皆、嘆賞せざるはなし。

九

湯淺城、既に陥いる。

持國、勝元等、相談す、

「既に、其幹を倒しぬ、更に、其根を絶やさんこと、肝要ぞ、イデヤ、此序に、十津川を、攻め落さん」

更に、軍を大和路に進む。

十津川には、楠木十郎正親、和田新太郎、越智三郎の面々、尊義王を守護す。

警を聞いて、起つ、

「左らば、敵を拒がん」

紀伊の口に、柵を樹て、逆茂木を列ねて、嚴しく守る、天險の地に、此人工を加ふ、飛禽走獸と雖も、容易に入ること叶はず、

「敵來れや、目に物見せん」

南軍、皆、敵を迎へて、一戦せんと、奮ひ立つ。

十

京軍、兵を進めて、十津川に向ふ。

十津川は、山の奥の奥、坂、急にして、路も、亦、嶮はし、石を攀ぢては、山を登り、葛に縋りては、谷を降る、兵を行るだに、容易ならず、争かて、糧を運ぶの術あるべき、

「實にや、一夫、道に當れば、萬夫も、進む能はずとは、此地の事ぞ」

人馬、皆、艱む。

冬深うして、天寒し、會々北風、大雪を捲き來つて、乾坤りんこん漠々、咫尺をも辨ぜず。

今は、一步も進むべからず、露營を、山谷の間に張りて、天の晴る、を待つ。

士卒、手は凍え、身は冷えて、困苦、名狀すべからず、

「斯くては、所詮、進むこと叶はず、進むとも、戦ひがたし、若かず、一先づ、京に還り、復た重ねて、向はんには」

持國等、終に兵を率ゐて、京師に還る。

是れより、京軍、復た十津川に迫らず。

十一

義有王の戦死し給ふや、畠山四郎、其首を取る、持國、之れを京師に送り、且、奏す、

「朝敵の首に候、速かに梟し給ふべし」

御首、文安五年正月十日を以て、京師に着す、乃ち之れを

莊嚴寺に置く。

廷臣、皆、喜ぶ、

『年の始めに於て、朝敵の首を獲たるこそ、目出たけれ』

議して、梟せんと欲す、

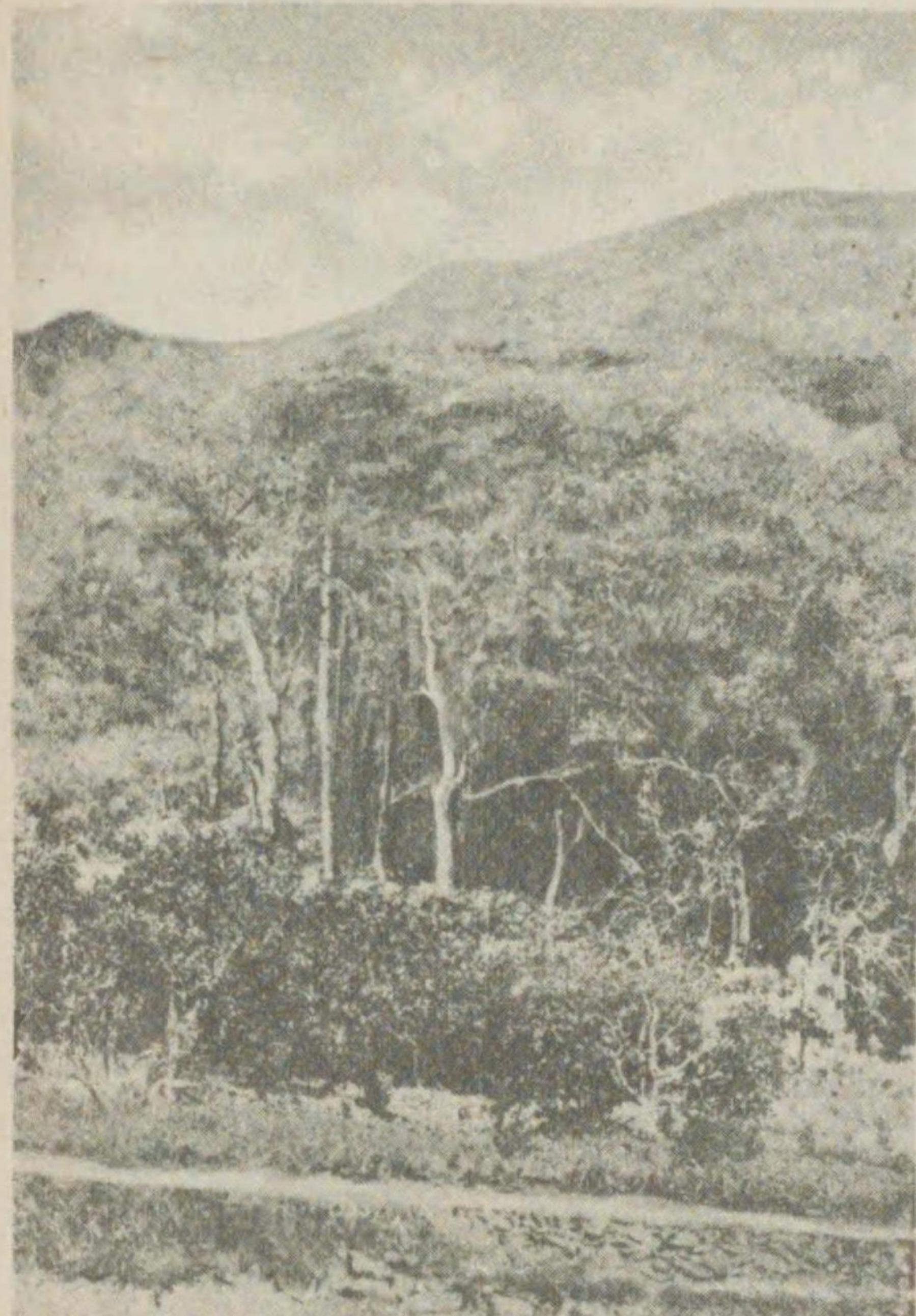
關白兼良、固く執つて、不可とす、

『古より、宮家の御首を梟せし例あるを聞かず、此事、

最も然るべからず』

妙見社

紀伊國有田郡御靈村大字吉見字沖の谷に在り楠木二郎和田正頼の靈を祀る。



廷議これに従ひ、式を具へて、檢視するに決す。

此月二十七日、判官坂上明世、大判事大石維弘、莊嚴寺に臨む。

持國の子持康、烏帽子、直垂を着し、武士二十騎を率ゐて、來り會し、御首を取りて、明世に渡す。

明世、乃ち之れを検して、式を終ふ。

十二

尊義王、十津川に在はす、義有王戰歿の後、御子尊秀、忠義の二王を携へて、吉野川上庄に遷らせ給ふ。

三皇子、此に在はす、因りて、此地を、三ノ皇と稱す。

此年、尊義王、神璽を、尊秀王に譲りて、自から太上天皇と稱し給ふ。

後八年、康正元年二月五日、尊義王、疾んで薨す、御年四十五、高福院と謚し、三ノ皇山に葬る。

尊秀王、南朝の遺臣を、糾合せんと欲して、北山庄に遷らせ給ひ、其御弟忠義王は、河野庄に遷らせ給ふ、因りて、

尊秀王を、北山宮と稱し、忠義王を、河野宮と稱し奉つる。居ること二年、長祿元年十二月二日、二王、俱に赤松の遺

勢に走りて、兵を挙げ給ひたれども、事成らず、御子

熙忠王、尊義王。

二、熙忠王は、小倉宮第二の王子なり、教尊法親王と曰

ひ、山科勸誘寺の座主たり、還俗して、熙忠王と稱し給ふ、嘉吉三年九月、禁闕を犯して、神璽を奪ひ、叡

山に走りて、自殺し給へり、神璽を奪へるを、尊秀王とするは、誤なり

三、尊義王は、小倉宮第三の王子なり、空因法親王と曰ひ、萬壽寺の金藏主と申す、還俗して、尊義王と改め、

神璽を奉じて、吉野に在はせしこと、本文に在り、御子尊秀王、忠義王、尊雅王。

四、尊秀王は、北山宮と稱す、謚して、南帝王一宮自勝公と申す。

五、忠義王は、河野宮と稱す、謚して、南帝王一宮忠義禪定法皇と申す。

六、尊雅王は、市川宮と稱す、或は、尊義王の御子なりとも曰ふ、謚して、興福院殿南天皇と曰ふ、一説に、

尊雅王は、尊秀、忠義二王の害に遭ひ給ふや、村僧の

臣上月滿吉、中村貞友等の爲めに、害に逢はせ給ふ。

二王の御弟尊雅王、北山庄口の殿に在り、市川宮と稱せらる、尊秀王に繼いで、神璽を擁し給ふ。

長祿二年六月、赤松の遺臣小寺性説、兵を率ゐて、之を襲ふ、尊雅王、走りて、十津川に避け給ふ。

八月二十七日夜、性説等、追躡し來つて、掩撃す、尊雅王傷を被むりて、復た吉野に走り給ふ。

性説等、乃ち神璽を奉じて、京師に還る。尊雅王、尋で薨す、南朝の皇胤、終に絶つ。

延元々年、後醍醐天皇の、吉野に入らせ給ひてより、茲に至るまで、總て一百二十有三年。

南朝諸皇子の事に就ては、異説多し、神璽を奪へるを、尊秀王とし、神璽を擁せるを、忠義王とし、又尊雅王の

謚號を、高福院とするが如き、其一例なり、由りて、諸書に由りて、其系統を挙げ、以て参考に供す。

一、小倉宮は、後龜山天皇の御子なり、御名、詳かならず、或は、實仁親王と曰ふ、剃髮して、覺理と稱し給

ふ、足利氏の、兩朝迭ひに立つの約に違ふを怒り、伊

弟子となりて、難を紀伊國牟婁郡入鹿郷神の山村の寺院に避け、茲に在はすこと五年、疾んで、薨じ給ふと云ふ、同寺内に墓あり、寺門の前に、高さ六尺ばかりの石牌ありて、「尊雅王之寺」の五文字を刻す。

七、義有王は、後村上天皇の御子説成親王第二の王子なり、圓胤法親王と申し、圓満院の門主たり、還俗して、義有王と改む、或は、泰成親王の御子となし、又圓悟法親王となせるものあり。

木山城址

赤松満祐滅亡の地

木山城址は、播磨國揖保郡東栗栖村大字善定の南、越部村大字市之保の西なる龜の山に在り、木山、城の山とも書す、市之保の方を、大手とし、唐猫谷の方を、搦手とす、山上は、分内、廣くして、石垣、城濠の痕、尙、存す、池あり、其水、西方の井關谷に落つ、赤松満祐入道性具の據守して、一族と與に、滅亡せし處。

坂本城址は、播磨國飾磨郡曾左村書寫山の南麓に在り、長七十四間、横四十八間あり、赤松満祐の築くところ、坂本の堀城、堀の御構など稱せられしは、此れなり。

足利氏、世々、叛者の跡を絶たず。

赤松友京大夫満祐は、義則の子なり、身軀、矮小なるを以て、人、呼びて、三尺入道と曰ふ、父の遺封を繼ぎて、攝津、播磨、備前、美作、因幡の五國を領す、封、大にして、勢、亦、張る。

將軍義持、心に、之れを忌む。

大叔父貞範の孫持貞、義持に寵あり、義持、乃ち満祐の攝津、因幡、美作の三國を割きて、之れを持貞に與ふ。

持貞、尙、足れりとせず、更に、播磨を得てと欲して、屢屢義持に請ふ、義持、心に、之れを許せども、未だ發せず。満祐、聞きて、大に憤り、應永三十四年十月、火を放ちて、居第を焚き、播磨の白旗城に、奔り還りて、叛旗を揚ぐ。義持、のち細川持元、山名熙興等に命じて、往きて、之れを撃たしむ。

諸將、皆、持貞の不遜を憎む、のち持貞を誅して、満祐を赦さんこと講ふ、義持、拒むこと能はず、終に、持貞に、死を賜うて、満祐の罪を赦し、且、備前、播磨、美作を賜ふ。

是に於て、満祐、京師に還りて、後た義持に仕ふ。

二

正長元年正月、義持の疾んで、薨するや、管領畠山尾張守満家、諸將と議して、義持の弟大僧正義圓を、壽蓮院より、迎へ立つ、之れを義教となす。

義教、性質倨傲にして、諸將を輕侮し、最も満祐を憎む、或は、其矮驅を嘲笑することあり、或は、其飼養せる猿を放ちて、満祐の面を爬かしめ、或は、犬を噉して、満祐の體を咬ましてとしたることさへ、一次や、二次に止まらず。

満祐、終に怒つて、猿を斬り、又犬を斬る、義教、己れの非を悟らず、却て、満祐の無禮を啣む。

満祐の妹、義教に侍す、旨に忤うて、殺さるゝに及び、満祐、益々義教を恨む。

一日、満祐、山名右衛門督持豊と與に、義教の側に侍す、持豊、頂上の枯松を、見遣りつ、

『赤松を伐つて棄つべし』

と言へば、満祐、透かさず、

『山なのか』

と言ひ返へす、二人、是れより、隙あり、左右、交々之れを義教に訟ふ。

貞範の曾孫伊豆守貞村、美貌を以て、義教に寵あり、義教、のち満祐の領國を奪うて、之れを貞村に與へんと欲するの意あり。

満祐の子教康、姪満康の二人、此事を漏れ聞きて、意、頗る平かならず、

『我が一門の軍忠、他に越ゆるは、天下の知る所なるに、今や、何の罪なくして、三列を奪はれんとすること、奇怪なれ、君、君たらずんば、臣、何ぞ、臣たるべけれや』と謀り、終に、満祐を説き勸めて、叛を謀るに決す。

三

事は、荒立つべからず、謀は、密なるを要す、嘉吉元年六

月、滿祐、義教の前に出て、

『此度、關東の靜謐に歸し候へること、偏に、御武威の致すところ、天下、是れより、泰平に歸し候べし、幸ひ、臣が泉水の梟、雛を育て居り候ひぬ、御慰み旁々、祝酒を捧げ奉つらん、台臨あらせ給ふべくもや』
と申せば、義教、之れを許し、二十六日を以て、其邸に臨むに決す。

一日、室町の殿中に、一二寸の妖童、現はれて、猿樂を催ほし、舞うて、鶉の羽の曲に至りて、忽ち散じて、見えず、人、之れを奇とす。

期に至れば、義教、滿祐の西洞院の邸に臨み、三條權中納言實雅、管領細川持之、及び赤松貞村、赤松滿政等、皆、此れに従ふ。

滿祐、盛饌を設けて、盃を侑め、猿樂を奏して、興を幫く一曲、既に了り、二曲、亦、關りて、今や、鶉の羽の曲に移る。

邸中、俄然として、物騒がしく、人の走る者、噪ぐ聲、雜然として、湧き起る。

『今日の事、皆、君の招かせ給へる故に候』

と言ふや否や、滿祐の臣安積鹽物行秀、背後より、刺して、之れを弑す、義教、時に、年四十八。

邸中の混亂、鼎の沸くが如く、叫喚の聲、劍戟の響、其處にも起り、此處にも起る。

京極加賀入道道統、山名中務熙貴は、此れに死し、三條權中納言は、劍を負ひ、斯波義廉、大内持世は、垣を踰えて、遁れ出で、其他、死傷するもの、少からず。

滿祐、火を縱つて、邸を焚き、弟伊豫守義雅、則繁以下三百八十餘人と共に、義教の首を掲げて、播磨に奔り、遂に、之れを攝津國中島の宗福寺に葬る。

四

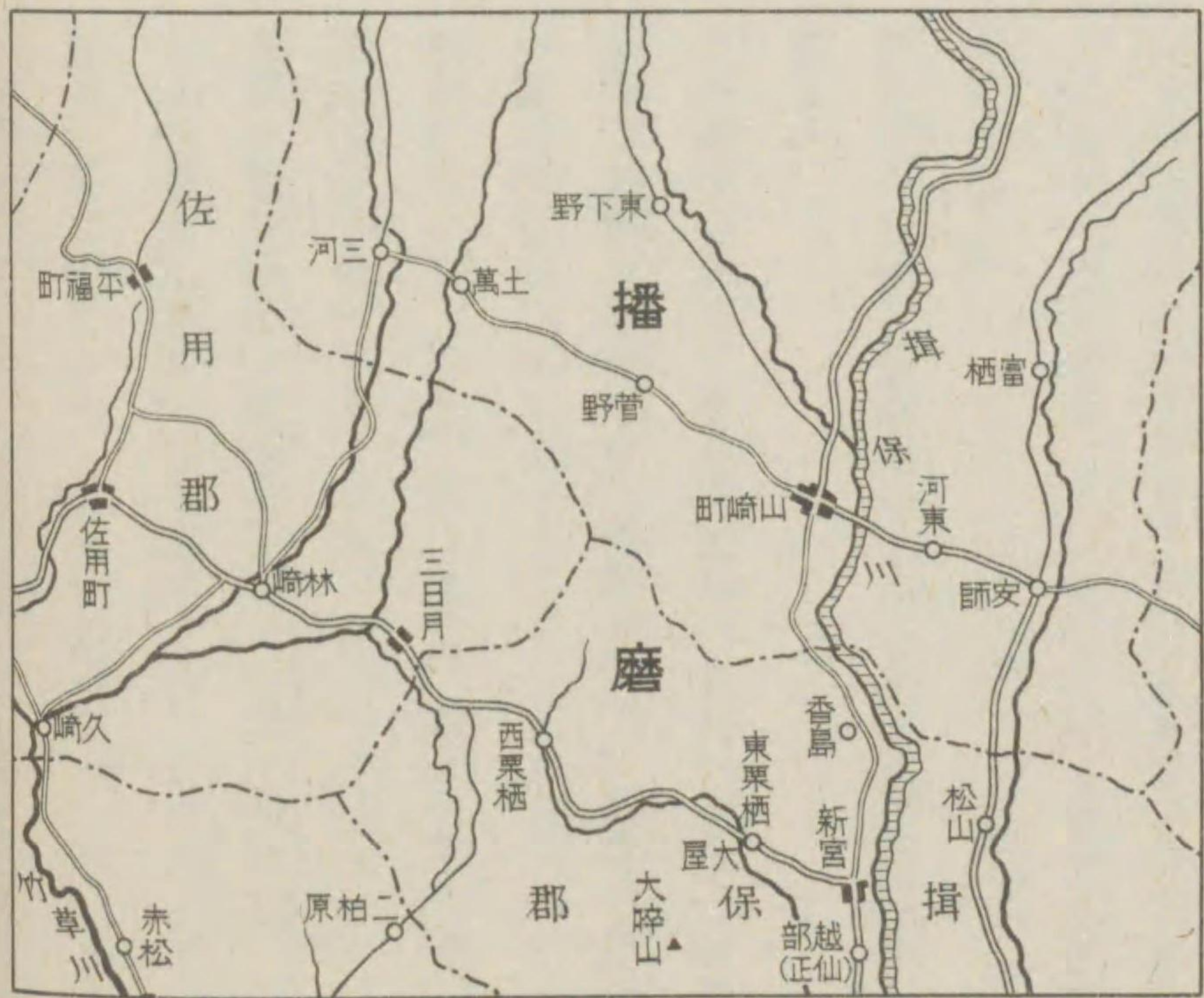
諸將、敢て追ふものなし。
滿祐等、書寫山下の坂本城に入りて、軍略を議す、一人、膝を進めて、

『以上は、將軍家御一門の方を迎へ立て、武將と仰ぎ、之れを奉じて、天下の執權となり給はんこそ、然るべけれ』

木山城址

『あれく、御馬の逸げ候、疾くく、門を鎖し候へ』
と叫ぶ聲の起ると齊しく、三百の伏兵、俄然として起り、義教の席を、目蒐けて、馳せ來る、義教、色を變じて、

木山城址



『這
は、
何事
ぞ』
と言ひ
も終ら
ず、教
康、滿
康の二
人、突
と、進
んで、
左右の
手を執
り、

と説けば、衆、皆、此議に従ひ、足利義尊を備中國井原の興福院より、迎へて、東坂本の定願寺に置き、壘砦を、諸所に構へて、京軍の至るを待つ。

京師に於ては、管領細川持之、及び畠山持國、大内持世等相議して、義教の長子義勝を立て、諸將を遣はして、滿祐を討伐せしむ。

是に於て、細川持常、赤松貞村、武田信賢等は、一谷より、大手に向ひ、山名持豊、山名教清、山名教之等は、但馬より、搦手に向ひ、細川持親は、別に、兵松二百餘隻を率ゐて、播磨に向ふ。

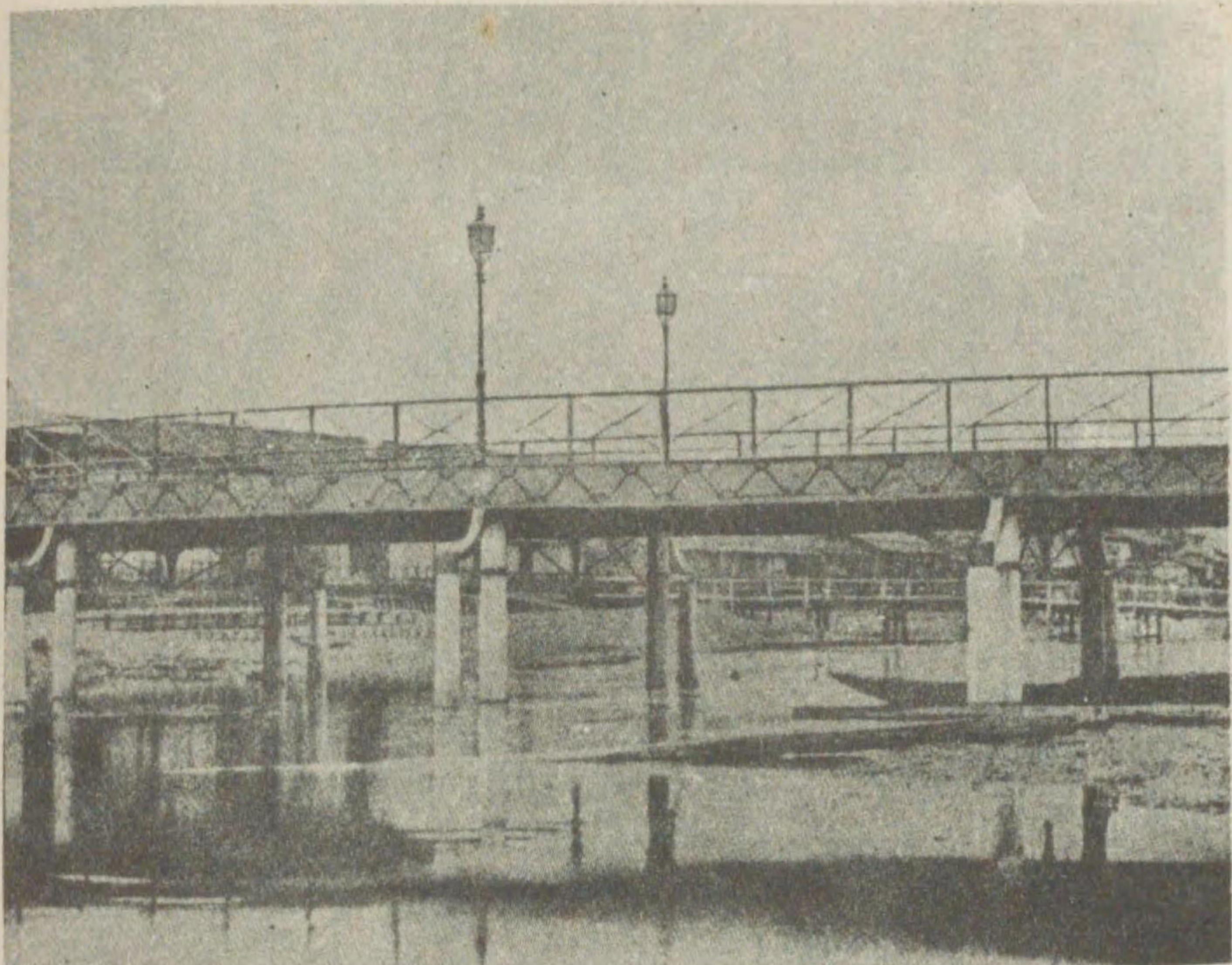
八月二十六日、細川教春、吉川經信等、進んで、明石郡の蟹坂に到り、赤松則尙の兵と戦うて、敗る。

九月八日、山名教清、山名教之等は、佐用郡より、城の背後に出で、千本川原に陣し、山名將豊は、書寫山より、大手に向ひ、相持して、未だ戦はず。

其夜、放牛十餘頭、馳せ來りて、互に突き合ひ、挑み合ふ、城兵、聞きて、

『素破や、山名の寄せけるぞ』

と驚き騒ぎ、先を争うて、木山城に、落ち行く。
諸軍、追うて、木山城を、圍み攻め、九日、斷崖より、樺
四條大橋
京都市四條通の賀茂川に架せらる赤松満祐父子の首は此河原に
棄けられしなり此れは明治七年架設の舊橋なり。



ち登り
て、火
を櫓に
放ち、
喚き叫
んで、
奮戦す
ること
終日勝
敗、尙
未だ決
せず。
十日卯
の刻よ
り、又
戦ふ、

劇戦奮闘すること數刻、満祐、今は、兵疲れ、力盡きて、
復た奈何ともすべからず、
『此上は、潔よく、腹を切らん、然るにても、一家、悉
く、此處にて、果てんは、餘りに、口惜し』
と告げ、次子彦次郎教祐を召して、
『汝は、此處より、伊勢に、落ち行くべし、國司北畠殿
は、同じ村上源氏なれば、必ず、扶助せられ候はん』
と諭して、密に、落し遣り、其弟義雅以下一族六十九人と
與に、屠腹して死すれば、安積監物行秀、火を城に放ちて、
亦、死す。
依藤太郎左衛門豊房、此日、手勢五十騎を率ゐ、城を出て
て、白旗城に使ひし、歸りて、千本村に至り、城中、火起
るを見て、
『扱は、城は、早、破れたり、今は、歸りたりとて、何
かはせん』
村の地藏堂に入り、辭世の狂歌を、柱に書き記して、自殺
す。
則繁、獨り城を脱して、西國に奔り、終に朝鮮に入る。

持豊、満祐父子の首を取りて、京師に送れば、命じて、之
れを西條河原に梟す。

教祐、奔りて、伊勢に到り、國司北畠氏に頼る、事、京師
に聞ゆ、義勝、命じて、之れを殺さしむ、教祐、乃ち自殺
す。

是に於て、赤松氏、終に亡ぶ。幕府、播磨を、持豊に、備
前、美作を、教清、教之に分ち與ふ。

本法寺

鍋被日親獅子吼の地

叡昌山本法寺は、京都市上京區本法寺前町に在り、日蓮
宗本山の一なり、永亨八年、日親、之れを四條綾小路に
建立せしに、後、一條戻橋の西に移す、天正年間、豊臣
秀吉の命に依りて、今の處に移る、方丈の庭に、日親の
説法石あり。

此れは、足利義教時代の側面觀とも謂ふべき事實なれば、
宗教を離れて、之れを見るも、亦、興味あるべし。

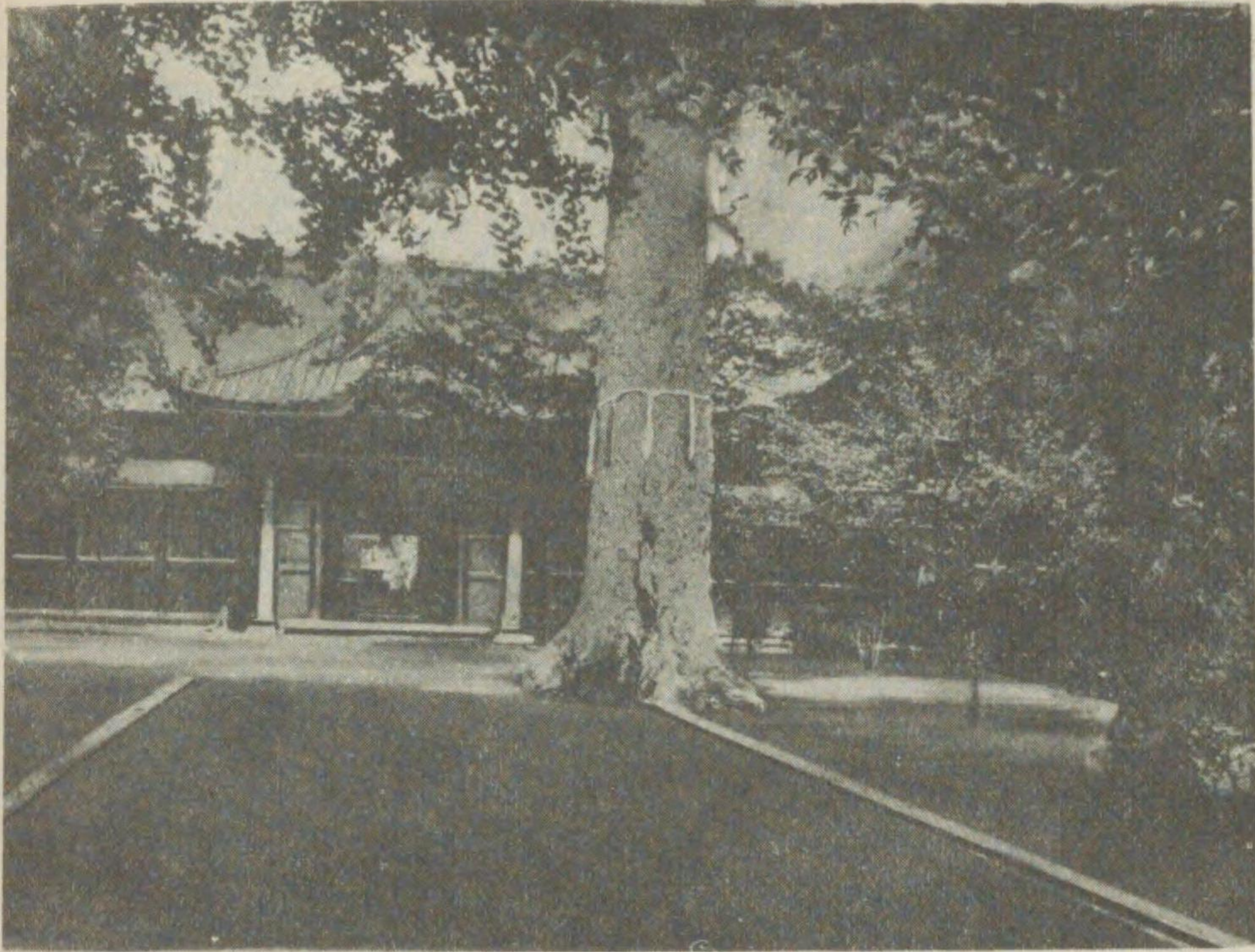
本法寺

大聖日蓮の滅後、一百二十五年、勇猛にして精進、英邁に
して豪壯の一僧、復た世に出で、大に正法の廣宣、邪宗の
折伏を努めて、刀鋸をも怖れず、鼎鑊にも屈せず、獅吼虎
吼、宛乎として、日蓮再生の想あらしむるもの、之れを久
遠成院日親となす。
上總國武射郡埴谷に、埴谷豊前守景正と言ふものあり、下
總の豪族千葉氏の一門にして、建武以降、世々、埴谷城に
居り、埴谷大椽と稱せらる。
景正の子左近將監、家を繼ぎ、藤原氏を娶りて、三子を擧
ぐ、長を千代壽磨と曰ひ、次を寅菊磨と曰ひ、季を孝俊と
曰ふ、寅菊磨は、即ち日親にして、應永十四年九月十三日
を以て生る、幼より、岐嶷にして、既に、成人の如し。

景正は、一に、備前守重義と書するものあり、又千代壽
磨は、一名を、壽龍磨となせるもあり、或は、千代壽龍
磨となせるもあり、一人に、二個の幼名あるも、可笑し
く、合して、一個の幼名とするも、亦、可笑し、季子孝
俊には、別に、幼名なきを見れば、壽龍磨とは、或は、

其幼名にてもあらんか、姑く、記して、後考を待つ。

法華經寺
下總國東葛飾郡中山村に在り日蓮宗の大利にして日親上人の修業せし處。



埴谷城はなやぢやう、外に、大丞山、妙宣寺と稱す。日蓮宗の一寺あり、其住職を、權大僧都日英と曰ふ、左近將監の季弟にして、寅

菊麿の叔父なり。

寅菊麿、時々、來りて、此寺に遊ぶ、日英、之れを愛すること、子の如し、夙縁しゆくゑんの熟するところ、尊法奉佛の心、頗る深く、習はざるに、經文を誦んじ、學ばざるに、法義に通ず、既に、武道を捨て、佛道に入らんと欲するの心あり。

一日、兄の千代壽麿に向ひて、其志を漏らせば、不思議や、これも、出家得道の心あり、

『然らば、是れより、父母の御許を受けん』

と告げ、兄弟、打連れて、左近將監夫婦の前に出て、恭しく、兩手を突きつ、

『我等兩人、御願ひの候、何卒、御暇を賜ふべし』

と請へば、父母、痛く驚きて、其故を問ふ、兄弟、

『我等、佛法歸依の心、止みがたく、是れより、出家とならんと存するにこそ』

と答ふれば、父母、益々愕きて、

『我家は、代々、弓矢の家なり、汝等兄弟の、武門として、家を興おこさんことをこそ望め、何ぞ、沙門として、家

を捨て、親を捨てんことを欲せんや、此事、一切叶ふ可らず』

と説き諭し、更に、聞き入るべき色もあらず、寅菊麿、膝を進めて、

『我等、武道に達したりとて、未來のためには、何にかせん、張良の智ありとも、死を免かるゝの術なく、樊噲はんけいの勇ありとも、獄卒の鐵杖を恐るゝとは、叔父の御坊の常に宣はすところ、現世の利達を望まんよりは、來世の善處を求めんこそ、我等の望みに候へ、御儀、枉まがげて許させ給へ』

と請ふ、其言ふところ、一少年の口吻に似ず、父母、之れを聞きて、且は驚き、且は感じ、

『兩人の斯くまで、思ひ込めるもの、定めて 前世よりの約束ならん、止めたりとて、止まるべきものにはあらず』

と思ひ返へして、其請ひを許せば、兄弟、宛がら、天に昇るが如くに、悦び合ふ。

埴谷は、今、山武郡陸岡村に屬す、成東町の西北二里の

本法寺

地に在り、埴谷城址の下に、一井あり、日親の誕生井と言ふ、今尚ほ存す。

二

宗流は、九派、十派あれども、本流は、一の正法のみ、左近將監、二子を託するは、宗門と言ひ、肉親と言ひ、我が弟日英の外あらずと思惟して、妙宣寺に拉へ行き、

『如何なる宿世の因縁にやあらん、これなる二子とも、只管、武門を捨て、桑門に入らんと志し、如何に諭すと雖も、思ひ止まらんやうもなし、此上は、其意に任せて、御坊に託し參らせんとこそ、存するなれ、豎子じゆし、教ゆべくば、幸ひに教養を垂れ給はれ』

と述べれば、日英、

『沙門の身、沙門に生れず、武門の人、何ぞ、武門に果つるとのみ限り候はんや、先蹤、我れに在り、後従、二子に及ぶもの、實にも、深き夙縁しゆくゑんにこそ候べけれ、熟々二子の状貌を見るに、俊爽の色、眉宇に顯はれて、嶄然の氣、頭角に現はる、他年、能く其業を遂げ、其志を成さんこと、疑ふべくも候はず、兄弟の子は、猶、子の如

し、日英、何とて、粗略に存すべきや、是れより後は、我子と存じて、充分に、教養仕つらん、幸ひに、御心安く思させ給へ』
と答へて、快然、其請ひに應ず、左近將監、更に、二子に向ひて、

『今日よりは、御坊を師と仰ぎ、親とも頼みて、萬事、其教訓に従ひ奉つれ、呉れども、氣隨氣儘の心を起して、其命に戻るまじきぞ』

と戒め、懇に、諸事を頼みて、辭し歸る、日英、送りて、玄關に到れば、二子も、亦、其後に従ひて來る、寅菊麿、突と進みて、父の袖を控へ、

『父上、我等、今日、父母の家を出て、候上は、復た親にても在はさず、子にても候はず、學業、成就せずば、再び御目に懸かり候まじ、此儀、母上にも、申させ給へ』
と雄々しくも、言ひ放てば、左近將監、大に感じ入り、

『うい奴、能くぞ申せし、日蓮聖人の清澄に在はせし時、母御の訪問を辭し給へると、其事、其志、相似たり、努め、此心掛けを忘るゝこと勿れ』

何れの天ぞ。

三

下總國東葛飾郡中山村に、正中山法華經寺と言へる巨利あり、土地の豪族富木播磨守胤繼の邸宅を開きて、建つところ、其始祖日常上人とは、即ち胤繼の法號なり。

法華經寺の第五世を、日暹上人にっせんと曰ふ、博學高德を以て開ゆ、日親、夙に、其名を聞きて、景仰措かず、

『大海を見ずんば、何ぞ、井蛙のを見を覺らん、大徳に逢はずんば、終に、野僧の臭を脱する能はず』

と思惟し、埴谷を去つて、直に、中山に到り、日暹に謁して、師弟の契を結ぶ。

日親、是れより、益々精勵して、業を學ぶ、冬夜も、寒きを知らず、夏日も、永きを覺えず、孜孜として、書を讀み、汲々として、卷を繙く。

内典外典の經疏は、夙に、讀破し去つて、自宗他宗の正邪は、明かに識得し來る、其博學多識、復た一山に、肩を並ぶるものもあらず。

從游、纔かに一兩年、應永二十九年六月、日暹、病んで寂

と諭し示して、嬉れし涙に、咽びつゝ、立ち去る。

兄弟、是れより、桑門の人となり、夜は、被を共にして眼力をして、學業、日に進み、識見、月に將む、雙鳳の翼を聯ねて、飛ぶにあらずば、兩驥を蹄の並べて、馳するにも似たらん。

冬雪夏螢とうせつかかげいの苦を積むこと若干年、今は、復た吳下舊時の阿蒙あもんにあらず、日英、乃ち應永二十七年を以て、兄弟の得度を行ひ、兄を、日國と名づけ、弟を、日親と號す、日親、時に、年、甫めて十四。

日英、齡、漸く傾きて、二人、年、漸く長ず、日英、其兄たり難く、弟たり難きを見て、更るゝ、寺主たらしめんをと欲するの意あり。

日親、夙に、大志あり、徒に、僻地に局促するを欲せず、日國に向ひて、

『我れは、別に、存する仔細の候、阿兄は、師の坊の御跡を繼ぎ給へ』
と告げ、一蓋一節、飄然として、寺を出づ、其向ふところ、

し、法弟日薩、其統を繼ぎしも、此年十月、又寂し、日有、更に、代つて、其後を承ぐ。

肥前國小城郡松尾村の松王山護國光勝寺は、法華經寺と、一根にして、實に、其第三世日祐上人の開基に係る。

抑々日祐は、佐倉の領主千葉大隅守胤貞の子なり、初め、胤貞、子なく、弟胤泰を養うて、嗣となす、既にして、一子を擧ぐるや、之れを出だして、法華經寺の第二世日高上人に託す、日祐、即ち是れなり。

爾來、胤貞、専ら外護の力を盡し、七堂を造り、五重の塔を建つ。

千葉介胤胤は、胤貞の宗家なり、足利尊氏の叛するや、初め、官軍に屬し、後、尊氏を援く。

胤胤、獨り官軍に屬して、王事に勤む、征西將軍懷良親王の西下し給ふや、胤胤、亦、従うて下る、功を以て、大隅守に任ぜられ、肥前の國を賜ふ。

日祐、乃ち法運を、九州に弘めんと欲して、肥前に下り、其封内の松尾山に、一寺を建て、松王山光勝寺と曰ふ、朝廷、特に、勅願寺となし、其主僧を以て、西海の總導師

となす。

松王山と、中山とは、兩山一寺と號す、故に、西海の總導師は、法華經寺の貫主、之れを兼ねると雖も、若し、徒弟中、卓異のものあれば、特に、選任すること、亦、之れあり。

應永三十二年、偶々總導師の缺けたるが爲めに、其補任を申し來る、日有、

『日親は、一山の英才なり、弱年なりと雖も、必ず、事に堪へん、我れ、之れを兼ねんよりは、彼れを、特選せんに若かじ』

と思惟し、一山の大眾を召して、其旨を告ぐれば、萬口一齊、

『此儀、最も然るべし』

と答へて、復た異議を唱ふるものもあらず、日有、乃ち日親を召して、

『此度汝を西海の總導師に補す、速かに、彼の地に下りて、正法の流布に勉むべし』

と命ずれば、日親、即座に、

『委細承知仕つりぬ』

と答へて、敢て、之れを辭せず、日親、時に、年十九。

一山には、高德の老僧あり、博學の英僧あり、有爲の俊才、亦、少なしとせず、然るに、日親の一少年を以て、一躍して、此大任を命ぜられたるもの、如何に、才學の絶倫なりしかを察するに足らん。

四

日親、既に、西海の總導師となる、尸位は、其恥づるところ、素養は、其欲せざるところ、平生の理想を、實行するは、此時に在りとし、急に、旅裝を調へて、九州に向ふ、此れより、自ら號して、久遠院日親と曰ふ。

日親の理想は、實に、日蓮聖人の遺志を繼ぎて、其遺業を興さんと欲するに在り、頓て、肥前に著して、光勝寺に入るや、日親、

『抑々當寺は、正法を九州に弘布せんが爲めに、特に、祐師の建立し給へるところ、若し、之れを懈り、之れを忽せにせば、是れ、正法の罪人にして、又祐師の罪人なり、夫れ法華折伏、破權門理とは、我が立宗の本義なり、

と決意して、斷然、破邪顯正の鐵錘を、揮はんと欲す。

左れども、松尾山は、山間の僻地にして、諸人來往の衝路にあらず、日親、

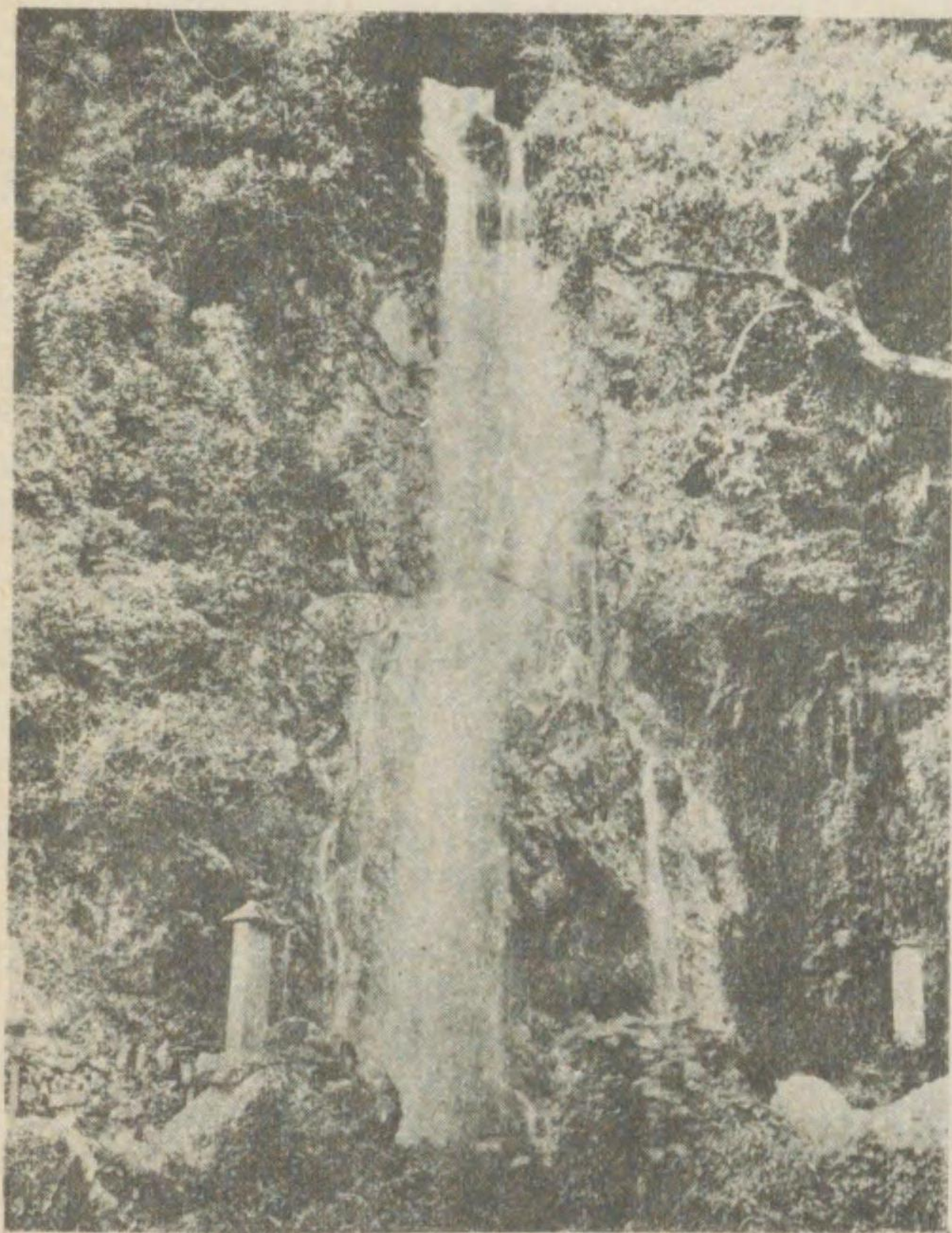
『鎌倉の小町には、比すべくもあらねど、竹原の外に、然るべき場所もあらず』

と思ひ、愈々松尾山を距ること、一里ばかり、竹原と言へる土地を下して、路傍の説法を行ふ。

日親、年少氣銳にして、水火をも怖れず、死生をも念とせず、三大秘法を説き來つては、本化妙法の眞理を示し、四箇格言を論じ去りては、爾前諸經の邪義を破す、英氣、颯爽として、宛がら、日蓮聖人の風手を、眼前に見るか如し。來往の老若男女、其周圍に、群がり集まりて、之れを聴き、或は怒り、或は罵り、又或は躍り喜ぶ。

日親、是れより後は、朝に、竹原に出で、夕に、松尾山に還る、風吹けども、怯まず、雨降れども、怠らず、遠近より、來り聴くもの、亦、日一日より多し。

地頭千葉彌次郎胤鎮は、大隅守胤貞の曾孫なり、初め、日親の若年なるを見るより、



清水瀧
肥前國小城郡岩松村の天山に清水瀧あり高三十五丈にして祇園川の水源をなせり護國光勝寺は此村の松尾に在り因りて此に掲ぐ。

高祖聖人、鎌倉に在はすの日は、日々に、小町大路の大道に立つて、邪宗權教の破折に力め給ふ、是れ、我れの宜しく學ぶべく、倣ふべきところ、イデヤ、是れより、毒鼓を鳴らして、逆化を施さん、三類の法敵、起らば起れ、諸宗の暴民、來らば來れ、我れに於て、何かあるべきぞ』

『中山には、名僧もあり、老僧もあらんに、何とて、斯かる黄口の雛僧を、差下せるやらん』

と思ひて、心、窃かに、之れを危ぶむ、今や、日親の盛んに活躍せるを聞きて、且は驚き、且は感じ、

『扱ても、弱年にも似ぬ英僧かな、高祖聖人の當時、鎌倉の大路小路に立つて、廣長舌を揮ひ給へるも、斯くやありけん、我が法運、是れより、益々開けんこと、疑ふべからず』

と思惟して、始めて、日親の非凡なるを覺る。

爾來、日親、尙も、盛んに、折伏教化を行ふ折りしも、一大危難、圖らずも、其頭上に、落下し來る。

五

實にも、法華經は、如來現在、猶多怨嫉と説かれたる法門なり、何時の世、何處の邊にか、法敵なからん。

日親の折伏教化を始めたる以來、四圍の形勢、日一日より、穩かならず。

一日、日親、又も竹原の路傍に、突つ立ちつゝ、滔々として、念佛の無間を破し、禪宗の天魔を説き、眞言の亡國、律

宗の國賊を論難す。舌端、風を生じて、論鋒、巖をも碎かんとす、意氣熱烈、當るべからず。

諸宗の信徒、今は、愈々激昂し來り、或は、罵詈を加へ、或は、瓦礫を投ず、日親、自若として、更に、恐るゝ色もあらず、屹と、四方を、見廻はしつゝ、

『善い哉、我れを罵詈し、我れに我石を投ずること、夫れ法華經は、若信若謗、共成佛道の法門なり、之れを信ずるものも、成佛せしめん、之れを謗するもの、亦、成佛せしめん、謗せんよりは、信ぜよ、信ぜざらんよりは、寧ろ謗ぜよ、我れを罵詈せんものは、其舌より成佛せしめん、我れを打擲せんものは、其手より成佛せしめん、我れを睨め、我れを蹴らんものは、其眼、其足より成佛せしめん、我れは、罵詈をも厭はず、瓦石杖木をも厭はず、是れ、皆、法華經の行者の色讀すべき經文なるぞや』大聲疾呼、説き去り、説き來りて、獅子の吼ゆるが如し、多數の法敵、何れも、切齒し、扼腕して、今に見よと、罵り叫ぶ。

既にして、天も昏れ、衆も、亦、散ず、日親、即ち法筵を

撤して、唯一人、松尾山に、立ち還る。

且ある森陰に、差し懸からんとする時、忽然として、鐘聲、鳴り響く。

日親、素破やと思ふ途端、數百の伏勢、前より、後より、ドツと、現はれ出で、日親を取り圍み、口々に、

『己れ佛敵、思ひ知れや』

と旬りつゝ、各々柄物々々を揮うて、撃つて掛かる。

身は、既に、敵軍包圍の中に落つ、一重を突破するも、尙、十重廿重あり、日親、心、豪なりと雖も、力、敵せず、アワヤ、邪見の杖下に倒れんとす、折りしも、

『憎くき暴民共の振舞かな、容赦はならじ』

と呼はりつゝ、驀地に、馳せ來れる一士、大刀を揮うて、縦横無盡に、斬り立て、薙ぎ立つ、荒れに荒れたる其狀、阿修羅に似たり。

多數の暴民、其れと見るより、忽ち前後左右より、撃つて懸かる。

此方の武士は、事ともせず、尙も、勢銳く、斬り立つれば、烏合の暴民、忽ちバツと、四方に、散じ去る。

彼の武士、眞一文字に、馳せ進めば、一人の法敵、今しも、竹槍を揮うて、日親を刺さんとす、危機、既に迫る。

それと見たる彼の武士、アナヤと叫んで、馳せ寄り、忽ちサツと、一刀の下に、斬り捨て、

『嬉れしや、御恙ましまさざりしか、某に候』

と言ひつゝ、日親の前に平伏す、これ抑も、何者ぞ。

松尾山は、肥前國小城郡松尾村に在り、今は、岩藏村と合併して、岩松村と改む。

六

地頭千葉彌次郎胤鎮の家臣平田小十郎なるもの、夙に、日親の英資に服す、此頃、法敵の形勢、不穩なるを知りて、其れとなく、掩護を加ふ。

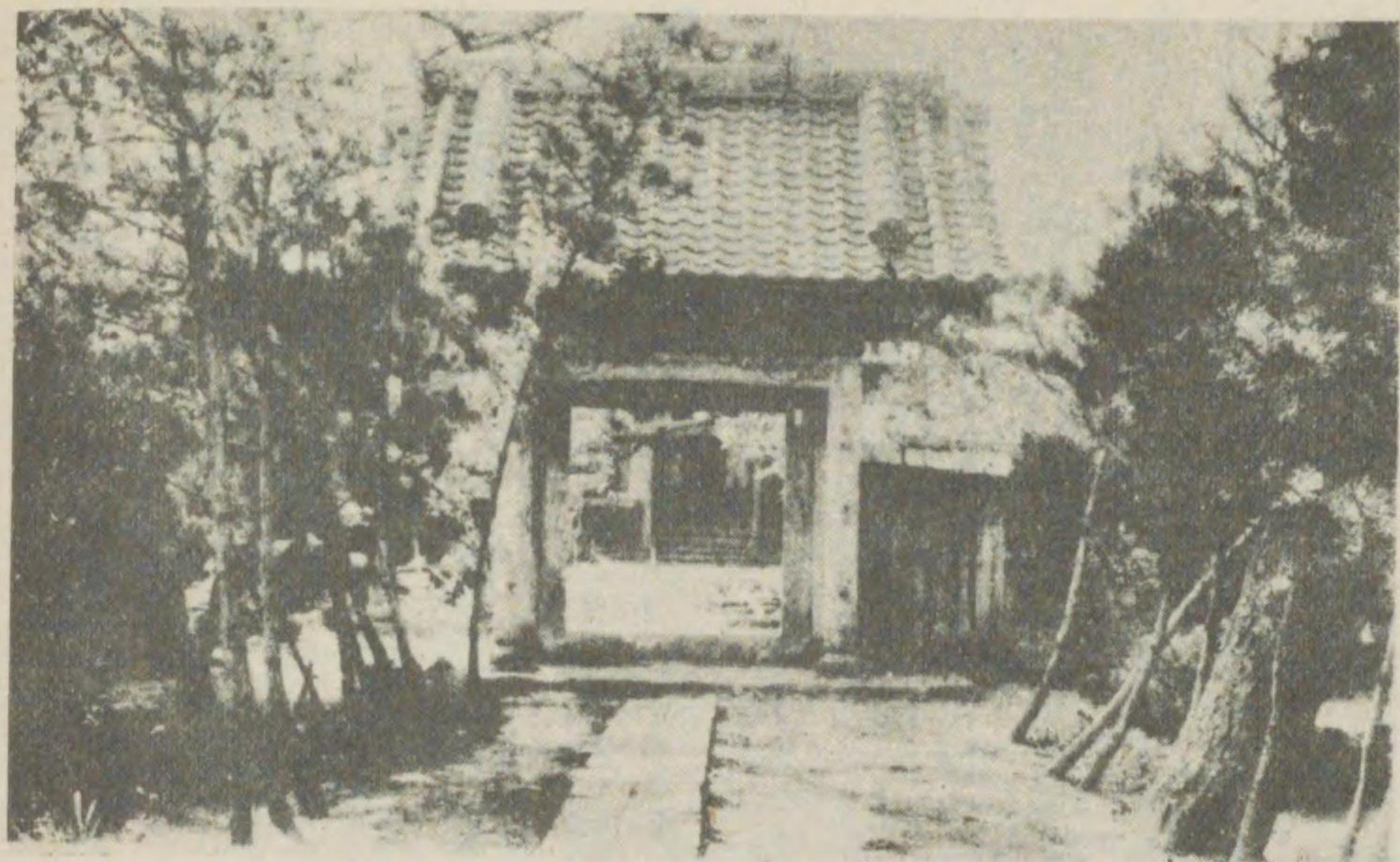
此日、法敵の日親を要撃するや、見え隠れに、尾け來れる小十郎、それと見るより、何かは、躊躇せん、忽ち大刀を、抜き翳しつゝ、猛然として、多勢の中に斫り入る、其勢、猛虎の群羊を驅るか如く、見る／＼、暴民を逐ひ散らして、日親の傍に、馳せ到る。

今しも、最後の一敵を斃して、日親の前に、平伏せるは、

即ち此十郎、

妙隆寺

妙隆寺は相模國鎌倉郡鎌倉町の小町にして日親の弘通所たりし處。



『小十郎、斯くて候からは、御心安く思させ給へ、イザヤ、送り奉つらん』

日親の塵を拂ひ、其手を取りつ、松尾山に送り届く。

日蓮聖人の時には、小松原の法難あり、今は、乃ち竹原の法難あり、小十郎の義氣勇力、彼の工藤左近丞吉隆

に優るとも、劣るところなし。

工藤左近丞吉隆とは、小松原に於て、日蓮聖人の危難を救ひて、戦死せし人。

檀徒、信徒は、日親の奇禍を免かれたるを悦び、且、暫く、教化を停めんことを勸む。

豪壯の日親、頭を掉つて、更に、聞き入れず、

『此法門は、不自惜身命の法門なり、我れは、出家の始めより、既に身命を法華經の御爲めに、獻つらんこと、期せるもの、斯かる危難に遭ふこそ、本懐なれ、臭骸を、法華經に捧げて、成佛せんこと、石を以て、金に換へ、糞を以て、米に換ふるに均しとは、高祖聖人の常に宣はせるところぞ、我意、夙に決す、復た言ふこと勿れ』と説き諭し、尙も、竹原の大道に出で、盛んに、毒鼓を打つ、其意氣、更に、一層の猛烈を加ふ。毒を、鼓に塗りて撃てば、聞くもの、皆、死すと言ふこと、涅槃經に見ゆ。折伏逆化を以て、法敵を撃倒するに譬ふ。

諸宗の信徒、此意氣に、壓倒せられて、皆、屏息し、復た

襲撃せんと、企つるものもあらず。

胤鎮、大に日親の熱心に感じ、新に、一字を、竹原に建て、其弘通所に充つ。

日親、乃ち竹原山妙覺寺と號し、此處を、根據として、益々傳道弘法に力むること一年餘、信徒、日一日より加はる。

日親、熟々法門の前途を思ひ、一身の重責を想ひて、大に決意する所あり、

『高祖聖人、末法の世に出で、無上の法を弘め、屢々巨難を冒して、頻りに、三類を責め給ふ、我れ、其法脈を汲んで、遺業を興さんとす、何ぞ、大に發憤努力せざるべけんや、身は軽く、法は重し、身を死して、法を弘むるとは、如來の遺勅にして、又我等の天職なり、之れを成すの道は、唯、忍の一字に在り、我れ、是れより、一旦、中山に歸り、大に忍力を養ひて、更に、法門に殉ぜん』

急に、法務を處理して、法華經寺に還り來る、時に、應永三十三年の秋、日親、年、正に二十。

七

日親の志業は、遠大にして、其意氣は、勇猛なり、日蓮聖人の心を心として、大に法華經を弘布せんと欲するもの、中山に歸り來るや、

『若し、日親の所存の如くに、法華經を弘めんと欲せば、三類の法敵、競ひ起りて、日本國中、盡く仇敵とならんも、亦、知るべからず、然れども、法を壞ぶるものあるも、之れを恐れて、責めずんば、佛法中の怨たるを奈何せんや、我不愛身命、但惜無上道とは、如來の宣はせる所にして、我等の服膺すべき所、苟くも、一切の衆生を助くるを得ば、何ぞ、區々たる我が身命を愛まんや、是れより、佛祖に、誓ひを立て奉つり。感應の驗を蒙むりて、弘通の功を立てん』

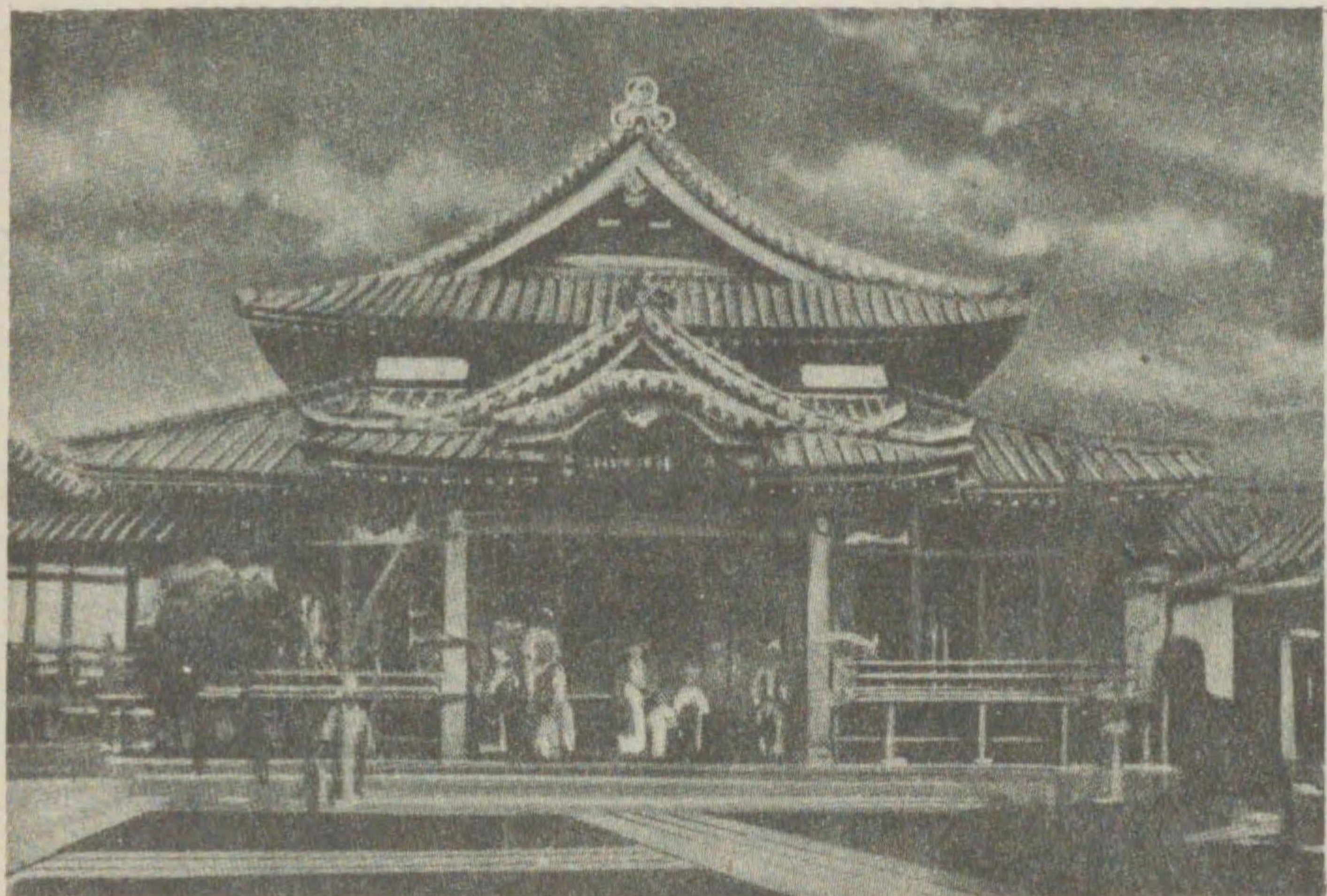
と決意し、此年九月より以來、夜々、更闌け、人靜まれる丑滿の頃を計りて、唯一人、祐師山に到る。

祐師山とは、歷代廟所の在る處、山邃く、樹茂りて、晝も、尙、暗きに、況して、夜中は、冥色、深く鎖して、物色を辨せず、苔に滑り、石に躓づきて、歩みを移すさへ、容易

にあらず。

暗中、形なくして、聲あるは、鴟梟か、天狗か、草間、風なくして、戦

法性寺の本堂は筑前國博多に在り日親の開基に係る。



ぐは、狐狸か、妖魔か、霜威、膚を刺して寒く、鬼氣、人を襲うて凄じ。斯かる處、斯かる時には、猛き武士さへも、魂消え、膽潰るゝに、生死の外に、超然たる身は、自若として、恐るゝ色もなく、憶する心

もなし、或時は、風雨を浴び、或時は、氷雪を履んで、此處に、通ひ來ること、既に九十九夜。

今日は、愈々満願の夜となる、天には、月なくして、星の光のみ輝き、地には、風なくして、樹の聲までも死す。

日親、立ち並ぶ石塔の前に、端坐しつゝ、徐かに、祈念すること少時、頓て、朗々として、自我偈を誦すれば、不思議なるかな、數人の聲として、一齊に、

自我得物來、所經諸劫數、無量百千萬、憶載阿僧祇、

と唱へ出だす、日親、ハテナと思ひて、四邊を、見廻せば、人もあらず、聲も、亦、歇む、

『若しや、狐狸、妖怪なんどの、日親の心を引き見ん爲めにや』

と思ひつゝ、又も、跡を誦じ出だせば、彼方も、亦、同じく、

常說法教化、無數億衆生、令入於佛道、爾來無量劫、爲度衆生故、方便現涅槃、

と唱へ續く、我れ、止むれば、彼れも亦、歇め、我れ、唱ふれば、彼れも、亦、和す、其聲、玲瓏透徹、自から人間

に似ず。

日親、耳を澄まし、心を鎮めて、能く聽けば、何ぞ計らん、數基の石塔、聲を揃へて、日親の誦經に、和せるものならんとは、

『扱は、高祖聖人以下の尊靈、正しく、感應せさせ給へるならん、大願の成就、疑ひなし、あら嬉しや、辱しけなや』

日親、信心、益々肝に銘じて、尙も、繰り返し、自我偈を誦じ了ること、總て百遍。

石塔の中、別けて、御聲高く、貴く聞ゆるものあり、夜暗うして、其形を見ること能はず、日親、突と立ち寄りて、其石塔を、抱き倒し、

『唯、目印まで、斯く仕つるにて候、天、明けなば、再び來りて、起し奉つらん』

と念じ、尙も、將來の擁護を、祈りて、立ち去る。

ハ

翌日、日親、天の明るるを得ちて、祐師山に、往き見れば、昨夜、我が倒せしは、第三世日祐上人の石塔なり。

日祐は、即ち松光山光勝寺の開山なり、二十五歳より、八十歳に至るまで、自行他行、俱に、唯の一日だも廢せず、妙經の讀誦、一萬二千七百九十八部、開經二千六百十一部、結經二千六百九部に及びて、世に、日蓮聖人の再來なりと稱せらる。

日親、其れと見るより、心中の歡喜、言ふばかりなし、

『扱は、祐師、我れを、加護せさせ給ふと覺えたり、法華經弘通の大願、成就せんこと、疑ひなし』

と思へば、急ぎ、石塔を引き起して、砂を拂ひ、水を供へ、恭しく、其前に坐して、合掌禮拜しつゝ、

『此上は、愈々身命を擲つて、衆生の爲めに、法華經を弘通せん、閻浮即淨土は、高祖聖人の願業なり、日親、不敏と雖も、亦、此に力を致さん』

との大勇猛心、大精進力を發起し、喜び勇んで、立ち還る。閻浮とは、世界の事なり、世界中を擧げて、極樂淨土となさんこと、是れ日蓮聖人の一大理想なり。

既にして、其年も暮れて、應永三十四年となり、日親、此に二十一歳の春を迎ふ、日親の大に法天佛地に活躍すべき

時機、今や、愈々来る、

『今や、三類の法敵、天下に滿つ、俗衆増上慢あり、道門増上慢あり、僭聖増上慢あり、其勢力、其權威、寧ろ高祖聖人の御時に優るとも、減ずることなし、日親の獨力之を破折せんこと、單身、大敵に當り、赤手、大山を支へんよりも難し、千艱も來らん、萬難も、亦、起らん、若し、中途にして、不惜身命の志を空しうせば、死すとも、以て冥すべからず、イザ、左らば、如何ばかりの辛苦甘酸に堪へ得るか、忍力を、試めし見ん』
と思ひ定む。去るにても、如何なる手段方法を以て、試むべきか、日親、左思右考すること少時、

『樂法梵王は、皮を剥ぎ、藥王菩薩は、臂を燒き、善財童子は、火に入り、師子尊者は、頭を刎ねられ給ふ、樂法、藥王の苦を、忍ばんずば、争でか、善財、師子の厄に、堪ゆべき、好しく、我れに工風あり』
と打ち領づき、釘拔を以、自ら我が手指の爪を、引き抜くこと、一日に一個。

今日は、左の拇指の爪を抜き、次の日は、示指の爪を抜き、

萬鈞の石よりも重し。

九

日親、既に、志を決す、其足を擧げんこと、不日の中に在り。

一夜、書窓に對して、經卷を繙く、睡魔、忽ち昏々として、萌し來り、夢とも、現とも、分かぬ折りしも、不意に、

『日親々々』

と呼ぶものあり、日親、ハツと、驚きて、頭を擧ぐれば、一老僧、儼然として、數歩の前に立つ、氣品、最と尊し。

『日親、汝、高祖聖人の御志を紹きて、妙法弘通の決意を起し、如何なる艱難にも堪へ、辛苦をも忍ばんと存ずること、其志、頼母しとも頼母し、高祖聖人之れを嘉みして、弘通の印を、授け給ふ、是れ御祈禱鈔の一大事を書き給へる時に、据ゑさせたる御判なるぞ、汝一期の間、之れを用ゆる時は、假令、如何なる艱難、如何なる辛酸に會ふとも、何の苦惱もなく、何の煩悶もなく、終に、弘通の大願を、成就致さんずるぞ、我れは、當山第三世の嗣法日祐なり、唯今、高祖聖人の御使として、來れり、

本法寺

其次の日は、更に、中指の爪を抜く。

左手の爪を、抜き盡して、更に、右手に及び、十日にして盡く十指の爪を、抜き去る、其狀、蝟の足に似たり。
日親、之れを以て、足れりとせず、更に、釘を以て、爪跡を、ツブリくと突き刺し、滴々たる鮮血を、硯池に受け、曼荼羅を書す。

日親、更に、水を沸かして、熱湯となし、煮え練り返る鍋を卸して、兩手を、突と、中に差入れ、徐かに、自我偈を誦じつ、其湯の冷むるに至りて、歇む。

兩手、忽ち糜爛して、肉は破れ、血は流るゝと雖も、日親、更に、意とせず、尙も、續いて、熱湯に浸すこと、總て七日、何時しか、傷は癒え、痛は去りて、爪も、亦、元の如くに生ず、日親、

『扱も、法華經の功德の尊さよ、我れ、既に、此苦痛に堪へたり、今後、如何なる艱難に、遭へばとて、何か有るべき、此上は、飽くまでも、法の爲め、道の爲めに盡さん』
と固く思ひ極む、其心膽、百鍊の鐵よりも堅く、其決意、

有りがたく、頂戴せよや』

と告げて、一顆の判形を授く、日親、大に喜びて、これを押戴くよと見れば、夢、忽ち、ふつと覺む。

日親、奇異の想を爲し、急ぎ佛前なる香爐の灰を、均らし、其形を寫し、更に、之れを印材に刻す。

抑々祈禱鈔は、文永九年中、日蓮聖人の佐渡に在りし時、自ら書して、最蓮房に與へられたるもの、其中に、

『天は、必ず、戒を持ち、善を修する者を守る、人間界に、戒を持たず、善を修する者なければ、人間界の人、死して、多く修羅道に生ず、修羅、多勢なれば、驕りをなして、必ず、天を侵す、人間界に、戒を持ち、善を修する者多ければ、人、死して、必ず、天に生ず、天、多ければ、修羅、恐れをなして、天を侵さず、故に、戒を持ち、善を修する者をば、天、必ず、之れを守る』
との文字あり、又

『此經法華經の文字は即ち釋迦如來の御魂也、一々の文字は、佛の御魂なれば、此經を行せん人をば、釋迦如來、我が御眼の如く、まほり給ふべし、人の身に影の

添へるが如く、添はせ給ふらん』

との文字ありて、宛がら、聖人の口づから、戒められ、目のあたり、勵まざるゝが如きの想ひあり、日親、

『喜ばしや、我が畢生の大願、愈々成就せんこと、疑ひなし』

と思へば、一道の光明、赫々として、我が前途を照らすを覺ゆ。

日親、又日祐上人より、夢中に、大曼荼羅の内、首題法蓮の二子の筆法を傳へられ、其意氣、精神、爲めに、益々振ふ。

十

日親、今や、不思議の靈夢を蒙りて、意氣、益々振ひ、終に、貫主日有の許可を得て、中山を立ち出づ。

鎌倉小町大路に、妙隆寺と言へる一刹あり、日親の師日英の開基に係る、日親、先づ鎌倉に入りて、妙隆寺に、足を停むること若干日。

日蓮聖人の當時は、將軍、鎌倉に在りて、天下の政權、此地に存す、今は、星移り物換はりて、將軍も、京師に居り、

天下の政令も、亦、其地より出づ、鎌倉は、唯、關東の管領あるに過ぎず、苟くも、大に國家を諫曉せんと欲せば、京師を措きて、他に、其地あるべからず、是に於てか、日親、更に、鎌倉を去つて、京師に入る。

日親、往きて、一條堀川に到れば、一橋あり、是れぞ、和泉式部の

何處にも歸るさまのみ渡ればや

もどり橋とは人の云ふらん

と詠じたる辰橋、往古、三善參議清行の子淨藏主、紀州熊野に在り、父の疾篤きを聞きて、倉皇、馳せ歸り、此橋に到りて、ハタと、其柩の來るに行き逢ふ、淨藏主、大に悲み、靈柩を、橋上に留めて、専心念持すること少時、清行、忽然として蘇生し、淨藏主と與に、歩いて、四條堀川の邸に歸り來る、是れより、此橋を辰橋と名づくと言ひ傳ふ。日親、其地名を聞きて、心に會する所あり、橋畔に、大なる一石の横はれるを見て、

『這は、如何なる石なりや』
と問へば、傍人、

一條とは、一乘の大法なり、辰橋とは、挽回の端なり、

即ち一乘妙法に、引戻すの端なり、喜ばしき哉、妙法回

法性寺の日親堂

法性寺の日親堂此れは法性寺開山堂にして日親の廟なり。

復の端緒、

今日より開

けん、争で

か、之れに

過ぎたる辻

占あるべき』

と思ひ、獨り、

莞爾として、

打ち微笑む。

鎌倉小町妙

隆寺は、千

葉大隅守胤

貞の舊地に

在り、日英

を、始祖と

し、日親を、

と語る、中宮とは、安徳天皇の御母徳子の御事にして、二位殿とは、平相國清盛の夫人時子の事なり、日親、聞きて、頷ぎきつ、

『扱も、我が爲めに、好き辻占かな、昔者、日像上人の

京師に入らせ給ふや、五條の橋邊に於て、始めて、妙法

を弘通させ給ふ、當時、上人の教化に漏れしものあり、

一旦、其教化に入りしものも、亦、年を経て、漸く減退

せんとす、我れは、乃ち大に此法運を挽回し、且、更に、

益々擴張せざるべからず、夫れ五條とは、妙法蓮華經の

五字なり、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩の五條なり、

上人の始めて五條に於て、弘通させ給ふもの、其旨深

し、我れは、乃ち今より、此一條辰橋に於て、弘通せん、

し、我れは、乃ち今より、此一條辰橋に於て、弘通せん、



二祖とす、實に日親在世中に於ける鎌倉の弘通所たり、十八世日修までは、七十五ヶ寺の本山として、法輝赫灼たりしに、元和、寛永の頃、天下の法に觸れたるの故を以て、既に、廢寺とならんとせしを、中山法華經寺の末寺分と稱して、纔に寺號を存すを得たり、同寺の寺記に依れば、日親の忍辱の行法、及び種々の苦行をなせるは、同寺に在る時なりとし、寺中に、其遺跡、並に爪切の曼陀羅ありと云ふ、本篇の中山に於ける事實とせしは、徳行記に由る。

十一

時は、應永三十四年二月八日、日親、愈々折伏弘通の旗を掲げて、權教退治の軍を起す。是れより、彼の石上に、突つ起ちつゝ、毒鼓の響、鑿々として、大に他宗の邪義を痛撃す、舌鋒從横、當るべからず、觸るゝ所、皆、碎く。

近傍の市民、其説法を聞きて、大に憤激し、日は、昏るれども、宿を貸さず、天は、明くれども、食を與へず、日親、『渴しても、盜泉の水を飲まずとこそ、言ふなれ、我れ、

何ぞ、謗法の穢を受けんや』

雨露をも厭はず、飢渴をも意とせず、此石上を家とも頼み、席とも思ひて、日夜、折伏を行ふこと、更に、益々烈し。

日親、今日も、石上に起ちて、周圍の聽衆を、見渡しつゝ、『末法五百年には、東より西に入る、朝日の東天出づるに似たりとは、經文に説かせ給へる所にあらずや。

高祖日蓮聖人の、佛勅を奉じて、正法を、關東に弘通させ給ふもの、是れ、猶、旭日の東天に出づるが如きなり。日像上人の、高祖の遺命を奉じて、正法を、京師に弘通せさせ給ひ、今や、日親の、更に高祖の遺教を奉じ、像師の遺響を繼ぎて、將さに、再び大に正法を此地に弘通せんとするもの、是れ、豈、東より西に入るにあらずして、何ぞや。

天日は、一ありて、二なく、亦三なし、佛法、亦、然り、如來、之れを説きて、唯一乗の法のみあり、二なく、亦三なしと宣はせるぞ、一乗の法とは、即ち正法なり、法華經なり。

末法萬年に流布するものは、實に、此一乗の妙法あるの

起して、氣焰、虹の如し、周圍は、忽ちに、動搖めき始む、彼方の一隅より、一聲高く、

『賣僧奴、黙れ』

と叫ぶと齊しく、石を投ずるもの、瓦を飛ばすもの、下駄、杖木を擲つもの、紛々として、雨の如く、霰の如く、罵詈の聲、憤怒の音、亦、雜然として起る、日親、

『我れは、忍辱の鎧を著け、慈悲の兜を被りて、手には、妙法の利劍を提さぐ、何ぞ區々たる法敵を恐れて、口を嚙み、身を逃れんや。

身は軽く、法は重し、身を死して、法を弘むるもの、是れ、我が法門の本懐、我が宿昔の願業なるぞ。

苟くも、衆生を助け、國家を救はゞ、我れは、死すとも、以て憾みなし。

來れ、來れ、有縁のものも、濟度せん、逆縁のものも、亦、化導せん』

意氣、昂然として、尙も、獅子吼を續く、三類の敵法、皆、爲めに、墮若たり。

み、如來も、爾前四十餘年の法は、皆、方便として、正直捨方便と説かせ給へるにあらずや。

法華以外の諸宗は、皆、方便なり、權教なり、如來の捨て給へる方便、權教を信じて、何ぞ、能く成佛すべきや、滔々、相率ゐて、阿鼻大城に墮せんこと、疑ふべからず。憐れむべき哉諸子、諸子の爲せる所は、只管、阿鼻大城に墮せんことを希ふべき誤まれる信心、誤まれる手段なるぞや。

阿鼻大城とは、何とか思ふ、一たび墮すれば、未來永劫、復た出づること能はざる無間地獄の事なりと知らずや。速かに、邪宗を捨てよ、速かに、權教を止めよ、之れを捨て、之れを止めて、正法に歸順せよや。

旭日、出づれば、群星、影を滅す、今や、正法の旭日、東より出で、西を照らす、群星、何ぞ、影を滅せざらんや。

仰いで、天を見よ、彼の赫々たる大日輪の外、何處に、一點の星かある』

と言ひつゝ、高く、右手を舉げて、天を指す、快辯、風を

十二

陽氣、發するところ、金石、亦、透る、熱誠、逆しるところ、何の障礙か摧けざらん、破折數月、日親の熱辯に感じて、正法に歸依するもの、漸く多し。

攝州島上郡梶折村に、宇野孫左衛門、西村彦兵衛と言ふものあり、所用ありて、上京し、一條戻橋を、通り掛りて、計らずも、日親の説法に、耳を傾け、宿善の催ほす所、忽ちにして、正法に歸す。

一花開きて、萬花開き、一波動きて、萬波動く、日親、是れより、折伏逆化に力むること、更に數層、正法の徒は、益々信仰の心を加へ、邪宗の徒は、次第に、讃仰の志を起して、京師の教風、再び日像上人の舊時に、復し來る。

孫左衛門、彦兵衛の二人、其所用果て、故郷に歸らんとし、日親に謁して、

「我等は、上人の説法に依りて、正法に歸し候へども、我が郷里には、我等と同じく、眞言亡國の徒、最も多し、願はくば、是れよち、我が郷里梶折村に往きて、一家一門、並に一村のものをも、教化し給ふべし、誠に、大慈

大悲の御利益にこそ候べけれ』

と請へば、日親、其意に應じて、俱に、梶折村に至る。村に、金仙寺と言へる眞言の寺院あり、孫左衛門と彦兵衛の二人は、本と、此寺の檀越たり、他の檀徒、亦、日親の説法を聴き、二人の勧誘に應じて、我れもくと、改宗するもの、少からず。

寺僧、大に驚きて、百方、檀徒を引き留めんとす、中なる一人、

「我等は、愚昧にして、孰れが眞の法門なることを知らず、此上は、日親法師と、法問を試み給へ、我等は、其勝ちたる方に、歸し候はん』
と言へば、寺僧、

「此事、如何にも、道理あり、左らば、我れ、法問を以て、彼の法師を屈伏せしむべし』

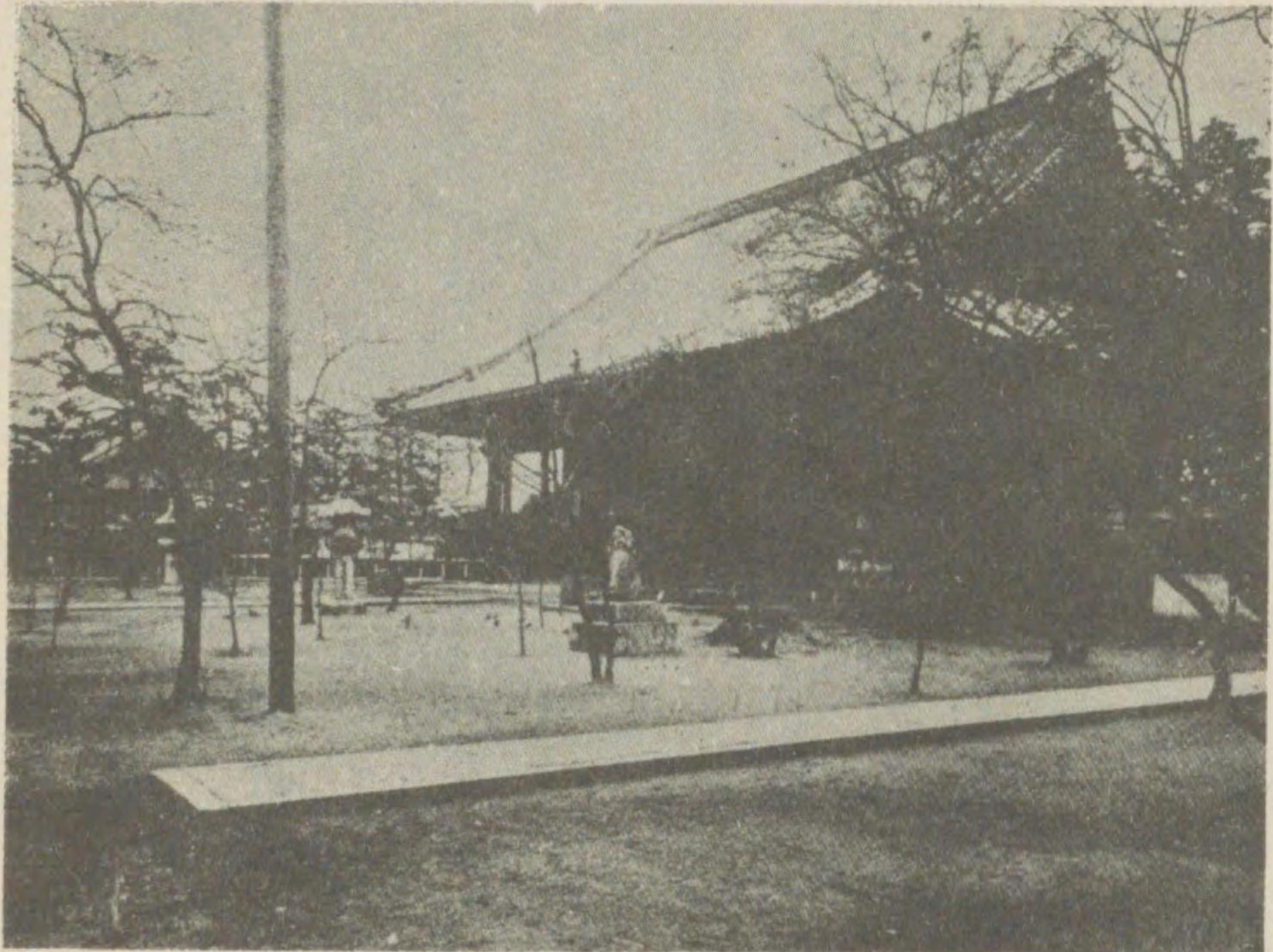
と答へて、檀徒に別れ、其夜の中に、寺を脱して、何處へか、立ち去る、今まで、形勢を觀望したる他の檀徒、亦、盡く日親に歸す。

今は、寺はあれども、住僧もなく、檀徒もなし、此儘、捨

て置かば、殿堂、益々荒れ果てん。

本國寺

京都市東山區柿本町に在り本と鎌倉松葉ヶ谷に在りし日蓮聖人最初の道場なりしに足利尊氏の時京都に移す。



是に於て、孫左衛門、彦兵衛の二人、他の檀徒と謀り、金仙寺の全部を擧げて、日親に委す。日親、乃ち改めて、昌林山

一乗寺と號し、廢殘の殿堂を毀ちて、新に、一字の説法所を設く、是れぞ、京華弘通に於ける道場建立の權輿なる。寺に、二體の毘沙門天あり、日親、更めて、開眼を行ひ、一乗教王の行者守護神として、益々盛んに、教化を行ふ、一村の男女、是れより、風儀を改め、他宗の老若、亦、傘下に來り集まるもの多し。

梶折村は、一に、梶原村とも曰ふ。上牧村と合して、五領村と言ふ、東京芝區金杉濱町正傳寺の毘沙門天は、此内の一體なりと言ふ。

十三

梶折村附近の形勢、粗々定まる、日親、更に、西國に、遠征せんと欲し、正長元年、西村彦兵衛の船に、便乗して、筑前の博多に到る。

海原は博多の浦にかゝりける

唐土舟の時つくるなり

とは、此地を詠したるもの、古來、西海第一の要津として、韓船唐舶の來泊せし處、其繁華、夙に、西國に冠たり。日親、乃ち錫を此處に駐め、又も、一乗妙法の幡を建て、

權實論談の鼓を打ちて、盛んに、折伏の熱辯を揮ふ。

三類の法敵は、天下到る處に在り、日親の破折逆化を行ふ毎に、罵詈の聲は、耳朶に滿ち、瓦石の彈は身邊に集まる。左れども、慈悲の頭には、忍辱の堅甲あり、信力の手には、妙法の利劍あり、日親、屈せず、撓まず、縦横無盡に、奮闘すること數月、信徒、次第に歸伏し來る、因りて、新に、一寺を建て、修昌山法性寺と曰ふ。

先きに、日親十九歳の時、西海の總導師として、肥前の松玉山護國光勝寺に在り、挺身奮闘、大に、正法の弘通に、力を注ぐ、然るに、爾來、纒かに四ヶ年、早や、權教に歸復するもの、少からず、日親、之れを聞きて、

『扱も、變り易きは、人の心かな、末法弘通の道は、容易にあらず、イザ、左らば、再び彼の地に往きて、宗勢を挽回せん』

と決意し、又も、進んで、肥州に入る。

日親の熱誠と、雄辯とは、今、尙、世人の耳目に新たなところ、再び、其英姿を十字街頭に現はして、釋尊の正意を論じ、蓮祖の本志を説くや、見るもの、皆、

十四

日親、更に、諸所を巡化して、相の浦に到る、信徒の來り歸するもの多し、日親、乃ち一寺を建立せんとする、里人、

『此處は、昔より、用水、不自由の土地に候、御寺を御建立あらせ給はんこと、叶ひ候まじ』
と言へば、日親、

『其儀は、仔細なし、孰れも、氣遣ふことあるべからず』と答へ、直に法味を供へて、諸佛諸天に祈請すること數刻、靈泉、忽ち滾々として、巖下より噴き出づ、觀る者、皆、感嘆せざるはなく、里人の歸依するもの益々多し。

是れより、一字の寺院を、建立して、稱妙寺と名づく、里人、亦、此靈泉を稱して日親師の水と言ふ。

日親、尋で、唐津に遊化し、此處にも、亦、法蓮寺と稱する一寺を建つ。

既にして、日親、松尾山を辭して、博多に歸らんとし、各地を巡錫して、豊後植田の郷に到る、一峯あり、靈山と曰ふ、巍々として、半天に聳え、白雲、飛んで又還る。

往時、天竺の僧那伽なるもの、此山に登りて、其風光を望

『日親法師、復た來給へり』

と驚き怖れ、三類の法敵は、忽ちにして、誹謗罵詈の口を鎖し、一宗の僧俗は、頓に、權實雜亂の誤を改む。

奮闘の士には、活氣あり、嚴正の人には、權威あり、日親の此地に來りてより、日、未だ久しからず、正法の旗幟、燦乎として、復た大に振ふ。

松王山の東南に、三箇島里と稱する一邑あり、日親、近村の巡化を試みると欲して、此地に來る。

其山上に、平潤なる大石あり、日親、乃ち其石上に坐して、説法を行ふ。邑人、聞き傳へ、語り傳へて、來り聽くもの、日一日より多し。

日親、益々精神を注ぎて、教化を施すこと數日、老幼男女の請うて、聖化に入るもの、少からず。

日親、終に、一字を建立して、石岡山妙福寺と號す。

其後、之れを嘉瀬町に移し、更に、江戸に移す、谷中坂町の妙福寺、即ち是れなり。

英將の過ぐるところ、諸城、風を望んで、降るの概あり。

み、忽ち愕然として

『我が驚峰、何れの年か、此處に、飛び來る』

と驚き嘆じ、終に、錫を留めて、一寺を建て、稱して、靈山飛來と言ふ。

日親、亦、其山容樹色の、人間にあらざるを見て、此に登臨し、

『奇なる哉、此山、一乗妙典に、緣あり、我れも、亦、一寺を建て、正法の弘通を圖らん』

と思ひ、又一字を建て、親蓮寺と曰ふ、後、大友一門の香華院となる。

勇將の向ふ所は、諸城、風を望んで潰へ、名僧の向ふ所は、衆生、錫を迎へて伏す、日親の一たび九州を巡化してより、正法、頓に、四方に弘まる。

日親、博多に、歸り來りて、破邪顯正の熱辯を揮ふこと數月、終に、法性寺を、嫡弟日祇に附屬して、京師に歸り來る。

日親の名、夙に、洛中洛外に轟き、正法の化、亦、善男善女に遍ねしと雖も、未だ一寺を建立するの機を得ず、日親、

尙も、一條戻橋の石上に立ちて、破折を行ふ、時人、何時しか、説法石と呼ぶに至る。
爾來、此地を以て、根據とすれども、其弘法に熱心なる、或時は、鎌倉に赴き、或時は、博多に到りて、一所に、安居せず、永享四年の頃には、又西海の總導師となりて、再び彼の地に下る。

尋で、京師に、歸り來りて、一寺を建立せんとす、會々後花園天皇、四條綾小路に、弘經の地を賜ふ、長尾小五郎なるものあり、其岳父、狩野修理入道叡昌の爲めに、冥福を修せんと欲し、資を供して、工を助く。

日親、乃ち土木を起し、堂塔を建て、永享八年に至りて成る、名づけて、叡昌山本法寺と曰ふ、實に、其京師に於ける根本道場たり。

日親、是れより、銳意、教化に従事すること數年、終に、大に、將軍を諫曉せんとす、慘憺たる幾多の艱難、幾多の苛責、是に於てか、相次で起る。

十五

日蓮聖人、世を憂ひ、時を慨して、國家を諫曉すること、

三次に及ぶ、今や、日親、亦、死を犯し、命を抛つて、將軍を直諫せんと欲す。

時の將軍を、誰れとかする、足利家第六世義教、即ち是れなり。

抑々足利家は、尊氏より、義詮、義満、義持を経て、義量に至り、父子相承くること、五世に及ぶ。

義量、職に在ること三年、應永三十二年二月二十七日を以て、薨す、年、纔に十九、諸臣、其嗣なきを以て、相議して、天臺の座主青蓮院義圓を立つ、之れを義教となす、實に、義満の子、義量の叔父なり。

尊氏の時に在りては、其叔父日靜上人の爲めに、鎌倉松葉ヶ谷の法華堂を、京都に移して、本園寺を建つる等、聊か外護の力を盡せりと雖も、義詮以下に至りては、絶えて、正法を奉ずるの心あらず。

特に、今の義教は、久しく、天臺の座主たりしを以て、慈覺、智證の臺密を奉じて、正法を排するの色あり。

日親、此地に來りて、此時に遭ふ、之れを奈何ぞ、沈黙して、止まんや、世の爲め、國の爲め、衆生の爲めに、奮う

て、進言すること、前後七回に及ぶと雖も、皆、棄て、省せられず。

是に於て、更に、意を決して、大に諫曉せんと欲し、永享十一年五月六日、自ら室町の柳營に到り、滔々、邪宗の謗法を責めて、正法の弘通せざるべからざる所以を説く、熱誠の迸るところ、眉昂がり、肉動く。

足利義教像



義教は、胸宇偏狹にして、人言を容る、の量なし、屹と、日親を睨めつ、

『やをれ日親、汝、出家の身を以て、天下の政事を是非すること、

不屈至極なり、今後、重ねて諫言すれば、屹と、罪科に申付くべきぞ』
と叱す、日親、意氣 然として、

『日親は、佛の弟子にて候ぞ、法の臣下にて候ぞ、何ぞ、公命を恐れて、佛勅に背き候はんや、師子尊者の如くにもなれ、法道三藏の如くにもなれ、法華經の御爲めに、區々たる一身を捨て、大法を後代に留めんこと、是れ、日親の至願にして、至望に候ぞ、公方の思召あらば、日親には、日親の所存候、我が願業を達せんまでは、決して、此口を閉し候まじ』

と言ひ捨て、法衣の袖を拂ひつ、蹶然として去る、不惜身命の意氣、鐵石よりも堅し。
永享十二年五月六日は、義教の父義満の三十三回忌に當る、義教、其追善として、千僧供養を行はんとす、日親、之れを聞きて、

『謗法の供養は、供養にあらず、イデヤ、法華經を以て、供養し給はんことを、極諫せん』
と決意す、會々頻年、慧星あり、洪水あり、地震あり、兩

日並び出づるあり、天變地異の續出すること、正嘉、正元の時に異ならず、日親、

『當時、高祖聖人は、立正安國論を著はして、柳營を諫曉し給ふ、我れは、乃ち立正治國論を作りて、公方を直諫せん』

と思ひ、自から筆を執りて、述作に従事す、其熱誠、亦、聖人に譲らず。

十六

立正治國論の草稿、既に、成れるも、尙、未だ修飾を加へず。

諸宗の僧侶は、常に、日親の爲めに、破折せられて、之れを忌むこと、蛇蝎の如し、早くも、此著述の成れるを聞き、心、甚だ安からず、急ぎ、將軍義教に謁して、

『日親法師、君の御制止をも顧みず、又々、公廷に訴へ奉つらんと存じて、一書を草せしやに承はり及び候、今日、六十餘州の中、誰れか、君の仰せに背くもの、候べき、然るに、日親、何するものぞ、出家の身を以てして、大君の命を輕んずること、此の如し、若し、此れをしも、

捨て置き給はゞ、天下の制法、何を以てか、相立ち候はん、能く、御思慮あらせ給へ』

と讒告すれば、義教、聞いて、深く日親の執拗を怒ると雖も、其身、亦、佛門に在りたれば、聊か、自から覺る所なきにもあらず、

『日親は、狹僧にあらず、愚納にもあらず、其斯くまでも、身命を捨て、妙法を弘めんと欲すること、定めて、深き仔細のあらん、先づ、佛法の邪正と、理義の勝劣とを、糺明して、然る後に、處分せんこそ、善けれ』

と思ひて、直に、刑罰を加へず、先づ、念佛、眞言、禪宗、律宗等の諸名僧を召して、

『日親法師、我れをして、法華經を持たしめんと欲し、法訴、數度に及ぶと雖も、我れ、之れを納れず、去年、又々、諫訴に及べる時、我れ、今後、重ねて、訴へなば、必ず、嚴罰を加へんと言ひしも、尙、敢て従はず、今や、更に、我れを諫曉せんと欲して、一書を著はせりと聞く、其事、狂愚に類すと雖も、彼れは、自ら佛の弟子、法の臣子たるもの、何ぞ、公命を恐れて、佛勅に違はんや、

身は輕く、法は重し、身を死して、法を弘めんのみと廣

言す、定めて、胸中、堅く信ずる所あらん、我れ、因つて、我が面前に於て、諸宗と、法義の可否正邪を決せしめんと存するなり、各々の所存、如何に』

と問ふ、是れぞ、籤をつゝいて、蛇を出だせるもの、諸僧、争でか、驚愕せざらん、一同、一先づ、退きて、協議を遂げ、再び義教の前に出で、

『八萬の教々、顯密の法々、何れか、出離の法に候はざらん、何ぞ、一の法華經にのみ限るの道理候はんや、且や、世尊涅槃に臨んで、法を國王大臣に付屬し給ふ、争でか、公命に背きて、弘法を爲すべきことの候はん、日親、全く、佛法を存じ候はず、何ぞ、俱に、是非を論ずるに足り候べきや、彼れ倨傲にして、慢に身命を抛つと申すこそ、笑止に候へ、彼れ、強て、大言を吐くとも、若し、少しく、呵責を加へ給はゞ、忽ち法華を捨て、念佛を唱へんこと、必然に候、』

と陳じて、巧みに、法問を避けんとす、義教、未だ法に眞妄あるを知らず、又王命に戻りて、災厄を甘んずる師子尊

者、法道三藏等の在るを知らず、

『實にも、彼れを、一責め責めて、其廣言の舌の根を、止めんに若かず』

と思ひ定めし折りしも、意外なる書狀、其手に入りて、義教の意、愈々決す。

意外なる書狀とは、抑も如何なるものぞ。

十七

抑、謗法の神は、供養すべからず、謗法の供養をも受くべからず。

謗法の神を供養するも、無間の業なり、謗法の供養を受くるも、亦、無間の業なり。

日蓮聖人の教を垂るゝや、至嚴にして至正、復た一點の壞亂をも容さず。

日親、常に、聖人の心を以て、心となし、其教を守ること、森嚴にして、其身を奉ずること、亦、極めて、謹嚴なり。

日親の、曩に肥前より歸り來るや、中山の振舞、兎角に、常軌を逸して、或は謗法の人の供養をも受け、或は、謗法の佛をも安置して、妙經の主旨に背き、聖人の本意を失ふ

こと、少からず。
 されども、今は、聖人の滅後、既に百五十年、其宗風、漸く、頽れ來りて、人も、怪まず、自らも、意とせず。
 日親、之れを見て、黙止すること能はず、密に、貫主日有に對して、諫告を加ふること、再三に及べども、更に、省みるべき色もあらず。
 人を正さんと欲するものは、己れ、先づ、正しうせざるべからず、他宗の謗法を破せんと欲するもの、何ぞ、自門の謗法を、黙過すべけんや。
 此事、納れられざればとて、止むべきにあらず、日親、二十一歳の時より、日有を諫止すること、終に、二十餘回の多きに達す、されども、日有の面目、貫主の名譽を思うて、會て人に語らず。
 其間、或は、激語に涉れることもあらん、或は、煩冗に堪へざることもあらん、日有、終に、之れを憎みて、永享五年には、其西海の總導師を免じ、七年には、鎌倉の弘通所妙隆寺を擡うばうて、聖人親筆の本尊、聖教、並に先師の本尊を、差押ゆるに至れり。

古より、諫臣、多くは禍を蒙むり、今に、高士、却て嘲を招く、日親、
 『是れも、法華經の行者として、受くべき當然の災禍なり』
 と思へば、敢て、意とせず、尙も、謗法の振舞ある毎に、痛切の訓戒を加ふ。
 一山の衆徒、檀徒、今は、盡く、日親を疾視し、其家を訪へば、隠れて會はず、途にて逢へば、笠を傾けて過ぐ、日親、
 『一丈の堀を越えざらんもの、何ぞ、二丈三丈の堀を越え得べきやとは、高祖聖人の宣はせるところ、宗内の謗法をさへ、責め得ずして、何ぞ、天下の謗法を破し得んや、天下の衆生を救ふも、日親の任なり、宗内の教風を正すも、亦、日親の責なり』
 と覺悟し、益々、自宗他宗の破邪に、力を盡す。
 爾來、日親に對する中山の壓迫、更に、益々、加はる、會々、日有より、石橋將監に與ふるの書狀、義教の手に落つ、中に、日親の一色伊豫介の子を扶持せりとの一事あり、伊豫

介とは、鎌倉の管領足利左馬頭持氏の餘黨にして、此年正月、相州今泉の城に據りて、京師に抗せるもの、義教、見て怒り、

『彼れ、叛臣の子を、扶持すること、不埒なり、疾く、擲めよ』
 と命ず、意外の書狀とは、即ち此事。

十八

今日、如何なる惡日ぞ。

足利義勝像



本法寺

時は、永享十二年二月六日、多數の捕吏、バラ／＼と、本法寺に込み入り、一も、二もなく、日親を擲め取りて、獄中に投ず。
 獄の廣さ、僅かに、四疊ばかり、高さ四尺五寸に過ぎず。天井には、大なる釘を打ち抜くこと、數百本、若しも、腰を伸ばさば、ツブリと、頭を刺す。
 初め、此中に投ぜられたるもの、三十六人、膝は膝と接し、肩は肩と觸れて、手を伸ばし、足を動かさんことすら、叶はず、其狀、宛がら、桃を積みたらんが如し。
 魚澄越前守、見て、之れを憐み、翌日、其中の二十八人を、六角の獄に移す、後に残れるもの、尙、八人あり。
 起居も、意の如くならず、屈伸も、自由ならず、兩便も、亦、清むるに由なくして、身は、生きながら、地獄に墮ちしに異ならず、人は、皆、苦痛に叫べども、日親、獨り、自若たり。
 『我れの手爪を抜き、熱湯に浸して、辛苦艱苦を試みしも、正しく、今日の爲めぞ』
 と思へば、陰房の中も、猶、方丈に在るの想あり。

日親、未だ何の爲めに、逮捕せられたるやを知らず、有司頓て、日親を引き出だして、

『去年、汝の法訴に及びぬる時、今後、重ねて、言上するに於ては、屹と、嚴科に處すべき旨、仰渡されたるに、汝、敢て、之れに服せず、更に、大に法訴を企てんとするとは、何たる緩怠ぞや、是れ一つ、一色伊豫介は、鎌倉管領左馬頭の餘黨にして、今や、鎌倉を去つて、相州今泉の城に、立て籠る、然るに、汝、其子を、稚兒として、扶持するは、何たる所存ぞや、是れ二つ、汝、此二罪あり、如何に、辯解せんとするも、是れには、確かなる證文あるぞ、先づ、之れを見よ』
と告げて、一書を示す、是れぞ、即ち日有の石橋將監に贈れる自筆の書狀なり、日親、容を正しつ、

『日親は、法華經の持者なり、行者なり、世を憂ひ、國を憂ひ、衆生を憐めばこそ、身命を抛つて、君を諫め奉つるにて候へ、其制止に背けばとて、何ぞ、君を侮り、主を蔑げすみ、公命を輕んずるものに候はんや、君命、重しと雖も、佛勅、更に、重きを奈何にかせん、伊豫介

の子を、稚兒として、扶持すること、如何にも、其覺えあり、されども、彼れは、幼弱の身、何ぞ、父の心を存せんや、況や、伊豫介の今泉に立て籠れるは、近日の事にして、日親の、其子を扶持せるは、前年の事に候、之れを以て、日親の不臣を咎め給はんこと、其理に當らず』と陳辯して、更に、此れに屈するの色あらず。

十九

日親の辯明は、理義、井然たりと雖も、有司、此れに、耳をも假さず、

『汝、既に、君命に背くの心あり、何ぞ、不臣の意なしと言はんや、されども、汝、若し、誠意を表すれば、直に、其繩を解きて、其罪を赦さん、如何に、其意なきか』と問へば、日親、

『我れに、虚偽なし、其一言一行、皆、誠意の發現に外ならず、何ぞ、別に、之れを表するの要候はんや』と答ふ、有司、

『否な、然ることならず、汝、今日より、題目を捨て、念佛を唱へ、君に對して、貳心なきの誠意を表せば、直

ぐにも、縦し還さん、如何に〜』

と迫れば、日親、昂然として、

『日親は、法華經の持者なり、行者なり、今身より、佛身に至るまで、何ぞ、一日片時も、之れを捨て候はんや、我が首は、斬られ、我が命は、召さるゝとも、何とて、題目を捨て、念佛を唱へ候べきや、聞くだも、耳の汚れに候ぞ』

と答へて、屈せず、有司、

『汝、念佛を唱へずと申せばとて、何ぞ、其儘にして止まんや、若し、早く、唱へずんば、必ず、苦痛を見るべきぞ』

と言へば、日親、

『如何ならん苦痛、艱難とても、我れに取つては、飴よりも甘し、何ぞ、之れを怖るゝ日親に候はんや』
と言ひ放つ、有司、忽ち、赫と怒り、

『好し、今の一言を忘るまじきぞ』
と言ひ捨て、座を起ち、直に、此由を、將軍義教に申せば、

『さらば、拷問に掛けても、念佛を唱へさせよ』
と告げて、命を獄吏に下す。

偶々黄昏より、風荒み、雪降り出でて、寒氣、指をも墮さんばかり、獄吏、日親を、雪中に、引き出だして、衣服を剥ぎ取り、裸體のまゝにて、梅樹に、縛り付け、

『汝、念佛を唱へずんば、斯く致さんぞ』

と言ひつゝ、笞を取つて、ピシリ〜と、策うてば、全身、見る〜、紫色に變じて、膨れ上がる、獄吏、

『汝、苦しくば、疾く〜、法華經を捨て、念佛を唱へよ、如何に〜』

と詰れば、日親、泰然として、

『寒苦、忍びがたしと雖も、正法を捨て、八寒地獄に墮つれば、其大苦、今日に、千百倍せん、何ぞ、暫時の寒苦を恐れて、永劫の苦惱を、受け候はんや』

と答へて、高聲に、法華の首題を唱ふ、獄吏、大に怒りて、交る、策うつこと終宵、雪は、繽紛として、絶えず、頭上より、降り懸かる。

天、明くれば、義教、自から出で、其状を見る、日親の寒

寒氣に苦みて、戰慄せるを見遣り、
「汝、法華經の行者は、身命を惜まずと、大言しながら、誰に恐れて、戰慄するぞ」と叱すれば、日親、儼然として、

「法華經の行者なればこそ、只、震ふのみにて濟め、若し、君ならば、疾くに、凍へて、死し給はんぞ、憂たてやな、天に唾すれば、其面を汚がす、我れを責むるは、即ち其身を責むるものと思さるるか、死して、無間に墮ち給はゞ、此れに、百倍千倍の大阿責を、受け給はんぞれ」

と答へて、更に、屈する氣色もあらず、義教、大に呆れ驚き、復た言葉もなくして、立ち去る。

廿

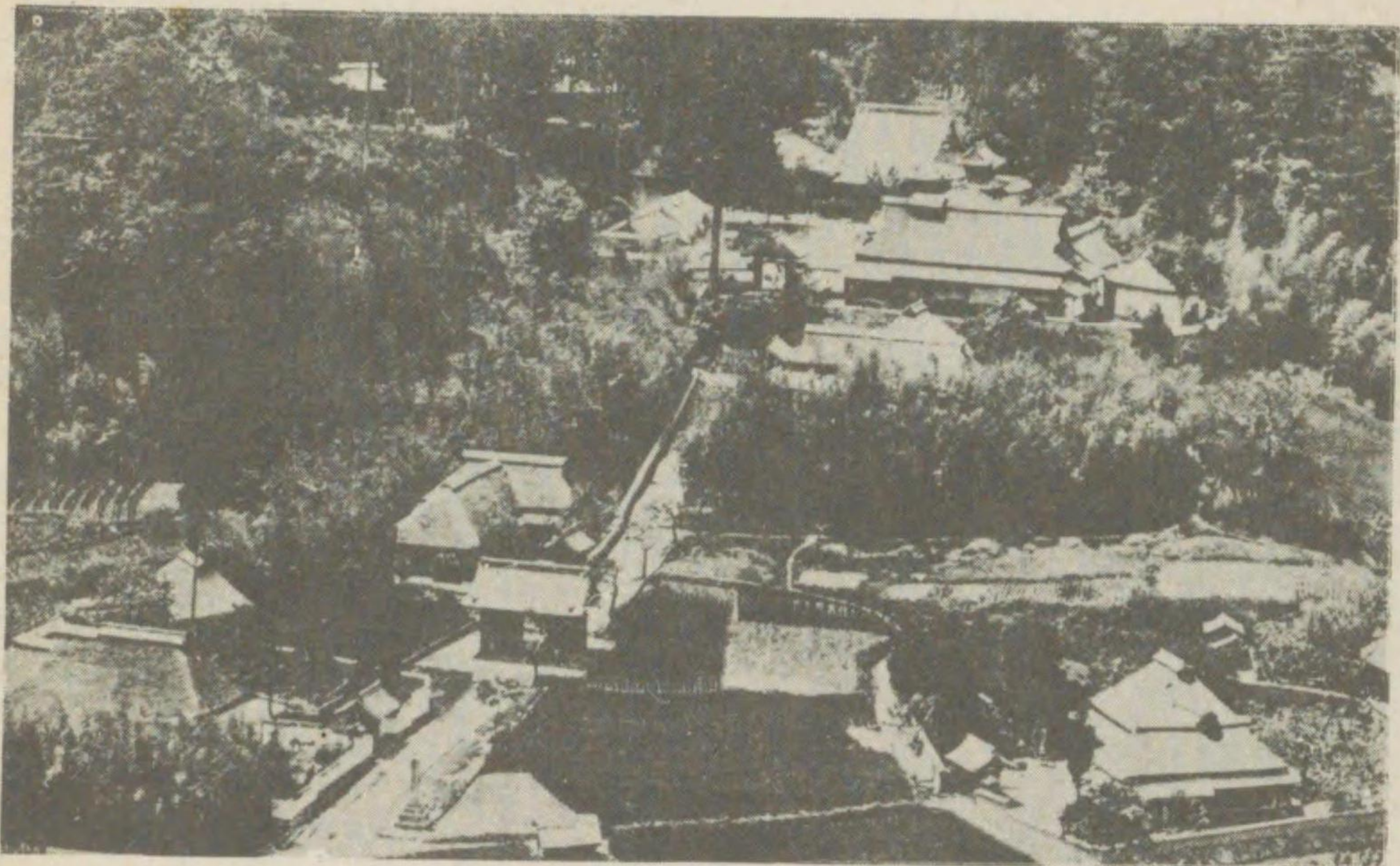
雪夜寒苦の責も、日親を屈するに及ばず、乃ち復た元の獄中に投ずること、若干月。

春も過ぎ、夏も來りて、三伏の炎天、宛がら、石もけ、金も鏝けんばかり、苦熱、言はん方もなし。

獄吏、此炎威赫々たる午天、日親を、獄庭に引き出だして、

常國寺の全景

常國寺は備後國沼隈郡熊野村に在り日親創建の寺院にして日蓮宗の中本山たり此れは其全景なり。



廿一

日親、寒苦の責にも屈せず、炎熱の責にも怯けず、義教、聞て、大に怒り、

「扱も、しぶとき法師かな、此上は、水責にせよや」と命ず、獄吏、乃ち日親を引き出だして、

楮子に縛り付け、水を汲んでは、ザアザ

木柱に縛り付け、其周圍に、薪を積んで、此に火を放つ。風に煽らるゝ炎氣、伏しては起き、起きては又伏す、日親、膚も焦げ、骨も焼けなるとして、油汗、じり／＼と、煎りつく、獄吏、尙も、薪を添へて、熾んに、煽り立て、

「如何に日親、若し、苦しと思はゞ、疾く、法華經を捨て、念佛を唱へよ、念佛ならでは、汝の苦患を救ふの道なきぞ、如何にや如何に」

と責め立て、急き立つ、日親、自若として、撓む色なし、

「熱氣、堪へがたきにあらずと雖も、若し、法華經を捨て、謗法の罪を作らば、必らず、無間地獄に墮ちて、大焦熱の苦患を受けん、何ぞ、其千萬分の一にも足らざる小苦を怖れて、永劫無限の大苦を受け候はんや、尙も薪を御添へ候へ、尙も、風を御煽り候へ、それしきの事に恐るゝ日親には候はぬぞ」

と言へ、又も、法華經の首題を唱へつゝ、安祥として立つ。獄吏、大に怒りて、汗水を垂らしつゝ、焚き立て、煽り立つれども、効なく、責むるもの、却て、責めらるゝに似たり、獄吏、大に持て餘して、復た元の獄中に投ず。

アと、其口に、注ぎ掛く、日親、呼吸する毎に、水は、鼻より、口より、喉中に、流れ入りて、殆ど、咽せ返り、咳き入る暇さへもあらず。豪氣の日親、一提、二提より、數へて、三十六提までに及びしと雖も、其餘は、幾提に及びしやも、數へ切れず。

日親、斯かる阿責に逢へども、尙、首題を唱へて、止まず、獄吏、責めあぐみて、中止し、又元の獄舎に投ず、日親、快然として、

「喜ばしいかな、火も焼くこと能はず、水も漂はすこと能はずとの經文、今こそ、誤りなきを知りけれ、法華經の行者は、實にも、諸天善神の守護あるに相違なし」と思ひ、益々法華經の貴きを知りて、之れを信ずること、更に、彌々深し。

廿二

獄吏、今は、尋常の手段を以て、屈しがたきを知り、各々、頻に工風を凝らす。

一日、一人の獄卒、獄舎の前來りて、言葉、優さしく、「今春以來、久しく、入浴し給はず、定めて、御心地悪

しからん、今日は、湯に入れ参らせよとの事に候、イザ
させ給へ』

と告げて、戸を開く、日親、

『其は、忝けなし』

と一禮しつゝ、導かれて、浴室に到る、日親、心の中にて、

『何れ、我れを責め殺さん結構なるべし、一死は、固よ

り望む所、何の恐るゝことあらん』

と思ひ極めて、更に、悪びれたる色もなく、獄吏の

『イザ此方へ』

と言ふまゝ、悠然として、浴室の中に入る。

獄吏、忽ち、ハタと、戸を閉して、カチ／＼と、釘を打ち

付く、今は、項羽、樊噲の勇ありとも、外に出でんこと、

叶ふべからず。

獄吏、薪を釜の下に、差し入れ／＼、熾んに焚き立つるこ

と、凡、三時あまり。

湯は、沸々と、滾り立ち、煮え返りて、宛がら、白浪の躍

り立つるが如く、濛々たる湯氣、浴室に充ち溢れて、呼吸

さへも、止まらんばかり、日親、

『今日こそ、愈々我が死すべき時なれ』

と思ひ定めつゝ、聲も、琅々として、法華經の首題を唱ふ。

初めは、手に取る如くに聞えし妙聲も、時刻の移るに隨う

て、次第に衰へ、次第に細り、後には、蚊の啼く程の聲も

聞えず、唯、湯の滾る音のみ、物凄し、獄吏、

『さしもの日親法師も、最早、爛け糜れて、成佛しつら

ん、疾く、開き見よ』

と言ひつゝ、釘を抜きて、戸を開けば、日親、尙も、安祥

として、小聲に、題目を唱ふ、其風丰、更に、平日に異な

らず、獄吏、愕然として、

『扱々、不思議の法師かな、斯くては、風呂責も、無益

なり』

と言ひつゝ、浴室より、引き出だし、

『御坊、御身の斯かる責苦を受くるも、皆、心柄からぞ、

疾く、心を改めて、念佛を唱へ候へ』

と迫れば、日親、冷かに笑みつゝ、

『日親は、法華經の行者に候ぞ、一命を召さるればとて、

物の數とも存じ候はず、何とて、斯ばかりの阿責に、恐

れ候はんや、念佛を唱ふるなんと、思ひも寄らぬ事かな』

と答へて、露ばかりも、怯む色あらず、將軍義教、聞きて、

益々焦立ち、

『扱も、面憎き法師かな、此儘止めんは、公方の權威な

きに似たり、此上は、如何やうにもして、責め奢めよ』

と命ず、還俗將軍、今は、愈々意固地となり來る。

廿三

一日、日親、獄窓の下に、危坐しつゝ、徐かに、經文を誦

ず。

會々獄吏、大なる竹鋸を、持ち來りて、獄窓に掛く、其刃

のきば／＼しさ、宛がら、利劍の如し、日親、見て、

『這は何に用ゆるものぞ』

と問へば、獄吏、

『御首を賜はらん爲めの鋸に候』

と答ふ、日親、聞いて、頷づくばかり、別に、物をも言は

ず、自から壁土を取りて、鋸の刃を、磨り潰す、獄吏、怒

つて、

『汝、此刃を潰せばとて、何ぞ、其命の助かるべきや、

此鋸を磨り潰すとも外に、尙、幾挺もありと知らずや』

と罵れば、日親、莞爾として、笑みつゝ、

『否とよ、我れ、何ぞ、苦を厭ひ、命を惜むの心あるべ

きや、斯かる眞劍の如き竹鋸を以て、切らば、此首は、

忽ちにして、落ちんこと、定ぞ、法華經の爲め、衆生の

爲めに捨つる命の、少しにても、苦痛の長かれと思ふ餘

りに、斯くは、態と、其刃をおろせしものぞ、此上は、

疾く／＼、此首を挽き候へ』

と答ふ、獄吏、益々怒りて、

『汝、斯かる強言を吐くからは、少しにても、長く、苦

痛を見すべきぞ、疾く、出でよ』

と罵りつゝ、日親を、牢より、引き出して、庭中に、押し

据ゑ、竹鋸を以て、ゴシ／＼と、其首を挽き始む、日親、

別に、苦しと思はず、自若として、題目を唱ふ。

他の獄吏、面憎しとや思へる、鋭き、竹串を以て、跨間の

一物を、突き刺す、日親、敢て意とせず、尙も、泰然とし

て、題目を唱ふ。
獄吏、竹鋸を、取り換へ、引き換へて、挽けども、鋸の目、

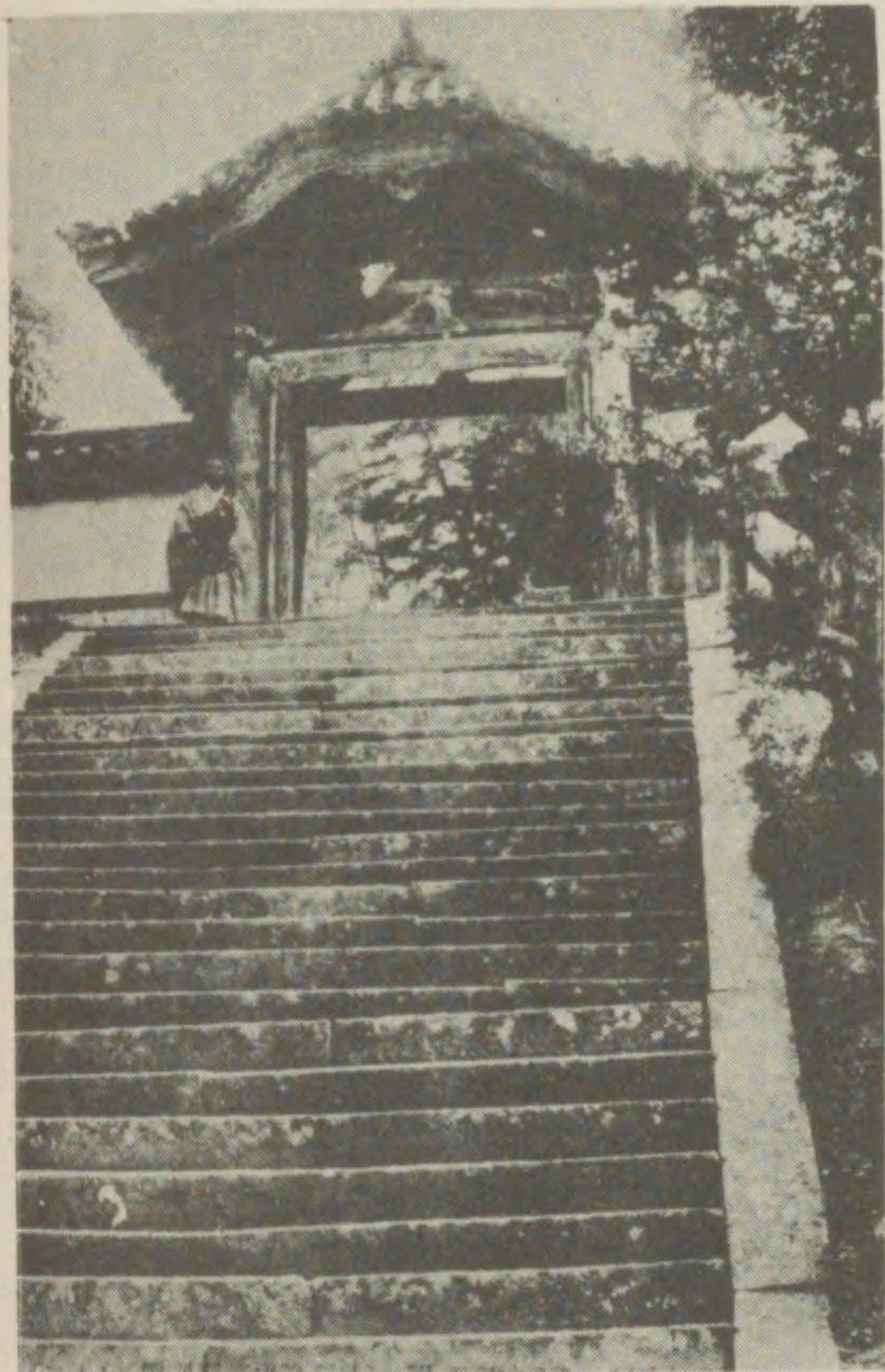
忽ち潰れて、物の用に立たず、日親、

「愚かなり面々、假令、如何に、責め窘むればとて、我れ、何ぞ、念佛を唱へんや、法華經は、日親の生命なり、日親の生命あらん限りは、法華經を唱ふべし、南無妙法蓮華經々々々々々々々々々々」

と一際高く、法華經の首題を唱ふ、獄吏、憤懣すれども、復た奈何ともすべからず、何れ、好き工風あらんと思ひて、又々、獄窓の中に投ず。

常國寺の正門

此れは常國寺の正門にして義昭將軍の此國に在りし當時寄附せしものなりと云ふ寺中に義昭の墓あり。



廿四

義教、如何にもして、念佛を唱へしめんと欲し、一日、「日親法師、昔者、法道三藏なるもの、面に烙印を押されて、江南に放たる、我れも、其跡を繼がんと言ひしことあり、此上は、彼れを、焼印責になさん」と思ひて、又も、命を獄吏に下す。

獄吏、庭中に、炭火を活すこと、山の如く、數挺の鋤鍬をくべて、之れを焼くこと、紅蓮の如し。

頓て、日親を引き出だして、裸體となし、眞赤の鋤鍬を取つて、左右の腋下に挟めば、肉は、見るく、焼け爛れて、鮮血、泉の如くに、迸り出づ、其慘狀、目も當てられず、獄吏、

「如何に日親、汝、斯くても、尙、法華經を捨てざるか、疾く、念佛を唱へよ、忽ち此苦患を免がるべきぞ」と責め立つれば、日親、

「無間地獄に墮つれば、其苦患、今日に千倍せん、斯くばかりの小苦、何かあるべき」と答へて、題目を唱ふ、神色、自若として、變らず、獄吏、

候へかし

と諭す、日親、泰然として、

「一命は、豫て無きものところ存すれ、兎も角もせられよ、念佛は、決して、唱へ候まじ」と答へて、觀念の眼を閉さず、獄吏、今は、止むべからず、

「扱々、しぶとき法師かな、さらば、斯うぞ」と言ひさま、焼鍋を取つて、スポリと、其頭に被ぶらす。

髪は焼け、肉は焦げて、鍋は、チリ／＼と、頭部に喰ひ入り、熱さ、苦しき、言はん方もなし、されども、勇猛の日親、尙も、自若として、題目を唱ふ。

義教、來りて、此處に在り、此有様を見て、もどかしき、堪へがたく、

「扱々、強情至極の法師かな、彼れ、舌あればこそ、我れをも諫むるなれ、誰れかある、疾く／＼、彼れの舌を、抜き去るべし」と命ず、獄吏の一人、唯々と答へて、釘拔を持ち來り、

「御坊、念佛を唱へられずば、其舌を抜かんぞ、イヤ、口を開けられよ」

鋤鍬を、取り換へ／＼、責むれども、終に、効なく、此日も、亦、空しく、獄中に、還し入る。

廿五

既に、雪責、火責、水責、風呂責、竹鋸責、竹串責を行ひ、今又、焼鍬責を行へども、日親、尙、露ばかりも、怯む氣色あらず、獄吏の中には、

「此法師、ヨモ凡人にはあらず、此上、如何に責むればとて、効あるべからず、後難の程こそ、恐ろしけれ」と思ひて、窃かに畏懼の念を起せるものあり、されども、

義教、尙、嫌らず、

「手足を焼きたりとて、効なし、此上は、焼鍋を被ぶせて、頭より、焼き立つべし、如何に、強情なりとて、此れには、ヨモ堪へまじ」と命ずれば、君命、背かんに由なく、獄吏、又も、日親を、獄庭に引き出して、眞赤に焼きたる鍋を、グツと、其面前に、突き付けつゝ、

「如何に御坊、若し、念佛を唱へられずば、此鍋を、頭に被ぶせ申さんぞ、疾く、唱へ候へ、疾く／＼、御唱へ

と言へば、日親、

「我れには、題目を唱ふる口あれども、念佛を唱ふる舌なし、抜かんと欲せば、抜かれよ」

と言ひさま、ア、と口を開く、獄吏、

「さらば、斯うぞ」

と釘拔を、グツと、口中に、差し込む、されども、今は、心中に、鬼胎を懐きて、舌の全部を、抜き得ず、唯、其尖、少しばかりを、切り取つて、又も、獄中に投ず。

日親の頭部、是れより、凸凹となりて、剃刀を用ゆること能はず、頭髮長ずる時は、鋏を以て、切り取る、故に、其髮、常に一分ばかりあり。

又舌端を切られてよりは、其辯舌、明瞭ならず、間々、小兒の片言に類するものあり、日親、

「老いて、再び、孩兒わんわんになるとは、我事ぞ」

とて一笑す、人々、此れより、呼んで、鍋被日親なべかぶりひしんと言ふ。

廿六

將軍義教の、日親を獄中に投じてより、既に、一年餘に及び、手を換へ、品を替へて、拷問すれども、頑として、屈

する色なく、不自惜身命の意氣、一厄毎に、益々振ふ、諸宗の僧侶、曩に、

「少しく、呵責を加ふれば、忽ち、法華を捨て、念佛を唱へ候はん」

と言ひしは、全く、皮相の見たりしこと、愈々明白となり來る。

左れども、義教頑冥にして、尙ほ覺らず、嘉吉元年三月十三日、人を獄舎に遣はして、

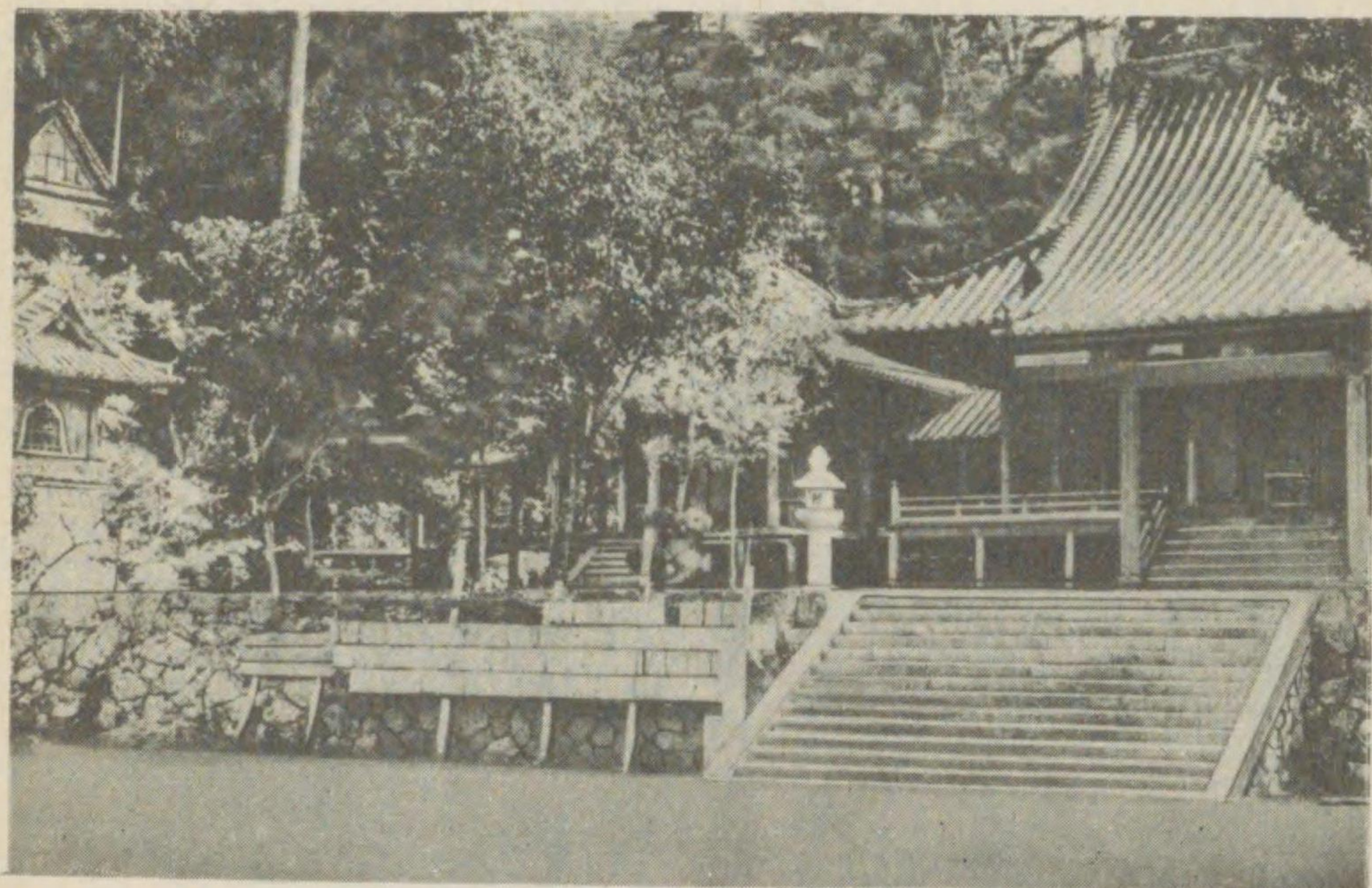
「法華經の行者を虐ぐるものは、必ず、現身に其報を受くべしとは、經文に見ゆる所、然るに、我れ、汝を惱ますこと、既に、一ケ年を越ゆると雖も、未だ何の現罰をも蒙むらず、却つて、此身の恙つらなきもの、此れ、彼の經文の虚妄なるが爲めか、將た、汝の行者にあらざるが爲めか、抑々又公方の權威、強大なるが爲めなるか」

と詰らしむれば、日親、威儀、儼然として、

「經文、何ぞ、虚妄ならんや、日親、亦、固より、法華經の行者なり、夫れ法華經の行者を、苦しむるものは、日月と雖も、尙、且、其罪を免かれず、況や、小國の公

謂ひがたし、今、少し、早くは來らざるか」
と言はしむ、日親、色を正して、
「三ケ年にては遅しと仰せらるゝか、好し、然らば、今より、一百日に縮め候はん、其間には、必ず、現罰を受けさせ給ふべきぞ」
と答ふ、凛平たる一種の威嚴、其面に輝く、義教、聞きて大に笑ひ、
「二百日とや、能くも、此大膽なる事を申したりな、然るにても、憎きは、彼れが、人も無げなる廣言なり、今に見よや」
と思ひ設く、何ぞ圖らん、爾後九十九日目にして、其身、界して、意外なる災厄に罹らんとは。

方をや、今より、三ケ年を過ぎずして、必ず、現罰を受常國寺の本堂
此れは常國寺の本堂にして左方に在るは開山日親の廟なり。



けさせべきぞ」

と言ひ放つ、使者、歸り

報ずれば、

義教、冷然

として、

「扱あつかても、

忽たちせなる

沙汰かな、

且つや、

三ケ年の

内に、災

に逢ふと

は、汝を

惱ませる

現罰とも

廿七

此年六月二十四日、將軍義教、猿樂を見ん爲め、赤松左京太夫滿祐の第に、臨まんとして、衣服を改め、國光の脇差を佩く。

如何にしけん、刀身、忽ち鞘走りて下に落つ、義教、本阿彌右衛門三郎清信を召して、

『汝、能く詰めよ』

と命ずれば、清信、更に、固く詰めしも、又々、鞘走る、義教、心焦ちて、

『モツと固く詰めよ』

と命ず、清信、驚きつゝ、更に心を用ゐて、詰め込み、

『這度こそは、鞘走ること候まじ』

と申す、試みに、二人にて、引けども、更に寛がず、義教、

『左らば、此れへ』

とて、手に取れば、又も、サツと、鞘走る、宛がら、人ありて、之れを引くが如し、義教、忽ち、赫と怒り、

『汝、平生、日親の事に對して、我れを諫むるさへ、奇怪なるに、今又、此粗忽あり、汝も、亦、日親と同罪なるぞ』

と叱し、

『ヤア〜誰れかある、清信奴を、日親と同じ牢舎に投ぜよ』

と命ずれば、有司、容赦もなく、清信を引つ立て、日親と同じ獄舎に投じ、外より、ピンと、錠を卸す。

滿祐の子彦次郎教祐、義教の左右に事ふ、早くも、此由を開き知りて、滿祐に報ず。

滿祐、事を以て、義教を怨む、之れを聞きて、墳懣、止まず、終に、義教を殺さんと決意し、六月廿四日、猿樂に託して、義教を、其第に請ず。

義教之れを覺らず、期に及んで、滿祐の第に臨む、宴、酣なる頃ひ、滿祐、故らに、馬を縦ち、第中、大に騒ぐ。

滿祐命じて、堅く諸門を鎖さすと齊しく、伏兵、忽ち起りて、義教の從者を斃す。

滿祐、不意に、屏後より躍り出で、一刀、義教を刺す、義教、怒つて刀を抜かんとす、其鞘走りたるが爲めに、之を詰むること固く、抜かんとすれども、更に、抜けず、驚き遽て、廊下に逃げ出づる所を、滿祐、逐ひ縋つて、之れを斃す、實に日親の其現罰を豫言せしより、九十九日目に當る。

府中の上下、洛中の貴賤、之れを聞きて、何れも、色を變じ、

『扱こそ、日親法師を、呵責し給ひし罪科に依りて、法

清信本姓は、菅原にして、氏を松田と曰ふ、元祖妙本より傳へて清信に至り、世々刀劍の鑑定を以て名あり、日親の殘虐せらるゝを惨みて、救解を試みしこと少からず、然るに、計らざる事より、罪を獲て、同じ獄中の身となる、日親、事の由を聞きて、眉を擡めつゝ、

『これ必定唯事にはあらず、今日の臨場、ヨモ、安穩には、濟むまじ』

と思ひ居たるに、果然、滿祐の爲めに、計られて、敢なくも、一命を落すに至りしこそ、是非なけれ。

是れより、此脇差を稱して、拔國光と言ふ。

廿八

赤松左京大夫滿祐は備前、播磨、美作の三國を領して、國廣く、衆多く、勢威、亦、甚だ振ふ、義教の之れを忌むこと、日久し、

『彼れの勢威、熾なる時は、公方の威光、自ら衰へん、其地を削りて、彼れの勢を滅せんにかかず』

と思惟し、滿祐の所領を割きて、其一族赤松伊豆貞村を、封せんと欲す。

華經の現罰を受け給へるなれ、恐るべし〜』

と唱へ合ひて、震慄せざるはなし、義教の一門、亦、『日親法師を、此儘、獄中に繋ぐ時は、益々佛罰を蒙むらんこと、疑ふべからず、早く、之を赦さんに若かず』と決し、義教の追善に託して、多くの罪人を赦し、日親をも、其中に加ふ、獄中、日親に向ひて、

『故將軍の追善として、特赦を行はせらる、早々出獄あるべし』

と告ぐれば、日親、

『我れは、豫てより、身命を法華經に獻つる、種々の災厄を受けつゝ、法門を弘むるもの、偏に、日本國の人々をして法華經を持せしめんと存するに外ならず、然るに、將軍之れを察し給はず、如來の御使たる我れを、獄中に縛めて、種々の呵責を加へ給ふ、佛罰冥罰の致す所、終に、非業の最期を遂げさせ給へること、是れ經文の還着かんちやく於本人にして、誠に、是非も候はず、今將軍の追善とあらば、切めて、親しき族、一兩人にても、我が妙法に歸順せられ候へ、これに越したる追善供養、復た何物か候

東福寺

東福寺は京都市下京區本町に在り九條關白道家の創建に係り洪基を東大寺に鑑み盛業を興福寺に擬して東福寺と名づく臨濟宗東福寺の大本山なり日親の折伏の爲めに最も打撃を受けしと稱せらる。



はん、此儀にして、聽かれずんば、我れ、得こそ牢をば出で申すまじ、唯、責めて責めて、御殺し候へ』と答へ、頑然として、動かず、有司、大に持餘して、

『此儀、如何にすべき』と謀る、義教の一族、之れを聞きて、『故將軍御追善の爲め、我身の罪障消滅の爲め、我れこそ改宗致すべけれ、修羅の妄執を晴らし奉つらん道、此上やある』と告げて、正法に歸依す、是に於て、日親、始めて、獄舎を出づ、其鐵窓の下に在ること、實に、五百有三日。

廿九

日親の出獄すると與に、本阿彌右衛門三郎清信も、亦、罪を赦さる。清信の一家は、以前、大光山本願寺の檀方たりしに、中頃より變じて、謗法の徒となる。今回圖らずも、入獄せしより、日親の教化を受けて、復た法華經に歸し、日親を恭敬すること、活佛の如し、日親、『末法萬年に於て、頼み奉つるは、唯法華經の外あるべからず、子々孫々までも、若し、正法を捨て、邪宗を信する時は、謗法の致すところ、家門、必ず、災厄を免るべからず、貴邊の此奇禍を招けること、亦、是れ、

正法を捨てたる佛罰のみ、今や幸ひにして、再び正法に歸せらる、我れ、弘法の大願成就して、永く榮へん時は、本阿彌の家も、亦俱に榮へんこと、疑ふべからず』と告げて、師檀俱榮の契約を許す、清信、是れより、熱心の檀方となりて、専ら外護の力を盡す。

降りて、文明年間に至り、日親、特に、法號を授けて、本光と曰ふ、一類の剃髮するもの、必ず、光の字を名乗ること、是れより始まる。

其子孫、世々、本法寺の檀越となりて、其家道、長へに榮ふ。

卅

將軍義則に、二子あり、兄を義勝と曰ひ、弟を義政と曰ふ、義教の薨ずるに及んで、義勝、代り立つ、時に、年八歳。

義勝、活潑にして、武藝を嗜み、毎日、侍者と與に、擊劍、騎馬の稽古に、餘念なし、侍臣、諸侯等、之を見て、

『行末、天晴の名將と仰がれ給ふらん、御家の武威、是れより、益々加はるべし』と評し合ひて、何れも、其將來に屬望せざるはなし。

在國の諸侯、亦た義勝の騎馬を好むを聞きて、各々名馬を獻ず、義勝、大に悦びて、日々、競馬、犬追物、笠掛等の馳游をのみ、事とす。

一條前攝政兼良、其小技に耽るを、諫めしと雖も、義勝、尙、憒めず。

嘉吉伏年七月二十一日、義勝、又室町の馬場に出で、乗馬の技を試む、一駿馬あり、古の池月、磨墨にも劣らず、義勝、此れに跨がりて、一責、二責、責むるや、忽ち一聲、高く嘶くと與に、跳り上がりて、サッとばかりに、馳せ出だす、疾きこと、奔電の如し。

侍臣、驚き慌て、止めんとすれども、叶はず、唯、アレヨ〜と叫ぶ。

馬は、地を蹴り、砂を上げ、場内を、馳せ廻り〜て、止度もなし、義勝、終に、鞍坪に堪へ得ず、忽ち、控とばかりに、大地に、投げ出ださる。

侍臣、大に驚きて、馳せ寄り、抱き上げて、介抱すれども、纒かに、虫の息の通ふばかり、終に、其日の夕方に至りて薨ず、時に、年十歳。

日親、先きに、三年の内に、災厄あらんと廣言し、更に、一百日に縮む、然るに、爾來、一百日の以内に、前將軍義教の變死あり、今又、三年の以内に、當將軍義勝の横死あり、諸人、

『是れぞ、故將軍の法華經の行者を苦め給へる佛罰、其御身に餘りて、更に、其御子に報い來りしにこそ』
と言ひ合へりつゝ、皆、今更の如くに、恐れ戦く、義則の

日親上人の像 (鎌倉妙隆寺藏)



兼中は、裏松左大臣重光の女なり、其夫と言ひ、子と言ひ、俱に、天命を全うせざるを見て、大に、嘆き悲み、

『これも、故殿の法華經の行者を呵責し給へる佛罰にこそ、切めては、我身、代りて、罪を詫び奉つらん』
と思ひ極めて、法華經に歸し、髪を薙ち、飾を落して尼となり、晨昏、懇に、父子の冥福を修む。

卅一

日親の入獄すること二年、各所の教田、漸く荒廢に歸す、日親、之れを憂ひて、先づ、九州諸國を、遊化せんとす。備後の豪族宮長門民部左衛門尉信定と言へるものあり、應永以來、京師に出て、禁闕守護の任に當る、其間、戻橋の説法をも聞き、獄中の狀況をも聞きて、能く日親の事を知る、

『末法の世は、法華經に限るにあらずんば、彼の法師、何ぞ、大苦難を忍んで、固く弘法に努むべきや、諸經中王とは、世尊の自ら宣はせる所、其最爲第一たるに於て、復た何の異議あるべきや、且や、彼の法師、種々の拷問、呵責を受くると雖も、更に、何の苦惱をも、感ぜざるが

如し、佛意に適ひ、天護を蒙むるにあらずんば、争でか、此の如くなるを得べき、我れも、是れより、爾前の諸經を捨て、經王の行者とならん』

と覺悟を定め、日親の出獄するや否や、親しく、本法寺を訪うて、正法に歸せんことを請ふ、日親、乃ち大戒を授け、且、法號を賜うて、定親と曰ふ。

信定又大曼荼羅、圓頓者、及び諸要文の揮毫を請うて、三幅對となし、其領地に、一寺を建て、寺鎮と爲さんと欲す。

會々赤松左京大夫滿祐の討手に、加はりて、播州に馳せ下らんとす、信定發するに臨みて、彼の三豐物を、渡邊越中守兼に託し、

『我れ、這度、軍に臨めば、固より、生還を期せず、若し、戦死せば、汝、之れを携へて、國に歸り、一寺を建立して、其寺鎮となすべし』

と告ぐ、信定、後、果して、奮闘して死す、兼、乃ち其遺志を守りて、備後山田の郷に歸り來る。

備後常國寺過去帳の裏書に依れば、毛利元就、渡邊兼に

命ずるに、當國三太守宮、三好、杉原の内、一人を討取らんことを以てす、兼、乃ち信定を討取れること、なせり、左れども、元就は、日親の歿後十年に生れるものにして、其時代、相違せり、故に、採らず。

日親九州、に下て、各所を巡化し、歸りて、備後國に抵る。一日、山田山の麓に立つて、説法を行ふ、此處は、草戸、水呑より、山田、山南に到るの間道なり、行人、一人立ち、二人立ちて、之を聞く。

會々一士人あり、從者を隨へて、此處を過ぐ、説法の僧を見るより、其前に進み出で、恭しく、一禮を施し、

『これは、日親上人に在はしませずや、我等は渡邊越中守に候、イザ、我等の館に、入らせ給へ』
と述べ、日親を伴うて、山田山上の館に歸る、是れ即ち兼なり、兼、改めて、信定の遺囑を受けしことを語り、

『我等は、日頃、此遺囑の重きを思ひて、新たに、一寺を建立せんと存すること久し、此度、上人の此地へ、靈錫を曳かせ給へるこそ、幸ひなれ、暫く、留まりて、開山とならせ給へ、急に、工事を起し候はん』

と請へば、日親、打ち領づき、

『此山の風光、自から身延山に似たるこそ、尊とけれ、大乘の機縁、既に熟す、疾く、工を始め給へ』

と答ふ、兼、乃ち良地を相して、一寺を建て、別に館邊に、奥の院を建て、身延の七面明神に擬す、是れより、此地を、一乗山、又は七面山と呼び、寺を廣昌山常國寺と名づく。

兼、又村内の大富寺、香林寺、金持寺を以て、其末寺となし、且、村民に對して、

『今より、此村内に住するものは、悉く、一乗妙典に歸せよ、命を奉ぜざるものは、速かに他方に立ち去るべし』と命ず、是に於て、少數なる異教の徒は、皆、隣邑山南に退去し、山田の一村、悉く、正法の淨域と化す。

兼、是れより、渴仰の念、益々厚く、佛工に命じて、日親の木像を、彫刻せしめ、且、日親の自ら開眼せんことを請ふ。

日親、深く其志を感じ、老後自落の二齒を、其首中に藏めて、親しく、開眼を行ふ。

甲州小室の妙法寺は、小身延と言ひ、相州鎌倉の本覺寺は、東身延と稱せらる、此常國寺の如き、其れ、亦、西身延と號して、可なり。

山田村は、沼隅郡に在り、草戸村の半坂より、南に入ること、一里半ばかり、路左の小高き所に、一碑あり「日親聖人辻說法靈跡」の數字を刻す、日親、此處に立ちて、説法を行ひしなり、此處と、三十町ばかりの地に、常國寺あり、其上方に、渡邊兼の館址あり、山田村、今は、熊野村と稱す、村民三百戸ばかりあり、今、尙、悉く、正法を奉じて、改めず、日親の遺教、年を経て、衰へざるを、見るべし。

隣邑水呑村松尾明神の前に、三原派の刀鍛冶あり、深く、日親に歸依して、一乗と號し、一鐘一唱、題目を唱へつ、刀剣を鍛へ、南無妙法蓮華經一乗の九字を銘す、因りて、世に、法華派と稱せらる。

一乗、後、其宅を開きて、寺院となし、稱して、一乗寺と曰ふ。

當時、神邊は、當國居城の在りし所、山名近江入道丈休な

るもの、來りて、此處に居り、自から一都邑の狀をなす。

日親、又信徒の請ひに應じ、此地に來りて、教化を行ふ、熱誠の注ぐ所、其化導に入るもの少からず、乃ち一寺を建て、法晶山妙立寺と稱す。

留錫若干日、粗々備後を定む、日親、乃ち去りて、出雲に向ふ。

卅二

此國楯縫郡多久村に、佐藤源三兵衛尉と言ふものあり、日親、其家に、錫を留めて、教化を行ふ。

源三兵衛の一家、隗より始めて、先づ、正法に歸す。

日親、邑内の山頂に、平地あるを見て、往いて、法義を談ずること數日、來聽の男女三百餘人、皆、珠數を切つて、妙宗を奉ず、邑人、是れより、此地を、說法山と號く。

邑内に、光徧寺、寶大寺、庄喜庵、寶藏庵と稱する四精舎あり、皆、不立文字の禪宗に屬す、其長老等、檀徒の叛き去るを見て、大に恐慌を起し、從來の檀徒を、招き集めて、自宗の本義を、説き明かす、檀徒等。

『禪の佛心たること、天魔たるとは、我等の存する所に

候はず、日親法師、今や、山上に於て、法義を談せられ候、御坊等、此れと、法の正邪、經の眞邪、經の眞偽を論じ給へ、御坊等、若し法論に勝ち給はば、我等、即時に、復宗候はん』

と答ふれば、四長老、

『此儀、道理なり、然らば、我等、日親房と、法問を戦はさん、各々案内せられよ』

と告げ、檀徒を、前に立て、說法山に到る。

山上にては、日親法師、今しも、清信士女を集めて、盛んに、法義を談ず、四長老、進んで、其前に到り、一揖、未だ終らず、直に、口を開きて、

『汝、禪を天魔と稱すること、何の經義にか基づく』

と問へば、日親、莞爾として、笑みつ、

『此事、世尊の金口に基づく、汝、知らずや、我が經の外に、正法有りと言はば、天魔の説なりとは、實に、世尊の遺言にあらずや、達磨、何者ぞ、慧可、何者ぞ、妄りに、教外別傳と言ひ、不立文字と稱へて、經外に、正法ありと説く、是れ、天魔の説にあらずして、何ぞや、然る

に、自ら借して、佛心を得たりと言ふもの、是れ、何たる奇言ぞや、若し、世尊の遺言を、無視するものにして、佛心を得たりとせんか、世の父母の遺言を無、視するもの、亦、之れを孝子と稱するを得べきか、論じて、此に至らば、禪の價值、知るべきのみ』

と一喝し、更に、經を引き、證を擧げて、一々、之れを辯明す、論理透徹、根據的確にして、動かす。

四長老、復た抗辯すること能はず、赧然として、屈服すれば、日親、直に、其袈裟を剝ぎて、論勝の證とす。

四長老、今は、人に對はすの面なく、其夜の中に、寺を開きて、立ち去り、檀徒、皆、盡く、日親に歸す。

卅三

多久は、宍道式部大輔の領地なり、式部大輔は禪宗の信者にして、其父の幸慶も叔父の多福西圓も、亦、皆、禪徒たり。

式部大輔、多久の宗論を聞きて、日親の教義を叩かんと欲し、父幸慶、叔父西圓と與に、多久に來りて、日親に謁す。日親、具に、法華の妙旨を説きて、他宗の權理を破す、舌

頭、劍あり、觸る、所、皆、裂く。

三人、皆、眞道を知るの晩きを恨み、親族、從類を擧つて、正法に歸し、四箇の禪寺を、焼き拂ひて、其跡に、妙宗の四寺を建て、光徧寺を改めて、長昌山大慶寺と言へる外、餘は、皆、舊名に依る。

日親、乃ち此四刹に、歷住して、勸化を行ふ、諸人、何れも、其法話を聞きて、益々、信念を加ふ。

邑中に、大船大明神、拜田大明神、客人權現の三祠あり、一日、日親、從容として、式部大輔に向ひ、

『這は、皆、權教勸請の神にして、法華經の正神にあらず、少しの賞罰ありとも、信すべきにあらず』

と説けば、式部大輔、此れに従ひ、直に、士卒に命じて、燒毀せしむ。

士卒十數人、手にく、松明を携へて、馳せ到る、一神あり、忽ち巫女に、乗り移りて、

『我れは、もと、是れ、久遠の古佛なり、權りに、明神に現じて、衆生を化益す、眞言の權經を以て、勸請すれども、固より、謗法の供養を受けず、今や、幸に法華經

の行者、此地に來る、醍醐の法味を受け、經王の禮奠に

逢はゞ、我が本願、此に満足して、快よく、此土の民を、守護せん、燒くべからず、毀つべからず』

と告ぐ、士卒、大に驚き、歸つて、此旨を、式部大輔に報じ、式部大輔、更に、之れを日親に語る。

日親、奇異の想をなし、式部大輔以下の諸人と與に、神前に到る、巫子の告ぐるごと、又前の如し。

日親、乃ち神前に於て、誦經持念すれば、巫子、忽ち常に復す、神官、氏子、此事を見聞して、大に驚き、相率ゐて、法華經に歸す。

式部大輔、新に、一祠を造立して、三社を合祀し、其開眼を、日親に請ふ、是れより、毎年正月七日、八月十七日を以て、祭禮を行ひ、大慶寺、之れを管す、諸人の參詣するもの、紛然として、群をなす。

邑中に、三十三ヶ所の荒神あり、日親、改めて、法華經を以て、勸請す、式部大輔、亦、邑内に有りと有らゆる餘佛餘菩薩を廢す。

是に於て、多久の一邑、純然たる一乘淳善の郷土と化し去

つて、日親理想の一樂土を、活現し來る。

日親、乃ち大慶寺を以て、法弟日報に託し、更に、新生面の土地を、拓開せんと欲して、北陸に向ふ。

日親、北陸を、遊化せんと欲し、伯耆、因幡を経て、但馬の出石に到る、此處は、山名右衛門督持豐の治所なり、持豐、曩きに、赤松左京大夫滿祐を、討滅して、其預國を併有し、豪富強盛、一世に冠たり。

日親、暫く、此處に、錫を留めて、教化を行ふ、此地は、京師を距ること、遠からず、夙に、日親の勇猛にして、能く、獄中の呵責に堪へしを、聞くもの多く、何れも、

『彼の法師、來給ひたるか』

と稱へ合ひて、我れもくと、其會下に、來り參す。

由來、此地は、禪徒、最も多く、日親の念佛を、無間と破し、禪教を天魔と喝するを以て、之れを疾視すること、蛇蝎の如く、三類の法敵、一齊に、群起して、排斥し、驅逐せんと、騒ぎ立つること、宛がら、日蓮聖人の鎌倉に在りし當時の狀に、異ならず。

左れども、日親は、法戰場裏の驍將なり、三類の徒輩、皆

其威名に恐れて、法問を試みんと欲するものなく、
『昔者、極樂寺の良觀上人、建長寺の道隆上人等は、窃かに、北條殿に、手を廻はして、日蓮を排斥し給ふ、今の御領主は、夙に、禪門に、歸依せさせ給ひぬ、宜しく、此故智をこそ、襲ふべけれ』

日親上人の華押



と思ひ、百方、辭を設け、虚を構へて、之れを持豊に讒す、短慮一徹の持豊、それと聞くより、何の思慮にも及ばず、
『然る惡僧は、一

刻も、叶ひがたし、疾く、追放せよ』
と罵り、直に使者を遣はして、
『今は、國中に、叶ふべからず、早々、立ち退くべし』
と迫ること、一日三度に及ぶ、三類の法敵、紛然として、群起し、日親の住居を、包圍して、
『疾く、立ち去れや、去らずば、斯うぞ』
と罵りつゝ、小石を投ずるものあり、矢を射込むものあり、或は、門戸に、人糞を塗り付くるものもありて、百方迫害害を試む、日親、

『高祖聖人は、惡口せられ、罵言せられ、杖木を加へられ、數々擯出せられて、具さに、勸持品を、色讀せさせ給ふ、日親、何の幸ひぞ、今や、有らゆる迫害を被むりて、亦、勸持品を、色讀せんと欲す是れ、望んでも、得られず、願うても、得られざる賜物なるぞ』
と思へば、泰然として、更に、恐るゝ色もあらず。
左れども、持豊の強迫、益々烈しく、尙も、頻りに、退去を迫りて、止まず、日親、
『我れの志は、北國に在り、イザ、左らば、去つて、彼

の地に往かん』

悠々として、但馬を去り、丹後、若狹を過ぎて、越前に入る。

法華經勸持品には、惡口罵詈せられ、及び刀杖を加へられ、數々擯出せられ、塔寺を遠離せらるゝ等の文句あり、之れを其身に實行することを、勸持品を色讀すと言ふなり。

卅五

日親、暫く、越前の府中に留まりて、教化を行ふ。

貴賤男女の來りて、法談を聞くもの、無明の夢を破りて、無上の道に入るもの、甚だ多し、日親、乃ち一寺を建て、頂瀧山妙高寺と稱す。

尋で、越中、加賀、越後の諸國を、歴游して、佐渡に入り、塚原、一の谷等に到りて、日蓮聖人配流の靈蹟を訪ふ。

聖人の斯かる孤島、斯かる窮地に謫せられて、風雪と戦ひ、三類の法敵と、戦ひつゝ、教理を闡明し、宗風を完整せし熱心勞苦を想へば、更らに、一層の勇猛、一層の精進を加へ來る。

佐渡より、番匠屋彌右衛門の船に乗じて、登能の七尾に着し、勸むる儘に、福善寺村なる彌右衛門の家に投ず。其門口を、仰ぎ見れば、日像上人の眞筆に係る題目の木札を掲ぐ、日親、一拜して、中に入り、

『彼の門口の御札は、如何にして得つるものぞ』
と問へば、彌右衛門、

『左ればに候、先代彌右衛門の時、丁度、御坊の如く、一人の御出家、佐渡より、其船に召されて、此地へ渡り給ひ、當家へ、御供申せしに、此木札を、入口に、掲げ置かば、病難、災難を免かるべしと仰せられ、書き賜はりたるが、彼の御札に候、爾來、不思議に、病難、災難に罹りたることなしと、申傳へて候』
と答ふ、日親、頷きつゝ、

『左もあらん、日像上人は、始めて、正法を、京師に、弘通せさせ給へる御方なり、其御眞筆を、門口に掲ぐるは、勿體なし、我れ、別に、書きて、取らせん、彼の御札は、大切に仕舞ひ置くべし』
と告げ、自ら木札に、題目を書きて、與ふ、彌右衛門、大

卅六

に悦び、日像の木札を取りて、日親の木札を掲ぐ。爾來二百年ばかり、京師立本寺の日審、亦、佐渡よりの歸途、此處に來り、又門口の木札を見て、恭しく、一拜し、

『彼の木札は、如何にして得つるものぞ』

と問ふ、其時の主人も、矢張り、彌右衛門と曰ふ、先代より、申傳へし事實を、物語れば、日審、

『這は、鍋被日親なべかぶりにつしんとして、世にも名高き御方なり、斯かる御札を門口に掲ぐるは、勿體なし、我れ、別に、書きて

與へんに、彼の御札は、日像上人の御札同様、大切に、仕舞ひ置くべし』

と告げて、又別に、題目を書きて、與ふ、彌右衛門、奇異の想をなして、早速に、木札を掲げ換ふ。

其後、日審も、亦、世に壺日審と稱せらるゝ名僧なりと聞きて、又々、其木札を大切に保存せりと云ふ。

日親、七尾に留まりて、教化を施し、一寺を建て、遠壽山本延寺と曰ふ、足跡の到る處、必ず、寺院を創建するもの、實に、其手腕の絶倫なるを見るに足る。

日親、北國の巡化を終りて、京師に還り來り、暫く、足を留めて、此地の弘通に力む。

文安元年、更に、播州に下り、東條の邑吉田に、一の庵室を結びて、日夜、折伏逆化を事とす、權教の徒、聞いて、憤激、止まず。

時しも、十一月十六日、申の下刻の頃、日親、庵室の中に坐して、徐かに、經卷を誦す。

突如として、吶喊の聲、近く起る、素破やと思ふ間もあらず、數百人の暴民、手にく、柄物を携へて、ドツと庵室に襲ひ入る。法弟日譽、從者淨光の二人、大に驚き、有り合ふ根棒を、押つ取りて、日親の前に、立ち塞がり、近づく敵を、相手に、奮ひ戦ふ。檀越都五郎左衛門は、法金と號し、同苗與三郎は、法銀と號す、それと聞くより、蹶然として起ち、

『素破や、師の一大事ぞ、ソレ助け奉つれ』
と言ひさま、各々、一刀を取つて、馳せ來り、日譽、淨光の二人と與に、死を決して、防ぎ戦ふ、近づくもの、或は、

腕を落され、或は、頭を割られて、見る／＼、修羅の慘景を、現はし來る。

左れども、敵は、目に餘る多勢、味方は、纔かに四人、三面六臂の勇ありとも、争てか敵せん、四人、俱に血戦しつゝ、同じ枕に倒る。

日親、其隙に、身を脱して、海岸に遁がれ、居合はず舟に、其夜の中に、泉州境の浦に落つ。

後年、遭難の地に、一字を建て、護法山淨光寺と曰ふ、其後、他に移す。

昔者、文永元年十一月十一日、日蓮聖人、房州東條の郷、小松原に於て、東條左衛門景信の爲めに、襲撃せられ、鏡忍、長英、乘觀の三僧、及び工藤左近丞吉隆、之れを防ぎて、或は死し、或は傷つく。

今や、日親の法難たる、年こそ、文永と文安と異なれ、干支は、齊しく甲子、日こそ十一日と十六日と異なれ、月は、同じく十一月、國は房州と播州とこそ異なれ、地は、俱に、東條、人は、縋素と死傷とこそ異なれ、其難に殉ずるもの、皆、四人なり。

双々、對比し來れば、彼此相類し、相似たること、洵に、奇とや言はん、妙とや言はん、人々、是れより、

『日親法師こそ、定めて、日蓮上人の後身なるべけれ』と稱へ合ひて、之れを尊信し、恭敬するもの、益々多し。

卅七

日親、一難を経る毎に、意氣、益々振ひ、一厄に遭ふ毎に、精神、愈々堅きを加ふ。

爾來、數年の間、或は、西陲に下りて、破折に力め、或は、東國に抵りて、弘法を事とす、南船北馬、席、煖まるに違なく、朝講暮説、舌も、亦、爛れんとす。

奮闘の功、空しからず、今や、肥前に於ては、爾前の各派盡く風靡して、餘壘を存せず、京師に於ては、天台宗東福寺の一派、最も打撃を蒙りて、其本城、亦、終に、支持すべからざらんとす。

然れども、法問を以て、争ふべからず、宗論を以て、戦ふべからず、頼む所は、唯、官憲の力に在るのみ、是に於てか、諸宗の僧侶、交々、日親を、幕府に讒す。

將軍義政、今や、捨て置くべからず、長祿四年四月二十六

日、命を執政伊勢守貞親、及び飯尾左衛門大夫に下して、日親を、訊問せしむ、時に、日親東國に在り、二人、乃ち其歸り來るを待つて、糺尋せんとす。居ること數月、日親、尙、未だ歸らず、此年閏九月三日、二人、人を本法寺に遣はして、無法にも、其堂塔を、破却せしむ。

其後數年、日親、尙、東國に在り、寛正三年二月十日、義政、又細川氏馬頭守持賢を以て、命を千葉介頼胤に下し、日親を、逮捕して、京師に上さしめ、且、東福寺の門下たりし諸寺院には、嚴命を下して、盡く、復舊せしむ、其壓迫、至らざるなし。

頼胤、平生、日親を憎むこと甚だし、持賢の公文に接するや、直に、之れを捕へて、京師に送る。

沿道の庶民、之れを聞きて、大に、悲泣哀嘆し、到る處、其輿を遮ぎりて、法話を請ふ、日親、乃ち輿中に坐しつ、諄々として、末法唯一の正法は、法華經に在るを説く、聽くもの、皆、恭敬讚仰せざるはなし。

日親、且つ説き、且つ進み、途中に、數月を費し、十一月

八日を以て、漸く、京師に達す。吏人、
「何とて、遅々せしぞ」
と詰れば、日親、昂然として、

「上洛の途中、庶民、皆、渴仰し、路を遮りて、歸依せしが故に、遅々せるにて候」

と答ふ、復た身の桎梏ていこくの苦を受くるを智らず、持賢、聞きて、將軍義政に申せば、義政、亦、唯、苦笑するのみ。

人々、日親の爲めに、救解すれども、義政、敢て聽かず、飽までも、之れを糺問せんと欲し、持賢に命じて、日親を禁獄せしむ、義政は、義教の子にして、義勝の弟なり、人、

「父の公方にも、懲り給はず、又々、彼の法師を禁しめらるゝこそ、奇怪なれ」

と唱へて、窃かに、眉を擡むるもの、少からず。

其翌寛政四年の夏、義政の母勝智院、不圖、病の床に臥してより、其容體、日一日より篤し。

義政、大に驚き、洛中の名醫松井少輔、竹田宮内卿等を召して、百方、治療に手を盡し、又諸宗の高僧名僧に命じて、

諸種の大法秘法を修せしめしも、更に、何の効顯ともなく、八月八日の拂曉、終に高倉殿に於て、薨去せらる、人、聞きて、愈々驚く。

義政、哀悼止まず、越えて十八日、非常の大赦を行ふ。

日親、獄中に在ること、凡そ二百五十日、亦、赦されて、獄を出づ。

卅八

日親、既に赦さる、一日、管領細川右京大夫勝元を訪うて、謝辭を陳べ、且、

「夫れ、王佛、一にして、二にあらず、王法、佛法に冥し、佛法、王法に合す、二者、相助けて、相離れず、故に、法定まれば、國清み、國清めば、法、亦、興る、國を治め、民を安んぜんと欲するもの、何ぞ、佛法を捨つべけんや。

抑、佛法は、唯、一門のみ、天に、二日なく、國に、二主なし、教門、何ぞ、二佛あらんや、世尊、經を説くと五十年、其眞實を顯はすもの、唯、一の法華經に在り。衆流、注ぎて、一海に入り、衆法、滅して、一妙に歸す、

末法萬年に流布すべきは實に、此法華經にして、閻浮衆生の護持すべきは、亦、此法華經に外ならず。

宗祖日蓮、時の執權を諫曉すれども、執權、之れを用ひず、而して、其末路や、乃ち如何、君、若し天下國家を念とし給はゞ、決して、法華經を捨て給ふべからず」

諄々として、説き示せども、大聲、終に、俚耳に入らん狀もあらず。

執政伊勢守貞親、座に在り、日親に向ひて、宗門の起源を問ふ、貞親、當時、最も權勢あり、幕府、呼んで、父と言ふ、日親、忽ち膝を其方に押し向けつ、

「宗祖日蓮は、如來の御使にして、法華經の行者に候、身命を抛つて、法を弘め、災禍を冒して、教を説く、其勇猛精進、何者か、此れに及び候はんや、左れば、諸宗の怨嫉さんしつ、身後に及んで、其行狀は、元享釋書げんかうしやくしょにも入れられず、高僧傳にも載せられず、隨つて、世人、其始めを知るもの少なく、却て、其誤を傳ふるもの多し、日親、聊か其家系を語り候はん。

抑、日蓮の俗姓は、藤原にして、實に、大職冠鎌足公よ

り出づ、鎌足五世の孫冬嗣、閑院左大臣と稱せらる、冬嗣八世の孫を、少納言共資と言ふ、遠州の國司に任せられて、村楠に居り、子孫、終に、此國に住す、共資五世の孫政直、始めて、貫名に住し、貫名四郎と稱す、政直の孫重實、五郎と稱す、重實の二子を、二郎重忠と言ふ、北條遠江守時政の爲めに、伊勢平氏に與みせりと誣められて、安房國長狹郡東條郷市川村に流竄せらる、日蓮聖人は、實に、其御子に候』

と説き、更に進んで、其修行に及び、
『日蓮は、内典外典の書を読み、諸宗諸派の教を究めて、世尊の眞意は、一に、法華經に在り、教法の醍醐、亦、實に、法華經に在るを知つて、此宗門を開き給ふ、世尊、自ら立て給へる宗旨なるを以て、之れを佛立宗と曰ひ、世尊の智慧を説き給へる經文なるを以て、又之れを佛智宗とも申す、末法の佛道、偏に、我が法門の上に候』
と説けども、生蘇に慣れたるものは、醍醐の眞味を知らず、千言萬語を費やすも、益なきを見て、佛然として去る。
日親、既に、青天白日の身となる、復た本法寺を再興して、

日夜、弘法に、力を盡す。

卅九

日親は、正法の忠臣にして、又直臣なり、外に、三類の法敵と戦ふと與に、内には、一宗の法類とも戦ふ、彼の中山法華經寺の貫主日有の謗法を、諫諍せし以來、其紛紜、相結んで、解けざること、既に二十年。
苟くも、中山に、非違の振舞あらば、日親、必ず、之れを諫戒して、少しも、寛假する所なし。
佐倉城主千葉三郎胤滿の退轉せしより、下總の一國、盡く、千葉介頼胤の所領に歸す。
千葉介の家は、世々、念佛の信者なり、法華經寺の寺領、數地、合せて二百餘貫の所帯は、轉じて、其所領に入り、爲に、中山は謗法の寄進を受くるの姿となる。
謗法の寄進を受くるは、即ち謗法の行爲なり、嚴正の日親、之れが還附を論じて止まず、中山に於ては、
『是れ、多古家の寄進にして、千葉家の寄進にあらず、之れを受くるも、何の妨げかあらん』
と辯ずれども、日親、

『否な、多古も、神保、中村、秋山、谷中等と與に、千葉家の所領なり、千葉家、既に、謗法の徒たる上は、其寄進を受くるは、即ち謗法の寄進を受くるものなり、是れ、法華經の本旨にあらず、又高祖聖人の本意にあらず』
と論じて、大に、其違を攻撃し、飽までも、之れを匡正せずんば、止まざらんとす。

文安五年十一月十三日、日有、卒して、日院、其跡を繼ぐと雖も、日親との關係は依然として、尙、舊の如し。
兩者、相和せずんば、弘法上の不利、少からず、本光寺の住職日住、立本寺の學頭法性院、妙蓮寺の學頭佛性院、六條の門徒明靜坊等、相謀りて、双方の和解を圖るに決す。
寛正六年十月、月藏坊日祝なるもの、其使僧として、本法寺に來り、日親に、面會して、

『中山と、貴山と、永く、御不快に在はさんこと、宗門の不利、少からず、此際、御改悔候て、御同心あらんことこそ、我等の希望に候へ』
と陳ず、日親、容を改めつ、

『中山の法理改悔と申すことは、正義を捨て、邪義に

改むるの意に候よな』

と問へば、日祝、

『否な、御坊御申しの條々、正義たるに依りて、日院、其誤りを正さる、上は、御坊に於ても、御悔改なくては、如何やと存するにて候』
と答ふ、日親、儼然として、

『凡、改悔とは、過を悔ゆるを申すものぞ、正義を立てて、邪義を破したるを、改悔せよとは、扱々、奇なり、妙なり、日親に於ては、決して、改悔すべきことなし、中山にてこそ、改悔あるべきことなれ』
と責むれば、日祝、透かさず、

『扱は、中山に於て、御改悔あらば、御坊も、御同心候か』
と問ひ返す、日親、

『日親の天下を諫め、國人を化するは、皆、法の爲め、道の爲め、國家の爲たを思ふに出で、敢て、身のため、私の爲め、一山の爲めにあらず、只、磊々落落々、光風霽月の如くならんこそ、日親の志なれ、若し、中山に於て

も其先非を悔いて、化儀化法、共に日親の指南に任され
 ば、日親、何とて、同心せざる事あるべきや、斯く
 申さば、日親、自ら高しとするに似たりと雖も、其誤を
 正し、其邪を導くものは、日親なり、日親を以て、師と
 立てられんこと、何の異とすることやある、凡、化訓の
 徳あるものは、皆、衆生の師たり、山階寺の行表僧正は、
 もと、傳教大師でんけうたいしの師なりしと雖も、其唐土より歸朝の後
 は、却て、傳教を師として受戒せしにあらざや、況や、
 日親と、日有とは、俱に、日蓮上人を師とす、日院は、
 乃ち日有の弟子なれば、日親を、師と頼まるゝに、何の
 不可なることかあらん、此儀、同意とあらば、兩山協力
 して、俱に、弘法に勵まんのみ』
 と告ぐ、日祝、敢て、異論を唱へず、

『御諒、道理にこそ候へ、御坊の御一味は、年來の本望
 に候、中山に罷り下り候て、日院に教訓せし上、屹度、
 改悔致させ申すべし』
 と答ふ、日親、

『日院、道心、他に異ならば、定めて、改悔すべき由を、

申さるゝこともあらん、左れども、衆徒に於ては更に、
 同心仕りがたかるべく、随つて、日院、獨り、承引せん
 こと、如何あるべきか、其時、御邊は何と致さるべきぞ』
 と問へば、日祝、

『人は、何とも申せ、某に於ては、此儀、必ず、仕遂げ
 候はん、若し、御承引候はずば、某一人にても、御門下
 へ、参り候はん』
 と答へて、辭し去り、直に、中山に赴く、其翌文正元年、
 日祝、再び上洛して、日親を訪ひ、

『中山の改悔の御狀、これに候』
 とて、一通の書狀を呈す、日親、披きて、之れを見れば、
 『法理に就て、日親諫諍の條々、悉く、改悔せらるゝに
 依て、和睦候事、尤も目出度し、以後は、世出世共に、
 指南を請くるの旨、申談すべく候』
 とありて、字句、少しく、明瞭めいりやうを缺く、日親、

『何とて、日院改悔とは、明記せられざるぞ』
 と問へば、日祝、
 『某への御狀にて候へば、御名乗をば遊ばさず候、法理

に就て、日親諫諍の條々、悉く、改悔せらるゝに依てと
 ありて、御諫諍の御人體、分明なる上は、其れに依りて、
 改悔するは、日院の御事なること、自から顯然に候はん、
 特に以後は、世出世共に、指南を請くると候上は、後々
 の事は、諸事、御指南ありて然るべく候』
 と答ふ、日親、乃ち此れに従ひて、愈々中山と、和睦を行
 ふ。

其後、安世院の弟子加賀坊なるもの、本法寺に來り、
 『中山に於ては、當時より、先非を御悔い候て、御愁訴
 せられ候由、慥かに、披露仕つりて候、御不審に候へば、
 召合はされ候へ、對談仕つる可く候』
 と語る、日親、聞きて、領うりづき、

『扱は、日祝、兩舌を用ゐしと覺えたり、先年、身延と、
 中山と、和睦する時も、其中間に立ちたるもの、兩舌
 に依りて、一たび、事、調ひて、又再び、破れたること
 あり、是れ、往々、世にある習ひなり』
 と思ひ、直に、

『重ねて、中山へ糺明するの間、暫時、元の儘たるべし』

との旨を通ず、兩山の和議、漸く成りて、又忽ちに破れ、
 永く、兩山一和の實を見るを得ざりしこそ、是非なけれ。
 中山の書狀なるものは、欺瞞文の最も巧妙を極むるもの
 なり、日院の改悔せる如くに見せ掛け、其實「改悔せら
 るゝ」との文句を用ひて、日親改悔の事となし、又日院
 の指南を請くる如くに見せ掛け、其實「申談す可く候」
 との一句を加へて、日親の指南を請くる事とす、一文兩
 意あり、用筆、巧妙なりと雖も、一點、誠意の認むべき
 なし、仲裁口の信すべからざること、往々、此の如し。

四十

日親、今は、五十七歳に達すれども、幾多の艱難を経來つ
 て、意氣、益々旺盛を加へ、法の爲め、道の爲めに、更に、
 一層の奮闘を加ふ。
 是れより先き、康正二年十月十日、逆修の石塔を、洛東鳥
 部山に建て、自ら首題、並に年號月日等を書す。
 其翌長祿元年、泉州堺の浦に、一寺を建て、南海教化の
 道場となし、名づけて、登寶山本成寺と曰ひ、自像を刻し
 て、寺中に、安置す。

一日、本法寺に在りし時、一牙、自から抜け落つ、日親、心に、

『這は、本成寺に作り置ける逆修の像中に納めん』

と思ひつゝ、其儘、手箱の底に、秘め置きて、人にも示さず、其後、幾程もなく、一人の使像、突然、本成寺に來りて、寺僧に對面し、

『是れは、師の坊の御牙に候、御影の背部に納むべしとの仰せに候』

と陳べて、一牙を出だし、具に、其納むべき場所を告げ知らせし儘、復た飄然として、立ち去る。

偶々本成寺の檀越、上京の序に、本法寺に詣て、日親、に謁す、日親、彼の牙の事を思ひ出で、

『幸ひの事なれば、御頼み申したし、我れ、先頃、一門の牙、抜け落ちたれば、本成寺に残せる木像の中に、納めんと存するなり、持ち歸りて、住持に渡し、コレの所へ、納めよと傳へられ候へ』

と語れば、檀越、

『其儀ならば、疾くに、仰せの場所へ、納められて候』

と答ふ、日親、

『イヤ、左様の事あるべき筈なし、牙は、手箱の底に秘、め置きし儘にて、未だ本成寺へは遣はさず、折りもあらば、送らんと、存じ居たる所なり』

と言へば、檀越、

『其は、奇體のことも候ものかな、先達、師の仰せなりとて、一人の使像、御牙を持參せるにて候、但し、何處の人やらん、今まで、見知らぬ人なりと、住持も申されて候』

と答ふ、日親、小首を傾けつゝ、傍なる手箱を取つて、其中を見れば、果して、件の牙はあらず、日親、心の中に、

『扱は、化身のもの、持ち行きたるにこそ』

と思ひて、我が道心の堅固、既に、此靈妙の域に達するを覺り、思はず、莞爾として、微笑む。

此像と、此牙と、永く、傳へて、本成寺の什寶たり。

日親、尙、此他に、石塔を建て、祖廟を設けしこと、勝けて、算へがたく、日蓮聖人の像を刻せしこと、亦た少からず、日親法動の高さ、抑も幾許ぞ。

四十一

日親、法華經の持者として、行者として、獻身奮闘すること、實に六十一年、長享元年七月、自ら叡昌山本法寺縁起を作りて、中に、其身の經歷を叙す。

『爰に、日親法師の修行は、生年二十一歳、應永三十四年丁未の春二月上旬、講肆の門を開きてより以降、星霜八十一歳、文明十九丁未の秋に至りて、六十一回の鳥兔を送る、柳營より、花落に及ぶこと十五箇度、東西に馳走すること九箇度、南北に往還すること六箇度、寺院を建造すること三十有餘、公武を諫争すること、合せて八箇度、兩寺の堂宇を破られては、數々見擯出の明鏡を磨き、拷問苛責を蒙りては、我不愛身命の金言を扶く、玄風、遠く扇いでは、且く執權謗實の雲霧を巻き、法雨、遙かに灑ぎては、良に斷善不信の枯稿を潤ほす。先賢に及ばずと雖も、後哲に稀れなるべき歟、中に於て、弘法歲月の久々と、法訴度數の多々と、兩箇の功勳に於ては、恐くは、一閻浮提無双の行者なり、誰れか、一天に眼を合せ、四海に肩を並べん』

と言ふもの、言々、皆、自畫自讚にあらずして、句々、盡く、寫生寫實なり、日親一世の徳行法勳、悉されて、此一節の中に在り。

爾來、老驅を提げて、尙も、教化を施すこと、又一年。

長享二年九月十七日、急に、法弟日澄、日淳、日敬、日憲以下を召して、

『我れ、今日、入滅すべし、本法寺は、日祇に付囑す、餘の寺院は、夫々の法弟に與ふ、各々自行を慎しみ、化他を勵みて、怠ることあるべからず』

と告げ、大曼荼羅に向ひて、合掌し、北を枕にし、西に面し、右脇を下にしつゝ、諸法弟の朗々たる讀經聲中、安祥として逝く、壽八十有二。

遺骸は、鳥部山に送りて、茶毘に附し、塚を此山に築きて、遺骸を收む、後、一寺を建て、鳥部山本壽寺と曰ふ、是れ、曩きに、逆修の石塔を建てたる所。

其著はすところ、「折伏正義鈔」、「立正治國論」、「埴谷鈔」、「傳燈鈔」、「一生修行記」等あり。

白法隱没の世に於て、正法流布の任に當り、死身弘法の聖

訓を奉じて、不惜身命の苦節を守り、刀鋸を辭せず、鼎鑊を恐れず、悍然として、勸持品を色讀せるもの、日親の前に、日蓮あり、日蓮の後に、日親あり、異曲にして同工、異體にして同心、殆んど、二人にして、一人の如し、宜なる哉、日親を稱して、日蓮の後身なりと言へること。

一死、法門を護るは、法華經固有の精神にして、一死、君國を護るべき我が神州傳燈の精神と一致す。

終始、此護法の精神を死守して、火をも恐れず、水をも恐れず、刀鋸湯鑊をも恐れず、悍然として、克く、其法城を全うしたる日親上人の鐵心石脇は、實に、一般國民の、之れを護國の精神として、學ぶべきの點なりとす。察せざるべけんや。

江戸城

太田道灌築城の地

江戸は、武藏國豊島郡に在りて、葛飾、荏原の二郡に亘る、武藏野の一部にして、一に、荏土と書す、隅田川の海口に在るが故に、江戸と稱すと云へるは、附會なり、長祿元年、太田持資入道道灌の築城せし處。

英傑の士は、萬里の長城なり、之れを殺すは、自ら汝が萬里の長城を破るが如し、太田道灌の如きは、乃ち其人か。扇ヶ谷の主上杉修理大夫持朝の執事に、太田備中守資清と云ふものあり、文を好み、武を嗜む、持朝を輔けて、屢、軍功あり、其名、山東に著る。

永享年間、京師に朝して、義教將軍に謁す、義教、『關東武士の戦状こそ、見まほしけれ、如何に、我れに見すべきか』

と言へば、資清、敢て辭せず、唯と答へて、其儘、座を起

つ。

家臣高築次郎左衛門と與に、甲を環し、馬に跨がり、大薙刀を打ち揮り、中庭を馳驅すること數回、頓て、ひらりと、地上に、降り立ち、

『先づ、斯様に候』

ハツとばかりに、平伏すれば、

『扱ても、美事々々』

義教、嘆賞止まず、側近く召しつゝ、小刀を抜きて、ツブと、蜜柑に、突き刺し、

『褒美を取らせる』

ガイと、面前に、突き出す、

『ハツ、有りがたく頂戴仕り候べし』

一ゆり、二ゆり、膝を進めし資清、忽ち口を開きて、バクリと食す、一座の面々、皆、其剛膽に驚かざるはなかりき。

道灌は、資清の長子なり、永享四年を以て、相州糟屋の館に生まる、幼名を、鶴千代と曰ひ、資長と名づく、道灌は其號。

鶴千代、生れて、凌霄の氣あり、其身も逞く、其智も優れ

て、尋常の子と、同じからず、三四歳の頃には、早、人を驚かすの振舞、少からず、

『天晴、神童や、其行末こそ、頼母しけれ』

見る程の人、聞く程のもの、皆、感嘆せざるはなし。

九歳の時、鎌倉の建長寺に入りて、學問を修む、一を聞いて、十を知るの才あり、十一歳の時には、其智、既に大人をも凌ぐばかり。

一日、書を裁して、父の許に贈る、資清、披見しつゝ、

『斯程の學文あらば、武士としては、事を缺くことありじ、さらば、召し還さん』

人を遣はして、我が館に、呼び還し、師を選びて、更に、文武の道を修めしむ。

持朝、鶴千代の才智、群に拔んずるを見て、喜ぶこと、甚だし、

『我家の棟梁たらんものは、此子ぞ』

自ら冠を加へて、名を源六郎持資と賜ふ。

山内の主上杉安房守憲實、其聲譽を聞いて、之れを得んことを求む、持朝、

『此子ばかりは、萬金にも換へがたし』
唯、一言の下に拒んで、應ぜず。

二

子を視ること、父に若かず。

持資、既に、十有五歳に達す、容貌、魁偉にして、意氣、亦、英豪、人に屈せず、資清、其禍を招かんことを慮れ、一日、持資を召して戒む、

『高き木は、風に折られ、高き杭は、人に撃たる、汝は、志高くして膽大なり、身を持つること、謹嚴ならざれば、他の爲めに、陥れるゝの虞あらん、彼の障子を見よ、直ぐなれば立ち、曲れば倒るゝものぞ、汝、能く、之れを思へ』

懇々として、説き諭す、言々、理あり、情あり、持資、

『仰せ、誠に道理にこそ候へ、去りながら、父上』

と言ひつゝ、起つて、次の室に到る、

『何事をかする』

資清、心に怪しみつゝ、其後影を見送る、持資、頓て、一曲の屏風を携へ來りて、其處に置く、

『御覽せられ候へ、此屏風、曲る時は立ち、直ぐなる時は倒る、如何にすれば、宜しくや候らん』

ヂツと、父の顔を見やれば、資清、默然として、口を噤む。

持資、志大にして、氣驕る、

『名節を、泰山よりも重んじ、死生を、鴻毛より輕んず』

とは、其常に自ら口にする所、資清、其客氣に驅られて、一身を誤らんことを恐れ、自ら、

『驕者不久』

との四字を、大書して、壁に懸け、持資を召して、之れを讀むこと一過、

『如何に、此意を知るか』

と問へば、持資、莞爾として、笑みつつ、

『願はくは、一字を添へ候はん、許し給はんや』

と言ふ、資清、

『苦しからず、心の儘にせよ』

と答へて、許せば、持資、筆硯を持ち來りて、其側に、書き加へしは、

『不驕亦不久』

との五字、資清、見るより、カツと怒り、扇を揚げて、ハタと、其頭を撃つ。

之れを聞くもの、皆、舌を卷て、其才器を稱す。

持資、才氣、奔放にして、錐を囊中に入るゝが如く、機智、

縦横にして、球を盤上に轉ずるが如し、包まんとすれば、

其鋒、益々露はれ、抑へんとすれば、其勢ひ、愈々揚がる。

資清、深く、其前途を憂ひ、機に觸れ、事に臨みて、百方、規戒を加ふること屢次。

天性聰明の持資、學の進むと與に、徳の尊ぶべきことをも知り、年の長ずると共に、行ひの慎むべきことをも曉りて、次第に謙讓し、抑損するに至り、二十歳を越ゆる頃には、其聲望、遙に、父に過ぐるに至りぬ、

『斯くてこそ、君の御用にも、立つべけれ』

是に至りて、始めて、其意を安したる父の資清、

『何れ、其内に』

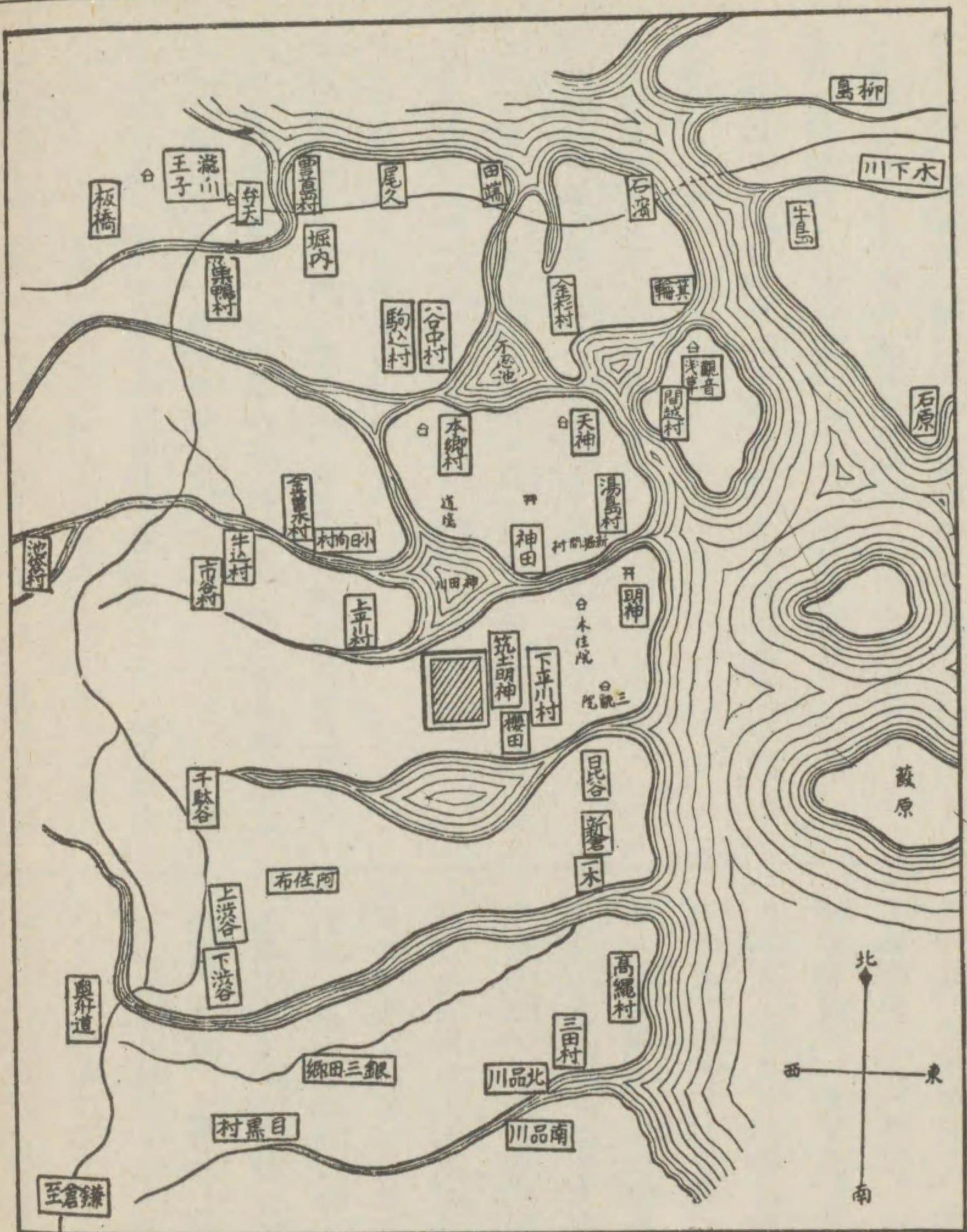
と今は、時機を見て、家をも譲らん心さへ起る。

三

持資、今は、一方の將たるに足る。

資清、乃ち家を譲りて、武州川越城に居る、時に、康正元

江戸古圖（永祿年間の江戸及び其附近）



年、持資、年二十四。

當時、上杉氏と、足利管領家と、二世の仇を結ぶ。初め、足利尊氏の天下に覇たるや、其身は、京師に居り、次子基氏を、鎌倉に置きて、關東を鎮せしむ。之れを管領と曰ひ、私に尊んで、公方と稱す。基氏の曾孫持氏、傲放にして、將軍の節度に從はず。山内の主上杉安房守憲實執事たり、屢々苦諫すれども、聽かず、却て、之れを除かんとす。憲實、其領邑上州白井に走りて、狀を京師に訴ふ。將軍義教、乃ち師を遣はして、持氏を討じ、憲實も、亦兵を率

みて、鎌倉に迫る。

持氏、兵敗れ、勢ひ窮まり、永安寺に退きて、自殺す。

鎌倉の管領、此に亡ぶ。

其後十餘年、憲實の執事長尾景信入道昌賢、持氏の子成氏を立て、管領となし、憲實の子憲忠を推して、執事となす。

既にして、成氏、事を以て、憲忠を殺す。

憲忠は、持朝の女婿なり、是に於てか、山内、扇ヶ谷の兩上杉氏、共同して、成氏に當る、攻戦、日として、絶ゆることなし。

是時に當り、持朝亦、家を其子顯房に譲りて、川越に退く、持資、乃ち之れを輔けて、成氏と戦ふ。

此年の冬、持資、又顯房を輔けて、藤澤に戦ふ、交戦三日、短兵、急に接す、意氣、頗る猛烈。

敵將北條憲宣、力屈し、其兵、終に四散す。

中村治部少輔重頼は、京師の人なり、來りて、顯房に頼る、此日、亦、敵と松原に於て戦ふ。

會、栗毛の馬に跨り、二ツ引兩の背旗を挿める一敵あり、

江戸城

重頼、望み見て、

「扱ては好き、敵ぞ」

自ら馬を驅つて、此れと戦ひ、其首を獲て、持資に示す。持資、之れを見れば、年齒二十ばかり、艶麗、凡ならず、髪には、名香を焚きしめて、異薫、四邊に漲る。持資、つくく見て、哀惜すれば、重頼、

「敵ながらも、憎からぬ面影に候ものかな、一句、手向け給はんや」

と乞へば、持資、立ちどころに、

斯る時こそ命の惜からめ

豫てなき身と思ひおかずば

との一首を詠すれば、重頼も、亦、呻吟しつゝ、

なき身とは誰も知れども諸共に

今はおよぶ事をしぞ思ふ

との一句を賦して、此れに和し、二人、相見て、悵然たり。斯る時との和歌を以て、持資の辭世となせるは、誤りなり、藤澤の戦に、敵の少年を弔ひたる時の句なることは、「慕京集」に記さるゝ所にして、争ふべからざるの事實

なり。

四

今や、持資の扇ヶ谷家に於ける、長尾昌賢の山内家に於けるが如く、威望、隠然として、其主よりも重し。

當時、成氏は、下總の古河に在り、呼んで、古河公方と謂ふ、父祖の餘威、尙、有り、其勢力、未だ劇かに、侮るべからず。

康正二年、持資、江の島の辨天に養して、武運を祈る、其歸途、一魚あり、跳りて、舟中に入る、持資、取つて見れば、鯨なり、

『九城、我が手に入る、是れ、我が武を輝かすべき吉兆ぞ』

持資、深く、心に悦び、終に九城を築かんと欲す。

持資の父資清、川越城に在り、病と稱して、出でず、陰かに、東國の形勢を窺ふ、一日、持資を、鎌倉より召して、胸中の機を語る、

『熟、今日の有様を見るに、君は、徳を失ひ、臣は、節を亂す、天下、其治に復せずして、諸民、其禍を被らざ

るはなし、是れ、長春院殿持氏の京師に背き給ふに起り

て、長棟庵主憲實の主君を亡ぼすに始まる、庵主、誠に、忠義の心あらば、京師に請うて、長春公の死を宥め、公達を奉じて、鎌倉の主と仰ぎ、斯くして、其身は、隱退すべきに、計、此に出でず、主君の惡を顯はして、追討の師を請ひ、終に、之れを亡ぼし奉れること、固より、

不臣の罪を免るべからず、其後、上杉家の一族、成氏公の恩免を願へるは、畢竟、庵主の罪を掩はんが爲めにし

て、亦、誠忠の心に出づるにあらず、去りながら、成氏公の鎌倉の主と仰がれ給ふは、上杉家の推戴に出づるにあらずや、怨みは怨み、恩は恩なり、然るを、讒者の言

を信じて、擁立の義を思はず、一朝、不意に、右京君憲忠を滅ぼし給ふ、上杉家たるもの、何ぞ、隱忍すべき、終に、兵を提げて、起てるもの、亦、止むを得ざる所ならん、去りながら、關東の將士、彼れに付き、此れに屬して、紛々相争ふの時、若し、英雄の士、其間に起つて、

兩虎の弊に乗ずれば、由々しき大事にあらずや、成氏公は、東國を鎮むるの器にあらず、之れを擁立するも、甲

斐あるべからず、我れ、不肖なりと雖も、上杉家の家長たり、何ぞ、主家の讐敵を、看過すべけんや、我れの病と稱して、籠居せるもの、偏に、時機を待たんが爲めのみ、今や、公方は、古河に在り、此上は、長尾入道と謀りて、一舉に、之れを攻め亡ぼさんと存するなり、汝の所存、如何にぞや』

聲を潜めて、説き示せば、持資、

『仰せの趣き、道理にこそ候へ、去りながら、此に一つの患ひあり、今や、兩屋形、轡を並べ、鋒を揃へて、古河公方に當り給ひ、其關係、骨肉の如く、水魚の如しと雖も、古より、兩雄、並び立たず、一旦、公方を亡ぼし給ふ上は、兩家、忽ち怨みを構へ、兵を交ふるに至らんこと、疑ふべからず、山内殿は、國廣く、兵多きに反して、當屋形の御分國は、纒に、彼れの家老長尾入道の所領に匹敵するに過ぎず、一朝、反目するに及ばば、争か

で、對揚の合戦を遂げ得られ申すべきや、今日の計たる、諸所の要地に、城郭を構へ、壘を高くし、壕を深くして、備へを堅くし、糧を蓄へ、士を養ひて、武を勵み、民を

隣れみ、下を惠みて、徳政を施さんに若かず、此の如くすること、數年に及ばば、國富み、兵強くして、遠近、心を屬すべきは、必然に候、古河公方の如き、復た何の恐る、所か候はん』

其言ふところは、眼前の計にあらずして、其論ずるところは、永遠の策なり、計らざりき、戦亂の世、復た此有道の言を聞かんとは、資清、覺えず、ハタと、小膝を拍つ、

『汝の申すところ、道理至極ぞ、疾く、要害の地を相して、堅固の城を築き候へ』

即座に、其議に従ふ、持資の九城を築くべき時機、今や來る。

五

持資、胸に、韜略を藏し、眼に、形勢を察す、

『抑、公方の根據は、總州古河に在りて、山内の根據は、上州白井に在り、我が扇ヶ谷家は、武州を領して、其鎌倉に出づべき衝路を占む、熟、武州の地勢を視るに、隅田川の一水、武藏野の平原を、横斷して、海に注ぐ、我が川越は、其上流に在り、豊島は、其下流に在り、此河

流に沿うて、首尾一申せる防備を施し、南北策應し、彼此援助すれば、敵を武州以東に壓迫して、復た一步をも、西下せしめじ』

とは、夙に、其胸中に畫けるところの計策、自ら其地勢を踏査し、形勝を視察せんと欲して、隅田川の沿岸を下る。百聞は、一見に若かず、豫てより、豊島方面に於ては、岩淵の近傍、稻付に築かんと思料せしも、其地形の不利なるを察して、之れを中止し、更に、西ヶ原、若くは神田山に經營せんとせしも、亦、其意に適せず、其處か、此處かと、搜し索む。

持資、會々夢想に感じて、一の地點に到る、彼方をも見つ、此方をも見つ、

『實にも、此處こそ、四神相應の地、形勢無比の處なれ』葉付の竹を建て、四方に、繩張を施す、

『此處は、何と申す處ぞ』附近に居合はす農夫を召して、問へば、

『此あたりは、千代田、寶田、祝田と申す三ヶ村に候』と答ふ、千代田とは、何の佳名ぞ、寶田、祝田とは、何の

美名ぞ、持資、快然として、

『扱ても、喜ばしや、國は武州、郡は豊島にして、村も、亦、吉瑞の名なり、此地に、城を築かば、後榮、疑ひなし』

と悦ぶ、抑々此地は、當時より二百七十年前、江戸太郎重長の居りしところ、重長九世の孫駿河守重廣の、多摩郡喜多見に移るに及んで、復た元の荒涼寂寞の郷と化し居たりしなり。

持資、今や、愈々築城の工事を起さんとす。茫々たる草原の端、寥々たる漁村の畔、何の材料かあり、何の工人かあるべき。

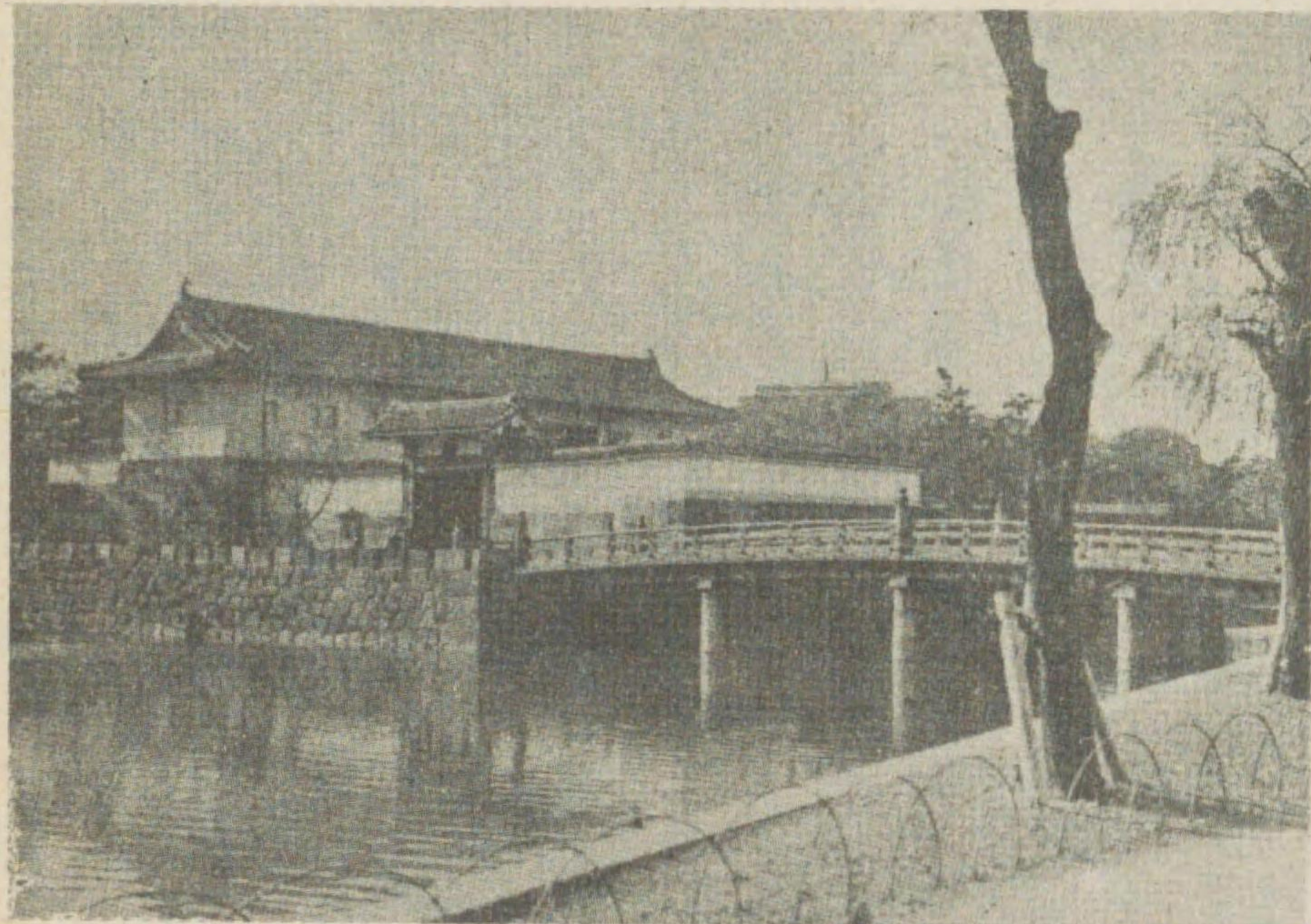
幸に、水利の便あり、持資、木も、竹も、人も、皆、川越より、運び來りて、土木を起す。

拮据經營、日夜、工事を勵む、力士は、星馳して、石を揚げ、工匠は、霧列して、斧を運ぶ、工程駁々として、日に、月に、進み、長祿元年四月八日に至りて、工事、全く成る。中城の外に、子城あり、外城あり、壁を築き、濠を繞らし、門を設け、橋を架し、石を以て、牆を積み、鐵を以て、扉

を張る、稱して、江戸城、又は平河城と曰ふ。

平川門

平川門は江戸城の一門なり太田道灌の我庵は松原つゞきと詠じたる松原は此平川門内に在りしなり



城となり、又二百四十年にして、天子の宮室とならんとは、亦、誰かは、夢想すべき。

六

抑々江戸の地たる、武藏野の一端に在りて、奥羽の要衝に當り、品川灣、隅田

川の江海を控へて、水陸の漕運を有し、兵事、交通上、最も優越の地勢を占む。

特に、荒川、隅田の水路に、頼りて、川越、江戸の聯絡を保つ點に至りては、管に、當の敵たる古河の成氏を拒ぐに便なるのみならず、後の敵たるべき上州の山内を制するも、亦、甚だ利あり。

若し、成氏にして、江戸を襲はば、川越の兵を以て、之を撃つべく、山内にして、川越を侵さば、江戸の兵を以て、之れを撃つべく、正に、是れ、首尾相應する常山の蛇勢。持資、又別に、岩槻、鉢形等の城を築きて、九城の數に充つ。

江戸城、既に成る、持資、城代として、此に居る。城上より、西北の二方を望めば、武藏野の草原、莽々蒼々として、遠く、天上の雲と連なり、左には、秀麗の芙蓉、其屏顔を呈はし、右には、崢嶸の毛山、其雄姿を示す。眸を東南の二方に、轉すれば、墨江、蜿蜒として、品海に注ぎ、品海、又浩蕩として、房山に接す。

窓含西嶺千秋雪 門泊東吳萬里船

と詠じたる杜子美の名句は、實にも、此地の爲めに、設けしかと思はるゝばかり、西舎を、含雪齋と稱したるも、此句に取り、東樓を、泊船亭と名づけしも、又此の句に取れるもの、別に、燕室を設けて、靜勝軒と云へるは、此れぞ、兵は靜を以て勝つとの語に取る。

彼方を見れば、蓮峰、雪白くして、影を軒端に落し、此方を見れば、松原、風青くして、波を眼下に懸へず、詩思、忽ち油然として湧ける持資、

我庵は松原つゞき海近く

富士の高根を軒端にぞ見る

との一首を詠じて、胸中の風懷を遣る。

文事あるものは、武備ありとかや、武備あるもの、何どか、文事を忘るべき。

持資、兵を集め、糧を蓄ふるの傍ら、史傳、和歌、記録、醫方、兵書、其他、凡百の珍籍を、蒐集すること數千函。身は、四海動亂の世に生れて、心は、兵馬倥傯の間に忙はしきにも拘らず、小暇だにあれば、頤を几案の上に支へて、眼を和漢の書に曝らす。

古史を繕きては、國家隆替の由る所を思ひ、兵書を閱みしでは、英雄興亡の基づく所を考ふ、文にも深く、武にも深し、

『此れぞ、正しく、諸葛武侯の再來ならん』
とは、部下諸人の稱へ合ひて、尊敬するところ。

持資、是れより、孜々として、武を練り、兵を鍛へ、徳を施し、治を勵ます、遠近、其風を聞き、其化を慕うて、城下に來り集まるもの、年一年より、多きを加ふ。扇ヶ谷の威風、今や、漸く加はり來る、

七

持資の文を好むこと、武を好むが如し。

長祿二年、剃髮して、道灌と號し、備中入道と稱す、時に、年廿六。

爾來、研究に研究を重ねること數年、武に於ては、孫吳の秘奥を究め、文に於ては、和漢の精華を極む、最も數島の道に長ず。

寛正五年の春、道灌、主用を帯びて、京師に上る、將軍義政、召して、謁見を賜ふ。

道灌の歌名、畏くも、雲井の上に達す、後土御門天皇、特に、堂上を遣はして、武藏野の事を問はせ給へば、道灌、即座に、

露おかぬ方もありけり夕立の

空よりひろき武藏野の原

と答へ奉る、更に、都鳥の事を問はせ給へば、

年ふれど我がまだ知らぬ都鳥

隅田河原に宿はあれども

と答へ奉る、尙、江戸の風景を問はせ給へば、彼の

わが庵は松原つゞき海近く

富士の高根を軒端にぞ見る

との和歌を以て、答へ奉る、天皇、觀感淺からず、辱なくも、

武藏野は刈萱のみと思ひしに

斯る言葉の花もありけり

との御製を賜うて、賞讃あらせ給ふ、誠に、無比の光榮と謂ふべし。

管領細川武藏守勝元も、亦、韓昌黎の「短慮不成功」との

語を擧げて、其意を問へば、道灌、言下に、

急がずば濡れざらましを旅人の

跡より晴る、野路の村雨

と詠じて、此れに答ふ、其歌才の雋敏にして、其歌句の老熟なること、亦、曩祖頼政にも恥ぢずと謂ふべし。

當時、文字を読み、文事を解するものは、唯、長袖者流あるのみ、道灌、乃ち文雅の僧と交はりて、方外の友とす。洛陽聖護院の院室に、心敬と言へるものあり、十住心院權

大僧都と稱す、幼より、連歌の道を好みて、研究の功を積み、終に、其妙境を究めて、名聲を、一時に馳す。晩年、來りて、品川に居る、道灌、暇あれば、城中に招きて、歌筵を、開くこと屢次。

特に、文明六年六月十七日の歌會の如きは、最も盛事を極め、題して、江戸歌合せと謂ふ、戦亂の世に、此風流の會あり、世、傳へて、以て美談となす。

道灌、心敬と與に、千首の連歌を催す、其卷頭の發句は、
心敬の
九つの品川しるき蓮かな

と云へる句なり、世に、品川千句と云ふ。

文明八年の秋、道灌、洛陽南禪寺の村庵、蘭坡、建仁寺の天隱、龍統、相國寺の横川等に請うて、靜勝軒の詩文を作らしめ、此年九月、又湘山の得玄、相陽の中榮、河陽の東勸等に囑して、江亭の記を作らしめ、其後、又相國寺の万里、建長寺の玉隱、竺雲等に託して、靜勝軒の詩文を作らしむ、其成るに及び、之れを壁間に掲げて、日夕、諷誦す。蕭庵龍統は、曾て、江戸に來りて、道灌と相識る、其序中に於て、

『比來、騷亂以來、欽んで、王命を奉ずるもの、八州の内、才かに三州のみ、三州の安危は、武の一州に係り、武の安危は、公の一城に係る、二十四郡、唯一人のみと謂ふべし』
と頌す、亦、以て其八州に、傑出せるを見るに足る。

八

道灌の歌名、既に、九重の上に達す、其武名、亦、八州の間に轟く。

當時、扇ヶ谷の主は、上杉修理大夫定正にして、山内の主

は、上杉民部大輔顯定なり。

上杉氏、今こそ、兩家に分かるれ、元は、一根より出づ。其祖を、藤原内大臣高藤とす、高藤十三代の裔左衛門督重房、丹波國上杉の莊を食む、因りて、以て氏となす。

重房の子修理亮頼重に、二子あり、長を重顯と曰ふ、家を繼がず、其子孫、鎌倉扇ヶ谷に居るを以て、扇ヶ谷上杉と稱す。

重顯の弟憲房、武略あり、家を繼ぎて、兵庫頭と稱す、其子孫、鎌倉山内に居るを以て、山内上杉と呼ぶ。

山内は、弟なりと雖も、宗家たり、扇ヶ谷は、兄なりと雖も、却て、支族たり。

特に、憲房の子安房守憲顯、足利將軍尊氏を輔けて、功あり、伊豆、上野、越後の三國を領す、尋で、鎌倉の管領足利左馬頭基氏の執權となるに及んで、其勢力、益々強大を加ふ。

されば、山内と、扇ヶ谷とは、固々同族なりと雖も、二者の勢力、非常の懸隔あり、扇ヶ谷の封土は、僅に、山内の執事長尾氏に匹敵するに過ぎず。

今や、外には、強敵のあるなり、内には、姻戚の關係あるあり、兩家、互に、相頼り、相援けて、唇齒輔車の狀をなせりと雖も、其勢望、固より、優劣あるを免れず。

幸に、扇ヶ谷には、諸葛武侯の再來と稱せらる、文武兼備の道灌あり、常に、其餘りある智謀を以て、其足らざる勢力を補ふ、扇ヶ谷の、能く山内と雁行するを得たるは、實に、是が爲めのみ。

道灌、先見の明あり、常に、

『山内家は、國大にして、兵多く、其勢力、自から強大なりと雖も、唯一の長尾昌賢ありて、重きを爲せるに過ぎず、其餘の輩に至りては、權を貪りて、義を忘れ、利に迷うて、節を變ずるを意とせず、若し、昌賢にして、歿すれば、政法亂れ、兵鋒衰へ、郡國大小の士人は、皆彼れに背いて、我れを慕ふに至らん』

と思惟して、専ら仁を施し、義を守り、士を愛し、民を撫す、上下、皆、悅服せざるはなし。

寛正四年八月、昌賢の病んで死するや、果然、山内家に、一大波瀾を捲き起すに至れり。

昌賢の子を、景春と曰ひ、四郎左衛門と稱す、兇暴にして、義を知らず、昌賢の死するや、已、代つて、執事たらんとす。

其叔父尾張守景茂の執事となるに及んで、景春の失望、大方ならず、

『父、死すれば、子、此れに代るもの、世の常なり、況してや、我が父の、當家に對する功勞、少からざるをや、如何なれば、父の家に、恩を垂るゝこと、薄くして、父の弟に、私を施さるゝことの厚きや、我れ、人に辛ければ、人も、我れに辛しと謂はずや、好し、此上は、我れに決意あり』

失望は、變じて、怨望となり、怨望は、凝つて、逆謀となり、終に、其主顯定を弑いせんと欲す、

『此上は、備中入道に謀りて、其力を假らん』
密に、其意を、道灌に告ぐ。

九

大義、親を滅するは、古の道なり、私親、義を忘るゝもの、何ぞ、今の道ならんや、景春の言を聽いて、屹と、容を改

めたる道灌、

「此事、我等に於ては、然るべしとも存せず、抑、君、君たらずと雖も、臣、臣たらざるべからず、君恩、厚かからず

太田道灌の肖像



と雖も、争かて、薄しと申すべきや、今こそ、尾張守を以て、執事に充て給へ、頓ては、御身に返し給

はんは定ぞ、能くく、忠勤を抽んでられ候へ、構へて、君をばし、怨み給ふな」
辭を盡し、理を盡して、勸諭すれども、狼戾の景春、敢て、聞き入るべき色もあらず。

山内の大事は、扇ヶ谷の大事なり、飽までも、其無事を計らんとする道灌、密に、顯定に謁して、景春怨望の状を告げ、
「景春は、凡庸にして、其職に堪へずと雖も、其父の遺功を思させ給ひて、武藏の守護代となし給ひ、且、景茂に諭して、和睦せしめ、暫く、邊鄙に避けしめ給ふこと、是れ、御分内、無事平和の術にこそ候べけれ、彼れの部下には、粗暴のもの、候、さなきに於ては、一定、逆意を企て候べし、能くく、御思慮あらせ給へ」
其れとなく、勸告すれども、顯定、依違して決せず、道灌、
「然らば、速かに、兵を遣はして、景春を誅し給へ、然らずんば、必ず、逆謀を企て候べし」
苦勸、再三に及べども、顯定、又躊躇して、決せず。
此事、何時しか漏れて、景春の耳に入れば、

「我れ、景茂には、家職を奪はれ、道灌には、秘密を漏らさる、頓て、一族、悉く、誅滅せらるべきは、一定ぞ、先んずれば、人を制し、後るれば、人に制せられん、若かず、進んで、事を擧げんには」

臣下を召して、密事を語れば、三戸駿河守、多田備中守、上田兵庫助等、愕然として、色を變ず、

「扱ては、天魔の魅入りしとこそ、覺え候へ、古より、逆を謀り、君に叛くものは、天理に戻り、人意に背き候、争かて、大望の成就すること候べきや、早く、無實の罪を訴へて、御身の無事を計り給へ」

主を思ひ、家を思うて、諫止すること再三、景春、
「人生、朝にして、夕を期せず、陳謝、日を重ぬる内、我れ、若し、不意に死すれば、争かて、我が妄執を露らさるべきや、生あるものは、死すること、世の常のみ、何ぞ、一死を恐るべきや」

終に、斷乎として、事を擧げんと欲す、されども、道灌を恐れて、未だ敢て發せず。

文明五年、駿河に、内亂あり、國司今川氏、之れを制する

こと能はず、扇ヶ谷は、今川氏と姻あり、道灌をして、往いて、之れを鎮せしむ。

此年六月、道灌、兵を率ゐ、足柄を越えて、駿河に入る、

「素破や、時機こそ、來つれ」

景春、急に、武州鉢形城に據りて、叛旗を翻へす。

十

鑿子、何程の事やある。

顯定、敢て、意に介せず、其子憲房と與に、兵を率ゐて、往いて、之れを討ず、定正も、亦、資清と與に、來り會し、武州五十子に陣す。

景春、其備なきを窺ひ、夜に乗じて、急に、之れを襲ふ、顯定、定正等、大に敗れて、走り退く。

景春、之れを逐ふ。
資清、殿戦しつゝ、退き、利根川を渡りて、上州那波莊に入る。

景春の形勢、大に振ひ、所在、並び起つて、之れに應ず。
豊島勘解由左衛門泰理、其弟平左衛門泰明の二人は、石神、練馬の二城を築きて、江戸、川越兩地の通路を斷ち、上州

溝呂木、相州小澤、小磯の諸城、亦、皆、叛旗を翻へす。顯定、那波に在りて、出づること能はず、深く、道灌の言を用ひざるを悔ゆ。

景春の叛逆は、豫定の事實なり。道灌之を聞けども驚かず、駿河の事終へて、歸り來るや、自ら進んで討伐の任に當る。道灌の胸中、既に成算あり、先づ其枝葉を斷ちて、然る後に根幹を倒さんと欲す。

是に於てか千代田若狭守を留めて、江戸城を守らしめ、自ら兵を率ゐて發す、自づ溝呂木の砦を攻めて、之を抜き、轉じて、小磯の砦を攻む、守將越後五郎四郎、力敵せず、終に出で降る。

道灌、更に金子掃部助を小澤の城に攻む、城嶮にして抜けず。

敵兵、此處に乗じて、其後を衝かんとす。

敵將矢野兵庫助は、川越の城を攻めんとし、來つて、勝尾に陣す。

川越の守將太田圖書助資常は、道灌の弟なり、上田上野介朝廣と與に出で戰うて、之れを破る、兵庫助傷つきて、遁

れ去る。

豊島泰經の族重員は、江戸の城に迫る。

道灌、之れを聞き、一隊の兵を留めて小澤に備へ、自ら兵を回して、淺茅ヶ原に戦ひ、大に撃つて、之れを破り、終に、重員を斃す。

四月十三日、道灌、進んで、豊島左衛門泰明を、武州平塚に攻め、火を城外に放つて還る。

泰明の兄勸解由左衛門泰經、石神、練馬の城兵を、率ゐ來つて、泰明を援く。

道灌、乃ち北豊島郡江古田原、沼袋に迎へ戦うて、大に、之れを破る、泰明以下、死する者、百五十人。

十四日、兵を進めて、石神の城を攻む、泰經敵せざるを知りて、降を乞ふ、道灌、

『左らば、城砦を破却せよ』

と命ず、泰經、依違して、應ぜず、

『扱てこそ、偽りなれ』

十八日、急に撃つて、之れを抜く、泰經、丸子に走る。

此日、道灌の兵、亦、小澤の城を攻めて、之れを抜く。

道灌、既に、四近の群敵を掃ひ、兵威益々振ふ。

枝葉は、既に斷てり、其根幹を倒すべきの時機、今や愈々來る。

是に於てか、道灌、旗を進めて、景春を討たんと欲す。

十一

是時に當り、顯定父子、及び定正主従、尙、那波莊に在り、先づ、之を救ひ出すの要あり。

道灌の小澤城を抜くや、直に那波莊に入りて、顯定、定正等を迎へ、又利根川を渡りて、五十子の陣地を復す。

會稽の恥を雪ぐは、今日に在り、道灌、乃ち軍を進めて、景春を鉢形の城に攻めんとす、斯くと聞ける景春、

『坐して敵を待つは、恥辱ぞ、若かず、我れより、進んで、敵を撃たんには』

自ら大兵を率ゐて、城を出で、進んで、梅澤に到る。

彼れも進み、此れも進み、兩軍ハタと、用土ヶ原に於て、相遇ふ。

敵の先鋒は、三戸駿河守、上田兵庫助なり、我れの先鋒は、板倉美濃守なり、金鼓、忽ち響きて、戰端早、既に開く。

駿河守、兵庫助の二人、馬を陣頭に進めて、

『進めや者共、アレ蹴散らせや』

暗啞叱咤、猛然として、殺到すれば、美濃守の兵、見る見る、崩れ走りて、道灌の陣に、なだれ懸かんとす、

『素破や、軍は勝つたるぞ、道灌を討取るは、今日に在り、進めや進め』

景春、毫を打ち揮り打ち揮り、奮然として、指揮すれば、全軍、一時に、ドウと進む、勢ひ怒濤の寄するかと思はるるばかり。

折りしも、一隊の伏兵、忽然として起り、景春の側面を、目蒐けて、無二無三に、突き進む、是れぞ、寶田源八郎の精兵。

ソレと見たる美濃守、忽ち取つて返して、驀地に返り撃つ。

『扱ては、敵の計略なりしぞ』

景春の全軍、皆、愕然として、色を失ふ。

時機は、今ぞ。

道灌、鼓噪して、前より、横より、猛然として、進撃すれば、景春、陣を整ふる暇もなく、總崩れに崩れて、潰へ走

る。

道灌、兵を従つて、北ぐるを逐ふこと、益々急なり。景春、策の出づる所を知らず、勢ひ窮まりて、自殺せんとす、從兵之れを扶けて、辛くも、鉢形の城に、遁れ入る。景春の初め出づる時、兵二萬と號す、其歸る時は、纒に、十の二三に過ぎず、是れより、景春の兵力、頓に衰ふ。道灌なかりせば、景春は敗れず、道灌なかりせば、顯定等は還るを得ず、其威望隆々として、山東に振ふ。

會、道灌故ありて、鎌倉に歸る。兩上杉氏兵を合して、鉢形の城に迫らんとし、進んで兒玉富田、四方田、甘粕原の各地に陣す、聲勢太だ張る。

景春兵少く、力微にして、支ふべからず、急使を、古河に發して、援けを乞ふ。

成氏之れを許し、七月初旬、自ら數千騎を率ゐて、上州瀧に屯し、遙かに、景春に聲援す。

顯定父子、上州の空虚を擣かれんことを恐れ、退きて白井の城に入る。

既にして、景春の弟長尾六郎爲景、亦、兵を率ゐて、越後

より來り、上州荒卷に屯して、景春を援く。景春の形勢、復た漸く振ふ。

十二

當時、上杉氏は、足利氏に抗し、長尾氏は、上杉氏に抗し、足利氏は、又長尾氏を援く、主も主にあらず、従も従にあらず、宛がら、三巴となつて、相争ふ。

會々文明十年正月元日、成氏、使ひを白井に遣はして、和を求む。

此事、利か、不利か、兩上杉氏躊躇して、決せず、道灌を、鎌倉より召して、其意見を問ふ、道灌、

『此儀、最も然るべし、唯々速かに和議を調へ給ふべし』と答ふ、其意、氏成と和して、景春を、壓せんとするに在り。

兩上杉氏、乃ち成氏の提議を容れて、和議を調ふ。

景春、今や、孤立無援の身となる、是に於てか、別に自衛の策を立てざるべからず。

豊島勘解由左衛門泰經、嚮きに、石神を脱して、丸子に在り、丸子城主大倉彌三郎、小机城主小机彈正左衛門昌安と

謀りて、景春に應じ、川越、及び江戸より、鎌倉に通ずる連絡を斷たんとす。

景春、亦、兵を率ゐ、武州二の宮に出で、之れを援く。

道灌時に、其主定正と共に、川越城に在り、

『左らば、先づ小机を攻めん』

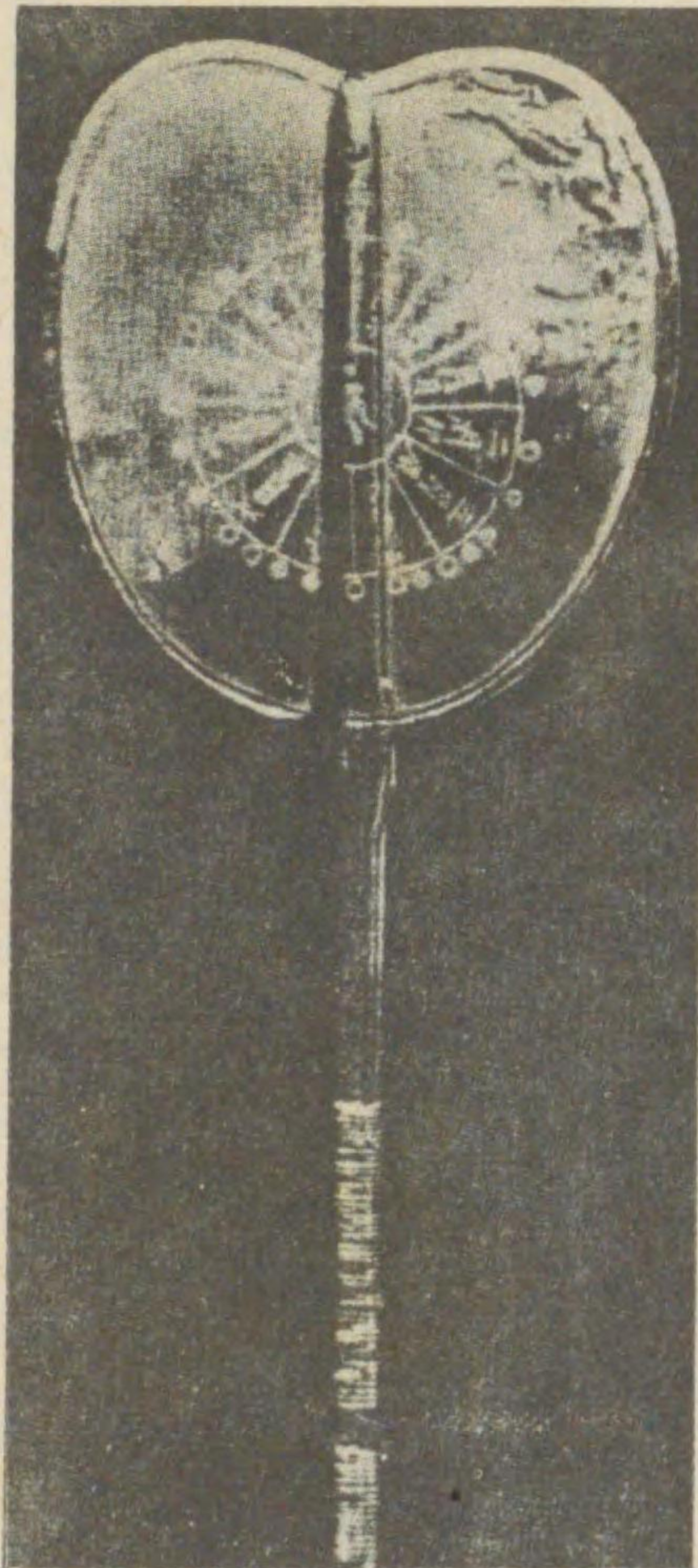
三月十日、自ら兵を率ゐて、小机に向ふ、定正も、亦、續いて發す、景春早くも、之れを聞き、

『然らば、定正の來らざるに先だちて、道灌の兵を、撃破せん』

夜半、陣を抜きて、急に、其跡を逐ふ。

太田道灌陣中軍配

茨城縣、總社神社藏



道灌兵を分つて、二の宮の敵に備へんとす。

會、後方に敵あるを知り、咄嗟に、陣容を整へて、待ち構ふ。

既にして、敵兵早、近づき來る、道灌何かは遲疑せん、士卒を鼓舞して、猛然として、迎へ撃つ。

敵兵、強大なれども、展開意の如くならず、兵鋒早、亂れて、意氣、亦、沮む。

既にして、定正の兵、亦、進み來り、側面より、迫り撃つ。斯くと見たる道灌、英氣、更に振ふこと數層、

小机は先づ手習のはじめにて

いろはにほへと散々になる

と口吟しつ、士卒を叱咤して奮ひ戦ふ、一以て百に當る。

景春今は支ふべからず、全軍見る見る、潰へ亂れ、終に走りて、千葉に退く。

千葉新介孝胤、景春を援け、兵を合して、武州羽生に陣す。

『左らば、彼れを、追ひ掃はん』

道灌、其弟圖書助資常をして、之れを撃たしむ、定正も、亦、兵を率ゐて、此れに續く。景春、孝胤、今は、一戦の勇氣もなく、倉皇兵を引いて、下總に退き去る。

大石駿河守二の宮の城を守る、其支ふべからざるを知りて、終に出て降る。

道灌の兵威、益々遠近に振ふ。

相州磯邊の城も潰へ、小澤の城も、亦潰へて、其殘黨、奥三保の城に、據る。

今は、此敵を攘はざるべからず。

十三

道灌進んで武州村山に陣す、其の弟資常兵を率ゐて、先づ奥三保に向ふ。

敵將本間近江守、海老名左衛門等、不意に逆襲し來る、資常衆に先んじて挺進し、撃つて、左衛門等を倒す。

道灌、亦、村山より、來り援け、敵を逐うて、甲州に入り、火を鶴川原に放ちて、還る。

今や、群敵皆、敗る、是に於てか、兵を出して、鉢形と、

成田との中間に陣す。

成氏、時に來つて、成田に在り、使を、道灌の陣に、遣はして告ぐ、

『我等、既に、和議を調ふ、何等別異なしと雖も、景春の爲めに、屢々、兵を勞するは、本意にあらず、願はくば景春を掃蕩し、我等をして古河に歸るを得せしめよ』其言ふところ他意にあらず、道灌、

『左らば、景春を討たん』

直に兵を進めて、景春を撃つ、景春、拒戦すれども、及ばず、終に、敗れて走る。

成氏其間に、利根川を濟りて、古河に歸る。

顯定、乃ち兵を率ゐて、鉢形の城に入る。

是に於てか、相武二州は、道灌の威武に伏し、扇ヶ谷上杉氏の兵力、日々に振ふ。

成氏今や、上杉氏と和す。

千葉の城主千葉介孝胤、獨り、之を不可とし、景春に與みして、兩上杉氏に抗す。

『然らば、先づ、千葉を撃たん』

兩上杉氏、乃ち成氏と謀りて、孝胤を討伐するに決す。

是に於て、道灌、兵を率ゐて進み、市川の渡しを越えて、國府の臺に陣す、總勢、凡そ一萬餘騎。

孝胤坐して、敵を受くるを、不利とし十二月十日、自ら兵を率ゐて、境根原に陣す。

道灌、乃ち兵を進めて、之れを撃ち、相戦ふこと終日。

孝胤、遂に、大に敗れて、臼井の城に奔る、原次郎以下、此れに死するもの多し。

道灌、更に進んで、臼井を攻めんとす、會々定石より、召還の命あり、道灌、乃ち軍事を、其弟資常、及び千葉七郎自胤に託して、兵を班す。

是の時に當り、道灌の武名、隆々として、日一日より高し。前に、勢力強大なりし山内氏は、景春の背反に依りて、俄に薄弱となり、先に、勢力薄弱なりし扇ヶ谷氏は、道灌の威武に依りて、頓に、強大となり、二者の勢威、一朝にして、其地を易へんとす。

此形勢を見て、意頗る平かならざるものは、顯定なり、

『我れは、宗家なり、争かて、定正の下に立たんや、況

や、道灌の指揮を受くるをや』

早くも、扇ヶ谷に對して、敵意を挾む。

是に於てか、兩上杉氏聯結の力、漸く弛び來る。

十四

十一年正月十一日、資常、自胤と與に進んで、臼井の城を攻む、城險にして、兵衆く、月を越ゆれども、抜くこと能はず。

自胤、乃ち兵を分ちて、上總の廳南城を攻む、守將武田參河入道信長支ふること能はず、七月五日、終に、出で降る。眞里谷の城主武田上總入道信高は、信長の子なり、亦自ら降を乞ひ、下總飯沼の城主海上備中守師胤も、亦、自胤に降る。

今や、兩總の諸城、皆、殆ど、風を望んで降る。

自胤、又兵を回して、再び臼井城を攻む。

自胤、軍旅の間に在ること半歳餘、今や意倦み、身疲れて、士卒皆、歸るを思ふ。

資常、乃ち自胤と謀りて、假りに、兵を回さんとし、七月十五日を以て、陣を撤す。

城將白井備前守俊胤、城中より、望み見て、之れを知り、急に城門を開きて、出て戦ふ。

資常、夙に、豪勇の名あり、咄嗟に、陣を變じて、反し戦ひ、忽ち撃ちて、之れを破り、逃ぐるを逐うて、城中に、突き入る。

城兵、死守して、屈せず、資常、奮闘すること數刻、會、流矢に中りて死す、佐藤五郎兵衛、桂縫殿助以下、戦死するもの、五十三人。

自胤、亦、後門より突入し、俊胤を、驅逐して、白井の城を略す。

兩總、今や、全く定まる、自胤、乃ち戌兵を置きて、其居城武州石濱城に、旋り來る。

道灌の威武、是れより、益々振ふ。

文明十二年六月、道灌、主命を帯びて、京師に上る、途、駿河を過ぐ雲影低迷して、岳影を見ず、道灌、乃ち、

心あてにそれかとぞ見る白雲の

八重かさなれる富士の芝山

との一首を詠ず、往いて、逢坂に山到れば、此處も、雲霧

深く籠めて、山容を辨せず、道灌、又

旅人にあふ坂は霧こめて

行くも歸るも分かれぬころ哉

との一首を賦す。

既にして、京師に入り、將軍義尙に謁して、成氏の和を乞ふの意を述べ、尋で、王命を拜す。

使命、既に終る、管領畠山持國の邸に抵りて、歸るを告ぐ、持國、言を今川氏兼に託す。

道灌、歸途、駿府に到り、鵜殿盛重をして、旨を氏兼に傳へしむ。

氏兼、命じて、其寓を、國分尼寺菩提樹院に設け、遠山宗植、一色貞俊をして、之れを饗せしむ、道灌、總社に詣で、又、

ねぎ事やしづ機山の子規 はせとよす

旅ゆく我をゆふかけてとへ

との一首を詠ず、風懷悠々として、亦、其身の武人たる、を忘るゝに似たり。

頓て、江戸に歸れば、又軍旅の爲めに忙はし。

十五

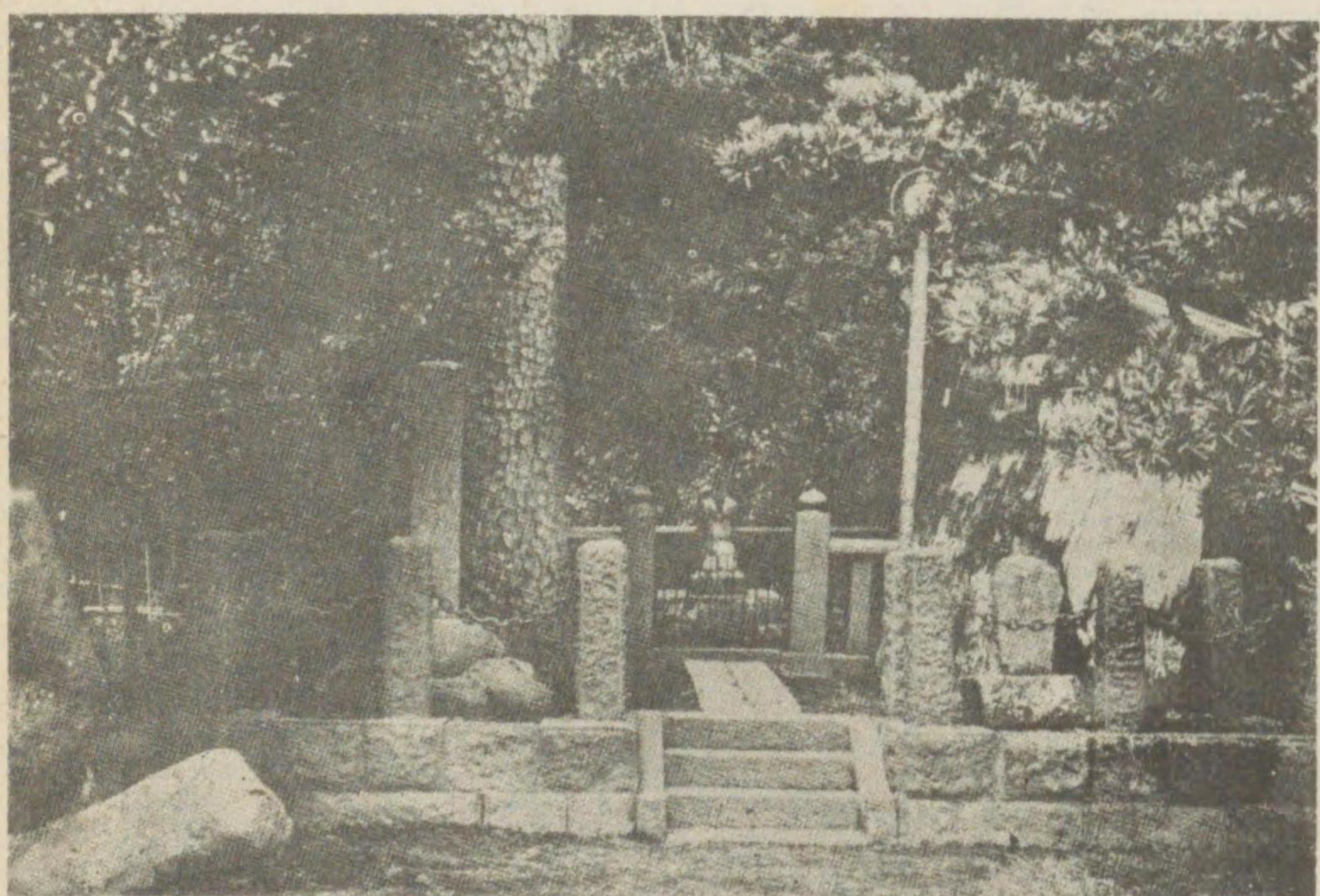
今や、關東の形勢、稍々小康を保てりと雖も、爾も、是れ、唯、表面の事のみ、其裏面には、密に、爪を磨ぎ、牙を研きて、我が虚を窺ふものあり、之れを誰とかする、山内氏の主上杉顯定、即ち是れなり。

山内は、國大にして、勢強かりしも、今や、其威望、却つて扇ヶ谷の下に立つに至れるものは、何ぞや、我れには、景春の背反するありて、彼れには、道灌の輔翼するあること、正しく、其因由ならざるべからず。

然らば、即ち、景春を、我れに招きて、道灌を、彼れより、除かば、我れの勢力、復た忽ち彼れの上に出でんこと、疑ふべからず、

『ソレよ、今日の計は、景春を招き、道灌を討るに在り、我れの強敵は、景春にあらず、定正にあらずして、唯、一の道灌に在り、道灌に除かば、定正の如きは、論ずるに足らず』

とは、陰險なる顯定の、深く心に計れるところ、乃ち人を以て、密に景春を招く。



景春、時に、道灌の爲めに、壓せられて、勢衰へ、意沮む、
太田道灌の墓 はせとよす
太田道灌の墓は相模國中郡伊勢原町の北西上粕屋の洞昌院に在り

「渡りに舟とは、此れぞ」
と喜べる
景春、一も二もなく、此れに應ず。
兩上杉氏の關係、是れより、漸く疎隔し來る。
文明十五年十月、
廳南城主

武田參河入道信長、復た上杉氏に叛く、定正、自ら兵を率ゐて、之れを討ぜんとし、夜に乗じて、且ある海崖を過ぐ。敵兵、石弩を崖下に設けて、之れに備ふ。

定正、俄に、兵を駐め、人をして、海潮の満干を視せしむ、夜、黒うして、知ること能はず。

道灌、亦、從うて、軍中に在り、

『左らば、我れ行きて見ん』

自から馳せ赴きて、其形勢を窺ふこと少時、頓て、歸り來りて、

『潮は干たり、疾く、進ませ給へ』

と告ぐ、定正怪しみて、故問へば、道灌、

『千鳥の聲、遠く聞ゆるは、潮の干たる證據にこそ候へ』と答へて、自ら眞先に、兵を進む、是れぞ、

遠くなり近くなるみの濱千鳥

なく音に汐の満干をぞ知る

との古河より、思ひ付きしなり。

既にして軍を旋へす、途中、利根川に、差し懸かる、時しも、夜半にして、咫尺を辨せず、衆、

『何處か淺瀬なるべき』

皆、口々に、罵り騒ぐ、道灌、聞いて、

『波音あらしき所を渡せ』

と令して、難なく、川を渡る、此れも、亦、

そこひなき淵やは騒ぐ山川の

淺き瀬にこそ仇波は立て

との古歌より、思ひ付きて、淺瀬を知りしなり。

心を留めて見れば、天下の事物、何れか我が師にあらざるべき、唯獨り歌書のみかは。

十六

功高ければ、譏生じ、譽盛んなれば、嫉み起る。

道灌、櫛風沐雨の苦を冒し、東戦西伐の勞を事とすること數年、武相、先づ服し、兩總、尋で定まる、扇ヶ谷の武威、

今は山内よりも高く、道灌の聲望、却て、定正よりも隆し。

定正、凡庸にして、思慮淺く、量宇狹し、道灌の衆心を得るを見て、意、平かならず、

『扇ヶ谷の、武威を山東に振ふは、我れあるが爲めのみ、何とて、彼れの力なるべき』

心、窃に道灌を忌む、爾も、道灌、未だ之れを知らず。

道灌、顯定の景春を宥せるを見て、早くも、其異志あるを知る、

『兩雄、並びたらずとは、我れの、夙に、豫言せるところ、今にして、此れが備へをなさずんば、臍を噛むとも、及ぶべからず』

俄に、江戸、川越の二城を修めて、壕を浚へ、壘を固うし、糧を積み、兵を蓄ふ。

顯定、道灌の爲めに、機先を制せられて、心に、深く怖るる所あり、

『彼れを斃すにあらずんば、所詮、扇ヶ谷を制する事、

叶ふまじ』

道灌の兩城を修理するを、奇貨とし、定正の侍臣に、結びて、道灌を陥れんとす。

機舌、刀よりも利く、巧言、飴よりも甘し、一日、定正の侍臣、

『今や、四方の御敵、悉く、跡を絶ちて、八州の諸城、皆、兵を休ふの時に候はずや、然るに、道灌入道の、此

頃、急に江戸、川越の二城を、修理候こと、誠に、奇怪

至極にこそ候へ、必定、君に弓を引き奉らん下心に候べし、能く、思慮あらせ給へ』

言を巧にし、辭を飾りて、説き立つれば、定正、

『此事、若し實ならば、由々しき大事ぞ』

急に、密使を遣はして、其虚實を探らしむ、道灌、之れを知りて、浩嘆すること久し、

『我れ、忠義の心厚きも、君に猜疑の心深し、我れの意を勞し、思ひ焦がして、盡すところ、却て、禍を招き、冤を蒙るの基となるこそ、是非なけれ、今更、陳疏するとも、何の益かあらん』

今は、運命を、自然に任せて、復た陳謝せず。

『抑々、兩上杉は、其祖を同じうし、其統を齊うするものに候、其親、兄弟の如く、其誼、骨肉の如し、宜しく、心を協せ、力を戮せて、山東の鎮撫を計り候べし、然るに、道灌、景春の故を以て、兩家、相反目し、相軋轢することあらんには、管に、兩家の不利なるのみならず、

山東の不幸にこそ候へ、君は、道灌を除き給ふべし、我れは、景春を誅し候はん、兩家、永く唇齒の關係を有ち、同盟の好誼を保ちて、山東を鎮め候べし』

と説かしむ、固より、思慮なき定正、
『左らば、速に、道灌を誅すべし』
直に使ひを、遣はして、道灌を、糟屋の館に招く。

十七

道灌、時に、江戸に在り、乃ち從者三十餘人と與に、馳せて、糟屋の館に到る。

會、一人の武士あり、糟屋の館前を、往來すること兩三度、頓て、ソツと、門内を差覗く、門衛、怪しみて、誰何すれば、彼の武士、

『我れは、武州の千葉殿よりの使に候、太田入道殿、これにと承はり、御跡を追うて、参りたるにて候、これなる文箱、入道殿御内の人へ、届け給はらんや』

と述べ、時しも、出使したる定正の侍臣、此れを聞きて、要こそあれと領きつゝ、

『我れこそ、入道殿の右筆なれ、入道殿に届け参らせん』

と欺きて、文箱を受取り、其儘、定正の前に、持ち出で、訴ふ。

定正、怪しみて、披き見れば、これぞ、千葉自胤の書狀にして、中に、

『軍勢も、大方集まり候へば、御廻文の來るを待ちて、鎌倉へ、馳せ参り候はん、山内殿の大勢も、追々出立に候、序ながら、知らせ奉る』

とあり、淺智の定正、反間の策とは、夢にも知らず、怒氣、一時に發して、

『彼れの逆意、今は、疑ふべからず、復た何の糺明にか及ばん、疾く、成敗せよや』

と罵り立つ、道灌誅戮の事、今や、忽ちに決す。

左れども、道灌は、智勇の士、迂濶に、手を下すべからず、先づ道灌を召して、酒を強ひ、浴を勧め、其浴室より、出づる所を、曾我兵庫頭、突然、白刃を揮うて、躍り出で、一刀、サツと、突き貫く、道灌、一聲、

『ウーム、當家滅亡』

と叫んで、呼吸、忽ち絶ゆ、享年五十有五、遺骸は、秋山

洞昌院に葬り、謚して、大慈寺殿心圓道灌と曰ふ。

一人の存亡も一國の興敗に關す、道灌の死してより、佞臣、日に進みて、忠臣、月に屏けられ、上下、淫酒に耽りて、武備を怠り、家風、忽ち、變じて、柔弱となる、諸臣の前途を憂ふるもの、皆、去つて山澤に隠るに至る。

臣下、既に然り、況して、八州諸豪の意を扇ヶ谷に屬せしもの、今は、款を山内に通ずるもの、漸く多し。

是に於てか、彼我の形勢、倏忽として、轉倒し來る。

顯定、冷然として、此形勢を視つゝ、敢て、景春を殺さず、又音問をも、通ぜず。

定正、始めて、其欺く所となれるを知りて、大に悔恨すれども、及ばず、乃ち成氏と結びて、顯定を攻む。是れより、兩上杉氏、互に兵を交ゆること數年、怨恨、愈々結んで解けず、爾來、定正戰ふ毎に、利を得ると雖も、士卒、疲憊して、死傷、甚だ多し、之れに反して、顯定は、戰ふ毎に、敗を招くと雖も、國人、歸服して、軍旅、亦、多く、其機勢、少しも撓まず。

明應二年十月、定正、又顯定と戰つて、陣に死す、是れよ

り、扇ヶ谷の旗風、復た競はず。

實にや道灌は扇ヶ谷に於ける萬里の長城のみ、定正、之れを破りて、自ら亡滅を招く、其愚、亦、憐れむべきなり。

山吹里

太田道灌狩獵の地

武藏國入間郡越生町は、郡の西北部に位して、比企郡に近き處に在り、此町に、山吹の里と稱する地あり、太田道灌の狩獵に來りて、雨に會ひ、民家に立ち寄りて、簀を請ひたる時、一少女の棟棠花一枝を捧げて、簀なしとの意を寓したるは、此地なり、山吹の里の名、此に起ると言ひ傳ふ。

此地は、越生郷十六村の本村にして、應永の頃には、越生山城次郎入道宏秀あり、越生左衛門尉憲高あり、文安、寶徳の頃には、越生左衛門尉憲秀あり、越生左衛門尉實久あり、此地を領せしと云へば、彼の棟棠の花を捧げし少女も、何れ由ある人の女なるべし。

歌道を知るもの、必ずしも、學問を知らず、學問を知るもの、必ずしも、歌道を知らず。

太田持資入道道灌、幼少より、學を好み、文を修められたれども、別に、歌道をも學ばず、古歌をも諳んぜず。

其少壯の時、一日、弓矢を携へて、武藏國入間郡に到り、彼方此方と、獵り歩いて、越生郷の且ある邑に到る。

夏の日の定めがたなき、油雲、峰の一角に、起れるよと思へば、忽ち一陣の怪風と共に、驟雨、サツとばかりに、降り濺ぐ。

『生憎の雨や、家やある』

四邊を見廻せば、怪しげなる賤が家あり、ツカ〜と進み寄りたる道灌、

『人や候、無心ながら、雨具あらば、御貸し候へ』

一聲、二聲、呼はれば、中より、立ち出でしは、花恥かしき少女、一枝の山吹を、手折りて、面羞ゆげに捧ぐ。

事の心を知らぬ道灌、

『我れは、雨具をこそ、求むれ、斯かるものをば、乞はざるものを』

冷然として、一瞥したるばかり、最と不興氣に、其場を、立ち去る。

頓て、我館に、歸り來りて、此事を、語り出づれば、衆、皆、其意を覺らず、忽ちハタと、手を拍ちたる一人、

『扱て〜、興ある事かな、此れぞ、井手左大臣の御歌なる』

七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだになきそかなしき

と申す句意に依りて、簀一つなき意を寓せしものに候はん』

と語れば、道灌、聞いて、愕然たり、

『我れ、是程の事を知らず、百姓の娘に、劣れることの

口惜さよ』

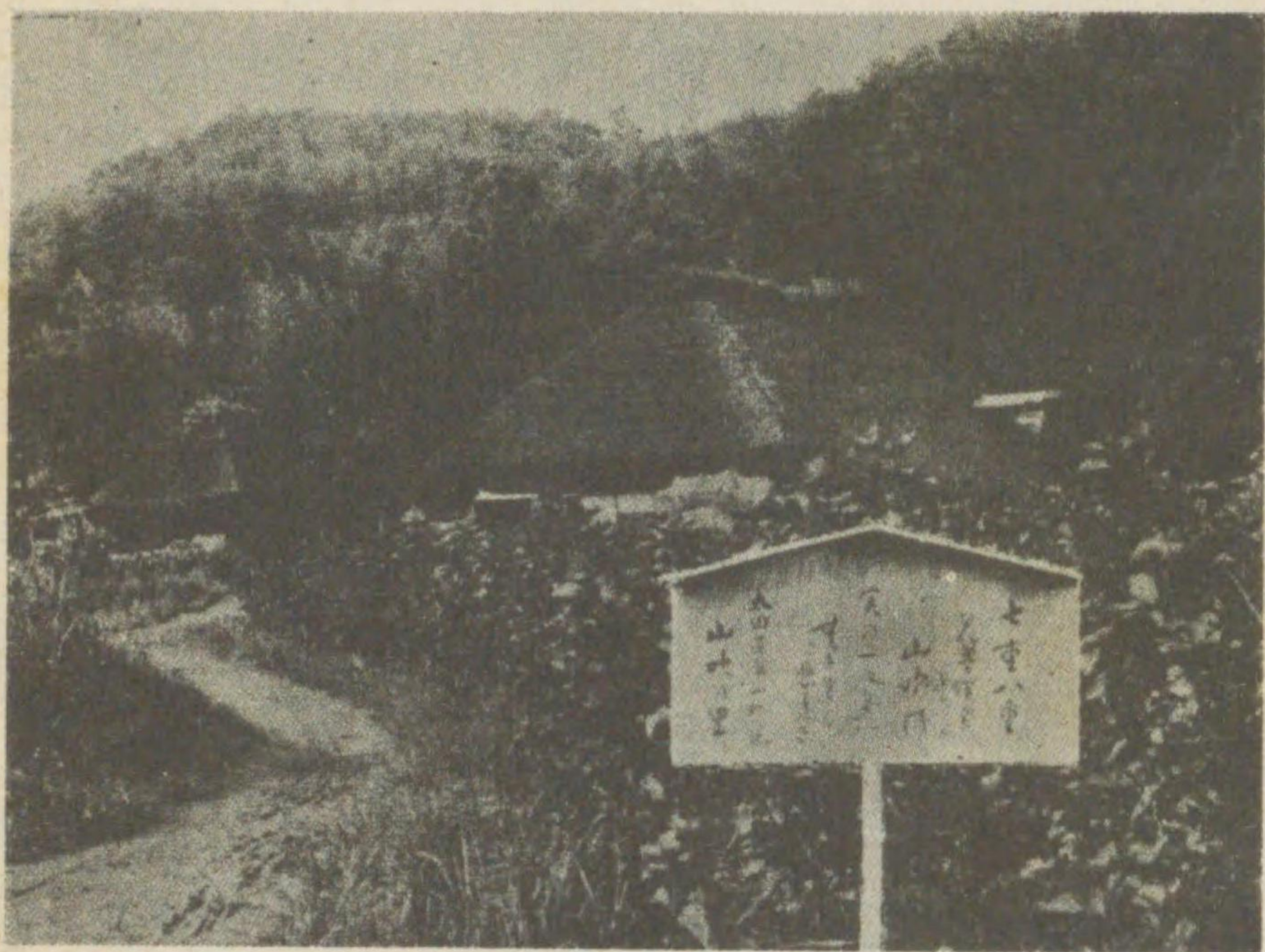
心に、深く恥づれば、是れより、發憤して、歌道に心を潛む。

道灌は、歌道を以て名ある源三位頼政十一世の孫なり、其血の流れて、我身にや傳はりけん、終に、祖先にも劣らぬ名譽の歌人となりて、其名、高く天關にまで聞えけるこそ、

光譽なりけれ。

山吹里

此七重八重の歌は、井手左大臣の作なりと語りしとあれ
山吹里は武藏國入間郡越生町に在り太田道灌の山吹の花を捧げられたる爲め終に發奮して歌道に志すに至れる遺蹟なり。



ど、實は、
中務卿兼明
親王の御歌
なり、後
拾遺集の
雑の部に、
小倉の家
に住み侍
りける頃、
雨の降り
ける日、
簀かる人
の侍りけ
れば、山
吹の枝を
折りて、

とらせて侍りけり、心も、えせてまかり過ぎて、又の日、山吹の心も、えざりしよし、いひおこせて侍りける返事に、いひ遣はしける。

七重八重花は咲けども山吹の

實の一つだになきそあやしき

とあるもの、是れなり、此歌だに知り居り居らば、簀なき意を示さん爲めに、山吹の枝を出だしたるものなることは、何人にも、推知せらるべきなり。

此處には、少女となり居れども、「老士語録」には、

「道灌、一日、遊獵の途次、葛西に於て、雨に遇ひ、民家に就て、雨具を求む、戸内に、老女の聲として、

山吹の歌を誦す、道灌、大に之れに感じ、歸りて後、村吏に命じて、厚く老女を扶助せしめたり」

と記せり、少女よりは、老女の方、事實なるべし。

道灌の遊獵せし處、老士語録には、葛西とあり、或は、武藏の金澤と云ふ説もあり、或は、牛込の邊にして、今の山吹町は、其遺稱なりと云ふ説もあり。

越生町は、川越町を距ること、五里の地に在り、道灌の

少壯にして、川越城に在りし時、此地に遊獵せるものならんか。

室町幕府址

應仁亂の震源地

室町幕府は、京都市上京區室町通今出川の北に在り、一に、花の御所とも曰ふ、今の築山町、柳原町、御所八幡町裏、築地町より、北射場町の間に亘る、東西、凡一町、南北、凡三町。

此地は、もと、崇光院の御所なりしに、永和三年、燒失せる儘、御造營なきを以て、足利義滿、請うて、第宅となし、菊亭公直の邸第をも併せて、幕府を造營し、永和四年三月、工事成りて、此處に移る、室町に在るを以て、室町殿と曰ひ、種々の花卉を植うるを以て、花の御所と曰ふ、應仁元年、細川勝元の足利義政を擁して、據れる所、應仁の亂は、此處を中心として起る。

足利義視の第は、今出川の北、室町の西に在り、今出川

殿と曰ふ、室町幕府を距ること、二町ばかり。

細川勝元の第は、室町の北に在り、東北に、矢倉ありて、上御靈社の方に向ふ。

山名宗全の第は、上立賣の南、堀河の西に在り、山名辻子と號す。

畠山政長の第は、萬里小路春日通に在り。

斯波義廉の第は、勘解由小路の南、烏丸の西に在り、二條武衛陣の在りし所なるを以て、家を武衛と曰ふ、二條城と云へるは、此處なり。今二條離宮とは別なり。

上御靈社は、東洞院、烏丸通の北、今出川の西に在り、鳥居、正門、拜殿、祠宇等、皆、西に向ふ、早良親王、伊豫親王、伊豫夫人等、八所の靈を祀る。

斯波、細川、畠山の三家は、室町幕府の管領として、將軍を輔佐し、内外の機務を總ぶ、世に、之れを稱して、三管領と曰ふ。

三管領家に、繼嗣問題の起れる時、將軍家にも、亦、繼嗣問題の起るあり、此二者、三者、四者、相搦みて、應仁の

亂は、起れり。

初め、細川右京大夫勝元、山名右衛門督持豊の女を娶る、子なきを以て、持豊の子是豊を養うて、嗣となす、既にして、一子を擧げ、之れを愛すること深く、終に、是豊を廢す、持豊、憚らず。

畠山左衛門尉持國、亦、子なく、姪政長を養うて、嗣となす、既にして、義就を生む、因りて、政長を廢して、義就を立つ、家宰遊佐河内守國助は、義就に就き、神保宗右衛門尉長誠は、政長に黨じて、相闘ぐ、是に於て、勝元は、政長を援け、持豊は、義就を助く。

斯波治部大輔義健、死して、嗣なし、一族修理大夫持種の子義敏を、迎へ立つ、家宰甲斐、朝倉、織田等、此れに服せず、幕府の執事伊勢守貞親に頼り、義敏を廢して、族人澁川左兵衛佐義紀の子義廉を立てんことを請ふ、義政、乃ち義敏を卻けて、義廉を立つ、後、義廉を排して、義敏を復さんとするに及び、持豊、其女婿たるの責を以て、義廉を助けて、其命を拒む。

是時に當り、將軍義政、亦、子なく、弟義視を立て、嗣

となすに及び、義尙を生む、夫人、之れを僧となすに忍び

ず、密に、書を寄せて、持豊に託す、時に、勝元は、義視の傅たり、持豊、乃ち義尙を戴きて、勝元を制せんと欲す。應仁の亂は、實に、此各種繼嗣問題の相錯綜し、相混亂して、生出したるものなることを知らざるべからず。

二

嘉吉元年六月、赤松左京大夫滿祐の將軍義教を弑するや、管領細川持之、諸將と謀りて、義教の長子義勝を立つ、時に、年九歳。

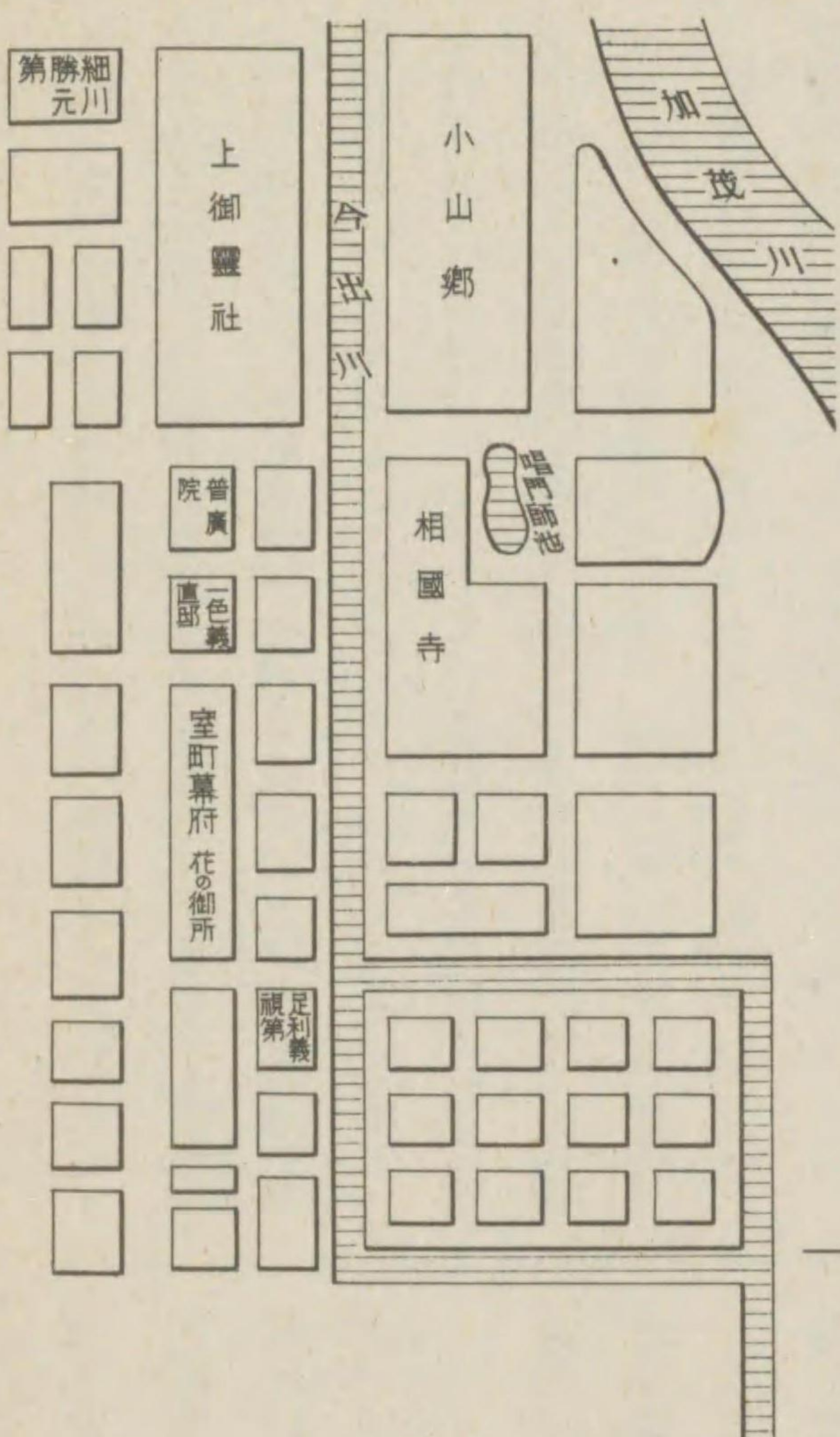
越えて三年七月、義勝、馬より落ちて、薨ず、管領畠山持國、乃ち義勝の弟義政を立て、將軍と爲す。

文安二年三月、持國、管領を罷めて、細川勝元、此れに代る。寶徳元年十月、勝元、管領を罷めて、持國、復た此れに代る。持國は、山城、河内、紀伊、越中の守護なり、子なきを以て、弟持富の子政長を養うて、嗣となす、既にして、義就を生む、寶徳二年六月、持國、幕府に請うて、政長を廢し、國を義就に傳ふ、畠山氏、是れより亂る。

高徳元年六月、尾張、遠江、越前の守護斯波治部大輔義健、

早世す、嗣なきを以て、大野修理大夫持種の子義敏を、迎へ立つ、老臣、服せず、斯波氏、亦、是れより亂る。是年十一月、持國、管領を罷めて、勝元、復た此れに代る。義政、驕奢に流れ、酒色に耽りて、政治を事とせず、女謁は、熾んに行はれ、賄賂は、連りに贈られ、寵姫、嬖臣の言ふところ、事、善惡となく、皆、行はれざるはなし。

政所の執事伊勢守貞親、最も寵幸せられ、其身は、父室町幕府及其附近地圖



と呼ばれ、妻は、母と呼ばれて、勢威、並ぶものなく、苟くも、其意に合ふものは、功なきも、賞せられ、其意に忤ふものは、罪なきも、罰せらる、京童、
「勘當に科なく、赦免に忠なし」
と稱して、其濫政を笑はざるはなく、皆、心に大亂の起らんことを憂ふ。

三

持國の家宰を、遊佐河内守助國と曰ひ、神保宗右衛門尉長誠と曰ふ、助國、最も眷遇せられて、家事に預り、義就の生るゝや、又其傅となる。

長誠、之れを嫉視し、政長を奉じて、主となさんことを計り、家中、自から二派に分る。

事、露はる、持國、大に怒り、將軍義政に請うて、政長を殺さんとす。

高德三年四月三日、政長、之れを聞き、逃れて、細川勝元の部下磯谷四郎の家に匿れ、政長の黨與、亦、奔りて、山名持豊の第に通る、勝元、持豊、俱に、之れを庇護すれば、持國、復た奈何ともす

べからず。

長誠、是れより、益々、政長を助けて、義就を排す。

既にして、八月に至れば、義就の部下、次第に離散して、或は、政長に屬し、或は、持豊の第に趨る。

持豊、乃ち議して、持國を攻めんと欲す、部下、爲めに、驕然たり。

義政、之れを聞きて、俄に、戒嚴を加へ、山名教之、細川勝久、武田國信に命じて、禁闕を護衛せしむ、是に於て、教之は、東門を守り、勝久は、北門を守り、國信は、西門を守る。

將士、亦、競うて、幕府に聚る、左れども、勝元、持豊の二人は、來らず。

此夜、持豊、野武士を遣はして、火を持國の第に、縱たしむ。

持國は、避けて、叔父道祐の家に入り、義就は、走りて、山名教之の門を敲けども、拒んで、納れず、乃ち去つて、遊佐國助の家に入る。

部下、悉く、離散し、都下、亦、穩かならず、國助、自ら

室町幕府址

其家を焚き、義就を伴うて、伊賀に奔る。

持國、亦、建仁寺の塔頭西來院に蟄居す。

是に於て、政長、家を繼ぐ、勝元、乃ち之れを携へて、義政に謁せしむ。

持國、西來院に在り、憤怒、未だ解けず、神保長誠、之れを聞き、政長に向ひて、

「老公にして、他に在はさば、枕を高うすべからず、若かず、此方に、迎へ取りて、優禮を加へ給はんには」

と説き勧め、畠山阿波入道持純を、西來院に遣はして、持國を迎へしむ。

持國、時に、病の牀に在り、一族西方某、諫止すれども、聽かず、終に、持純に扶けられて、出でんとすれば、西方、

かばねをば東の山に残せども

名は西方にありあけの月

との一首を口吟みて、父子主従七人、皆、其面前に於て、屠腹す、西來院は、東山の麓に在り。

左しもの騷擾も、一先、局を結ぶ。

然れども、義政の意、未だ釋けず、持豊の兵を集めて、都

下を噪がしたるの所業を憤り、是年十一月、兵を徵して、之れを討伐せんと欲す。

勝元は、持豊の女婿なり、乃ち岳父の爲めに、百方、嘆訴する所あり、持豊、亦、誓詞を上つりて、陳謝すること再三、終に、其子教豊を留めて、幕府に仕へしめ、其身は、退きて、但馬に居る。

勝元、亦、政長を庇護せし故を以て、磯谷四郎を誅して、罪を謝す。

義政、乃ち持豊の罪を赦し、且、命じて、戒嚴を解く。

四

嚮に、赤松滿祐の、將軍義教を弑して、播磨の木山城に據るや、持豊、其一族教清、教之と與に、撃つて、之れを滅す、是に於て、滿祐の封邑は、悉く、持豊、及び其一族に賜ふ、其勢威、是れより張る。

細川讚岐守政之、滿祐と親み善し、其祀の絶ゆるを憐れみ、持豊の在らざるを機として、滿祐の姪彦五郎則尙に、舊封を賜はんことを請ふ。

義政、乃ち則尙の罪を赦して、播磨の國を與へんことを許す。

せば、則尙、大に悦び、彦次郎祐之と與に、播磨に入りて、檀特山に據る、山は、斑鳩寺の東南に在り。

時に、持豊の子彈正少弼教豊、室山に在り、祐之、乃ち進んで、之れを攻む。

持豊、但馬に在り、之れを聞かば、忽ち勃然として怒る。

『播磨は、我れの武功を以て、得たる國ぞ、故なくして、賊臣の子に、奪はれなば、天下の笑を、奈何にかせん、疾く、逐ひ拂へや』

康正元年四月、其子彈正忠是豊に命じて、祐之、則尙を討たしむ。

是豊、乃ち兵二萬を率ゐて、但馬を發し、五月、播磨に入りて、檀特山を攻む。

則尙、克く拒ぐ。

是豊、乃ち此處を捨て、室山を援はんとし、進んで、坂本に達す。

祐之の兵、其猛威を聞いて、大に恐れ、皆、散り逃げ去る。

檀特山の兵、之れを聞いて、亦、皆、遁げ去れば、則尙、

今は、奈何ともすべからず、備前の甲島に奔りて、自殺す。播磨、復た持豊の手に歸す。

是月、持豊、但馬を發して、京師に入る、爾來、勇威、益々張り、横恣、益々甚だしと雖し、義政、復た之れを制すること能はず。

是れより先き、持豊、入道して、宗全と曰ふ、其顔、緒きを以て、世に、呼んで、赤入道と謂ふ、宗全、

『讚岐守こそは、赤松と舊好あれば、其家を立てんことを請ふも、是非なけれ、右京大夫は、何とて、之れを抑止せざる、彼れも、亦、我が領國を奪はんと欲するものぞ』

と悲む、讚岐守とは、成之の事にして、右京大夫とは、勝元の事を斥す、舅婿の間、是より、隙あり。

長祿二年八月、赤松滿祐の遺臣石見三郎左衛門雅助、其故舊と謀りて、大和國十津川の北山に赴き、伴りて、尊秀王に仕へ、間に乗じて、王を弑し、神璽を奉じて、京師に還り來り、之れを大内に納め奉つる。義政、其功を賞し、滿祐の姪孫次郎政則を召して、加賀の半國を賜ふ。

宗全、聞きて、大に怒り、一夜、刺客を遣はして、雅助の三條家より歸り奉る所を、暗殺せしむ。

五

宗全の横暴、益々甚だし。

足利義政の像



是れより先き、高徳元年九月、斯波左京衛佐義敏の家を繼ぐや、家宰

甲斐常治、織田敏定、朝倉敏景等、皆、此れに服せず、互に、相反目すること數年。

康正二年に至り、義敏の所領越前、遠江、尾張の守護代、各々其國に割據し、分れて、三部となる、即ち尾張は、織田に屬し、越前は、朝倉に屬し、遠江は、甲斐に屬す。

義敏の力、之れを制馭すること能はず、終に、武衛の第を去つて、東山の東光寺に入り、幕府に訴へて、驕傲の徒を制せんことを請へども、義政、依違して、決せず。

長祿三年二月、甲斐、織田、朝倉の三老、相議して、義敏を卻けんことを請へども、義政、慰諭して、聽さず、唯、義敏をして、致仕せしめ、其子松王丸を立て、兩者の和解を計らんと欲す。

義敏は、此れに服すれども、三老は、命を奉ぜず、政所の執事伊勢伊勢守貞親に頼りて、一族澁川左兵衛佐義紀の子義廉を、立てんことを請ふ。

時に、甲斐常治の妹、貞親の妾たり、貞親、乃ち義政に請ひて、義敏を黜け、更に、義廉を以て、家を繼がしむ。義敏、怨恨、措くこと能はず、乃ち去つて、越前に居る。

是年五月十三日、義敏、甲斐常治を、敦賀城に襲うて、克たす。

八月十一日、義敏、又常治と戦うて、敗れ、終に、周防に奔りて、大内介教弘に頼る。

六

畠山右衛門佐義就、伊賀に在り。

康正元年の夏、兵を大和に擧げて、郡村を抄掠し、轉じて、河内に入る。

政長、乃ち之れを討せんと欲し、是年七月二日、兵を率ゐて、河内に入り、義就を、八幡祠前に撃つて、之れを破り、小倉民部丞等を仆し、更に、遊佐河内守國助を、道明寺磧に撃つて、又之れを破る。

國助、奔りて、八幡祠に入り、參河守等と與に、固く、之れを守る。

十二月、義政、命じて、政長、義就の二人を、京師に召し、自ら諭して、和解せしむ、是に於て、畠山氏、分れて、兩派となる。

畠山入道道祐は、持國の叔父なり、義就を以て、總領職と

爲さんと欲するの心あり、長祿元年三月、義政、於び夫人富子、其邸に請じて、厚く、之れを養ひ、且、閑に乗じて、請ふ所あり、義政、亦、之れを領す。

政長、聞きて驚き、益々勝元に結びて、自ら保つ。

既にして、義就、屢々義政の法令に違ふ、義政、大に怒り、寛正元年九月、伊勢備中守貞藤、飯尾下總守爲數を、義就の第に遣はして、之れを逐ふ。

義就、乃ち河内の若江城に奔りて、遊佐河内守國助に頼る。政長、義政の命を奉じて、義就を討たんと欲し、是年九月、京師を發し、行く々、兵を募りて、大和の龍田に達す。警報、早くも、若江城に達す、義就、其兵の少なきを聞きて、

『左らば、我れより、逆寄せして、逐ひ拂へや』

十月十日、國助、及び譽田參河守、譽田遠江守等に命じ、兵一千五百餘騎を率ゐて、之れを逆襲せしむ。

政長、時に、龍田明神の祠前に在りて、人馬の集まるを待つ、會々河内より、

『遊佐河内守、大兵を以て、其れに押し寄せ候へし、御

用意あらせ候へ』

との報あり、士卒、聞いて、皆、これとはばかりに驚く。

政長、獨り自若たり、徐に、祠前に額づきて、神助を祈り、頓て、陣を整へて、敵の來るを待つ。

十一日、國助、進んで、高安に到り、兵を二手に分つて、進み攻む。

一隊は、越智備中守、其先鋒たり、法隆寺、吉田の間より、進んで、龍田の北面に迫る。

一隊は、立野大和守、先鋒たり、神南山の北より、進んで、龍田の南面に迫る。

其れと見たる政長、先づ、北方の敵を撃破して、備中守を殪し、更に、兵を返して、南方の敵に當り、大和守を御輿磧に撃つて、又之れを破る、殺傷算なく、大和守、亦、此れに死す。

國助等、此手に在り、敗兵と與に、走りて、神南山上に登り、敵の旗幟を、望みつゝ、

『今は、是れまでぞ、イザ死せん』

辭世の和歌を詠じて、屠腹すれば、譽田參河守、譽田遠江

守、譽田肥前守、龍泉彌左衛門、甲斐庄民部丞等百五十人、亦、自殺す。

義就、亦、後援せんと欲して、城を出で、進んで、山井の雁林堂に到り、味方の大敗を聞いて、爲すべき所を知らず、亦、刀を抜きて、自殺せんとす。

左右、百方、諫め止め、奔りて、金剛山麓の嶽山城に入る。政長、乃ち進んで、若江城を取り、更に、進んで、弘川に陣す、首を擧ぐれば、金剛山は、目睫の間に在り。

七

義就、嶽山城に在り、金胎寺、其他の諸砦を修して、敵に備ふ。

政長、兵を分ちて、嶽山、金胎寺の二城を攻む。

十一月、義就、金胎寺城を棄て、専ら嶽山城を守る、政長、亦、随つて、之れを攻むれども、城、固くして、抜くこと能はず。

兩軍、對峙すること數月、義就、復た金胎寺城を修して、之れを守る。

二年六月十日の夜、義就の部下須屋左京亮等、密に城を出

細川勝元の像



で、弘川の營を襲ひ、克たずして、此れに死す。義政、其戦況の進まざるを

聞き、細川讚岐守政之、細川兵部大輔勝久、細川淡路守成春、細川阿波守勝信、細川刑部少輔勝吉、山名彈正忠是豊、武田大膳大夫信賢、其弟治部少輔國信等に命じて、政長を助けしむ。

三年四月、諸軍、進んで、嶽山、金胎寺の二城を圍み攻め、日夜、交戦息まず。

義就、時に、金胎寺城に在り、士卒を勵まして、防ぎ戦ひ、大に撃つて、成之の先隊を破れば、諸部、之れを見て、皆、駭き走る。

義就、勢に乗じて、追撃すること、頗る急なり、殺傷、甚だ多し。

是豊、備後の兵を率ゐて、進んで、義就に當り、寄せては返し、返しては寄せ、七たび勝ちて、七たび敗る、雌雄、尙、未だ決せず、是豊、忽ち憤然として

『我れは、右金吾宗全の子なり、此城を抜かずんば、死すとも、去らず』

と呼はり、殊死して、奮戦すれば、城兵、皆、怖れて、披靡す、義就、切齒しつゝ、

『死せんと思ふものは、此れに續けや』
と呼はるや否や、自ら大刀を振り被つて、躍り出で、縦横無盡に、奮ひ闘ふ、見るもの、

『扱ても、勇士や』

皆、聲を放つて、感嘆せざるはなし、既にして、日、全く晡るれば、兩軍、相引きに、引き退く。

五月十二日、政長、成土等、復た諸軍と與に、金胎寺城を攻めて、之れを援く。

義就、乃ち退いて、嶽山城を保つ。

諸軍、亦、進んで、之れを攻め、政長、兵を國見嶺に配して、南口の通路を斷つ。

之れを久うして、城中、食、終に盡く、義就、今は、奈何ともすべからず、四年四月十四日、城を棄て、紀伊の熊野に奔り、轉じて、高野山に遁る。

既にして、義就、又山を下りて、岡之城に據る。

政長、之れを聞き、兵を率ゐて、進み撃つ、攻戦すること十數回、義就、兵、寡にして、敵すること能はず、勢、既に危ふし、湯淺二郎、義就の用を乞ひ、

『我れこそ、畠山右衛門佐なれ、首を取つて、高名せよ』
と呼はりつゝ、奮闘して斃れ、中村左近將監以下三十餘人、此れに死す。

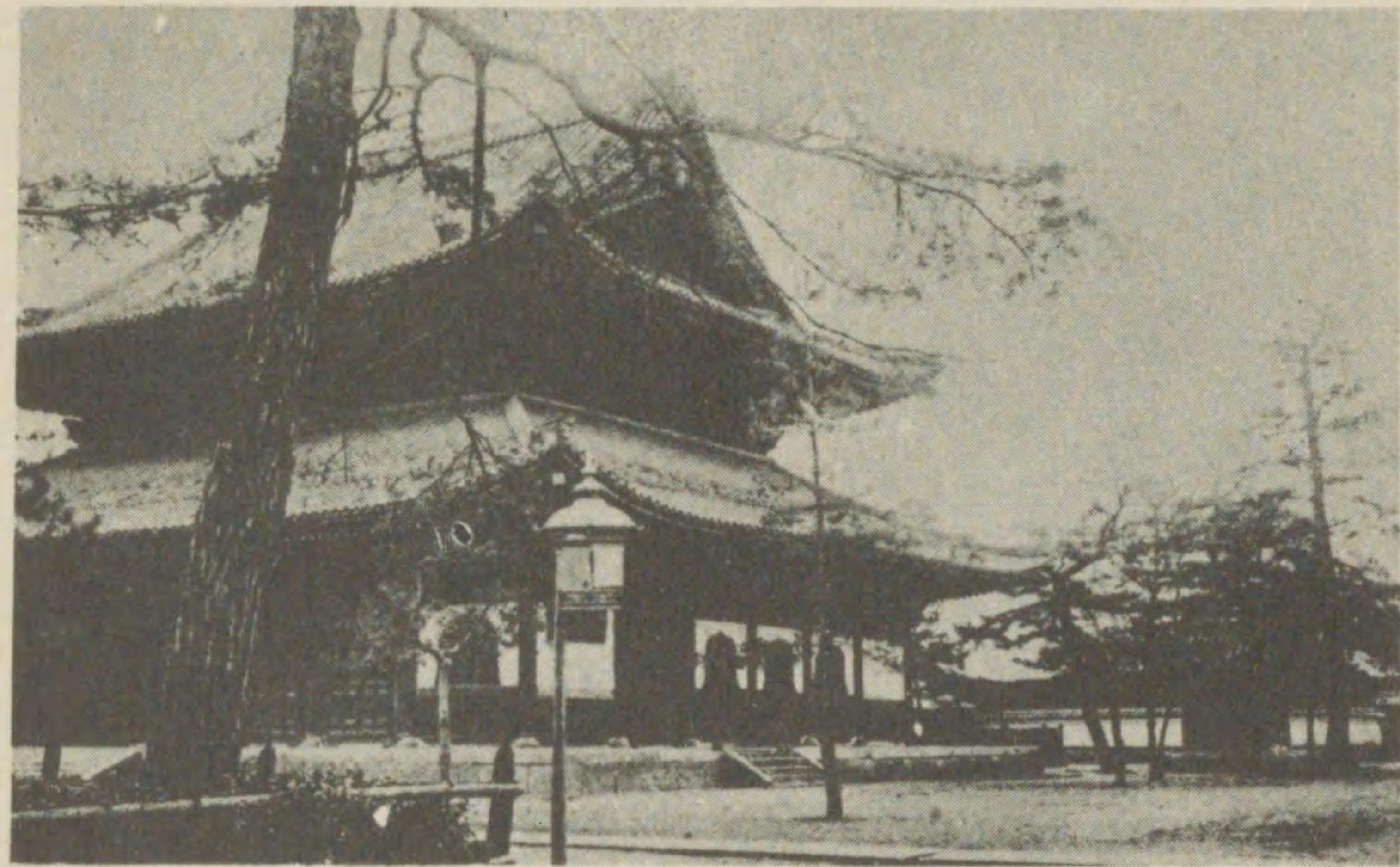
義就、其間に遁れて、吉野の奥の北山に匿る。時に、八月六日、

政長、命じて、義就を搜索せしめ、十一月、兵を班へして、

京師に旋る。

建仁寺

建仁寺は京都市東山区大和路四條下る處に在り臨濟宗建仁寺派の大本山なり應仁の亂の當時畠山持國此寺中の西來院に蟄居す



山名是豊、還りて、父宗全に向ひ、義就勇戦の狀を語れば、宗金、

『あはれ勇士や、今の世、争かて、是程の弓矢取あるべき、入道と、此人と、手を握らば、洛中、復た恐るべきものあらんとも覺えず』

と思ひ、早くも、此れと結ばんとするの心あり。

義就、亦、

『今度の寄手の中、山名勢ほど勇壯なるはなし、此人の援助を得ば、天下、復た何物か畏るゝに足るべき』

と思惟す、我れに水心あらば、彼れに魚心あり、他日の提携は、實に、此時に兆す。

八

是時に當り、義政、軍職に在ること、既に二十年、齡、尙、壯なりと雖も、心、頗る政務に倦み來る、是に於てか、身を閑地に置いて意は冥樂を縱まゝになさんと欲するの心あり。

夫人富子、時に、未だ子あらず。

義政の弟に、淨土宗に入りて、僧となれるものあり、名を義尋と稱す。

寛正五年十二月、義政、使を遣はして、義尋を召し、親しく、

『汝、速かに、還俗せよ、天下を譲らんずるに』

と諭せば、義尋、事の意外に驚きて、頓に、言葉も出でず、

稍々ありて、

『争かて、然ることの候はん』

と答へて、敢て従はず、義政、懲憚すること、尙も、再三に及べども、義尋、尙、固辭して、肯んぜず、義政、

『若し、今日以後、我れに、男子出生候とも、襦袢の中より、法師となし候はん、決して、世子を變更することあるべからず』

と告げて、一紙の誓書を授くれれば、義尋、感激措かず、

『是程に、仰せられ候からは、争かて、違背仕り候べき』と答へて、始めて、其意に従ふ、驅て、僧衣を脱して、俗體に歸し、出で、外戚三條家の今出川の第に居る。

義政、乃ち奏して、嗣となし、名を改めて、義視と曰ひ、細川右京大夫勝元を以て、傅となす、將士、是れより尊んで、今出川殿と曰ふ、義視、時に、年十七。

未だ幾ばくもならず、義政の夫人富子、嗜酸の喜びあり、六年十一月、月満ちて、一男子を擧ぐ、之れを義尙となす。富子、此子を以て、法師となすに忍びず、如何にもして、世に立てんと、心を碎く。

當時の諸將中、聲望の最も隆盛なるものを、細川右京大夫勝元となす。

然れども、勝元は、既に、義視の傅たり、義視をこそ、輔くべけれ、決して、義尙を援くるものにはあらず。

此勝元を外にして、然るべきものを求むれば、斯波も衰へ、畠山も分れたる今日、唯、一の山名宗全の外あるべからず、

『此上は、彼の赤入道にこそ、頼むべけれ』

と思ひ極め、自ら一書を認めて、密に、宗全の許に贈れば、

『這は、何事やらん』と心に訝りつゝ、急ぎ披見したる宗全、忽ち莞爾とばかり、北叟笑む、

『若君の御事、入道殿に頼み参らす、其御生涯の事共、兎も角も、好きに計らひ給ひ候へかし、我身、三十に及びて、一子を授かり候へるに、早くも、出家の身となし参らせんこと、最も本意なうこそ覺え候へ、あなかしこ、返す返すも、此事、人に、な漏らし給ひそ』

との文意、宗全、争てか異存あらん、

松次郎法師を、取り立つること、心得がたけれ、今にし
て、早く、備を爲さずんば、臍を噬むとも、及ぶべから
ず、右京大夫は、今出川殿の執權なり、此殿、世に立ち
給はゞ、彼れは、益々權威を得て、我れは、愈々不利を
招かん、若かず、和子を、世に出だし參らせて、世をも
國をも、我が意の儘に爲さんには』

心、此に決すれば、直に
『御内旨の趣、畏つてこそ候へ』

と答へて、義尙の一身を、輔翼するに決す。應仁の亂、實
に、此に基づく。

九

斯波左兵衛佐義敏、久しく、大内介教弘の許に在り、教弘、
機を見て、其赦免を乞はんと欲す。

幕府の執事伊勢伊勢守貞親に、新造と稱する愛妾あり、義
敏の妾と、姉妹の關係あり、義敏、乃ち新造の手を経て、
貞親に懇請する所あり。

當時、鹿苑院の僧蔭涼軒眞藥、亦、義政の爲めに、親信せ
らる、義敏、又其子松王丸を以て、眞藥の弟子となし、其

手を以ても、赦免の事を計る。

是に於て、貞親、眞藥の二人、相謀りて、屢々義敏恩赦の
事を請へば、貞親の子兵庫貞宗、之れを憂ひて、父に向ひ、
『左兵衛佐は、臣下の不服に因りて、今日の始末に及べ
るものに候、若し、之れを召し還し給はゞ、再び臣下の
動搖を來して、終には、天下の騷亂を惹き起さんも、知
るべからず、殷鑑、遠からず、近く、畠山の上には、唯、
措かせ給へ』

と諫むれども、貞親、首を掉つて、聽かず。
却て、貞宗を疎んず。

爾來、貞親、義敏の爲めに、益々赦免を乞うて、止まず、
義政、初めは、躊躇せしも、終に、之れを釋す。

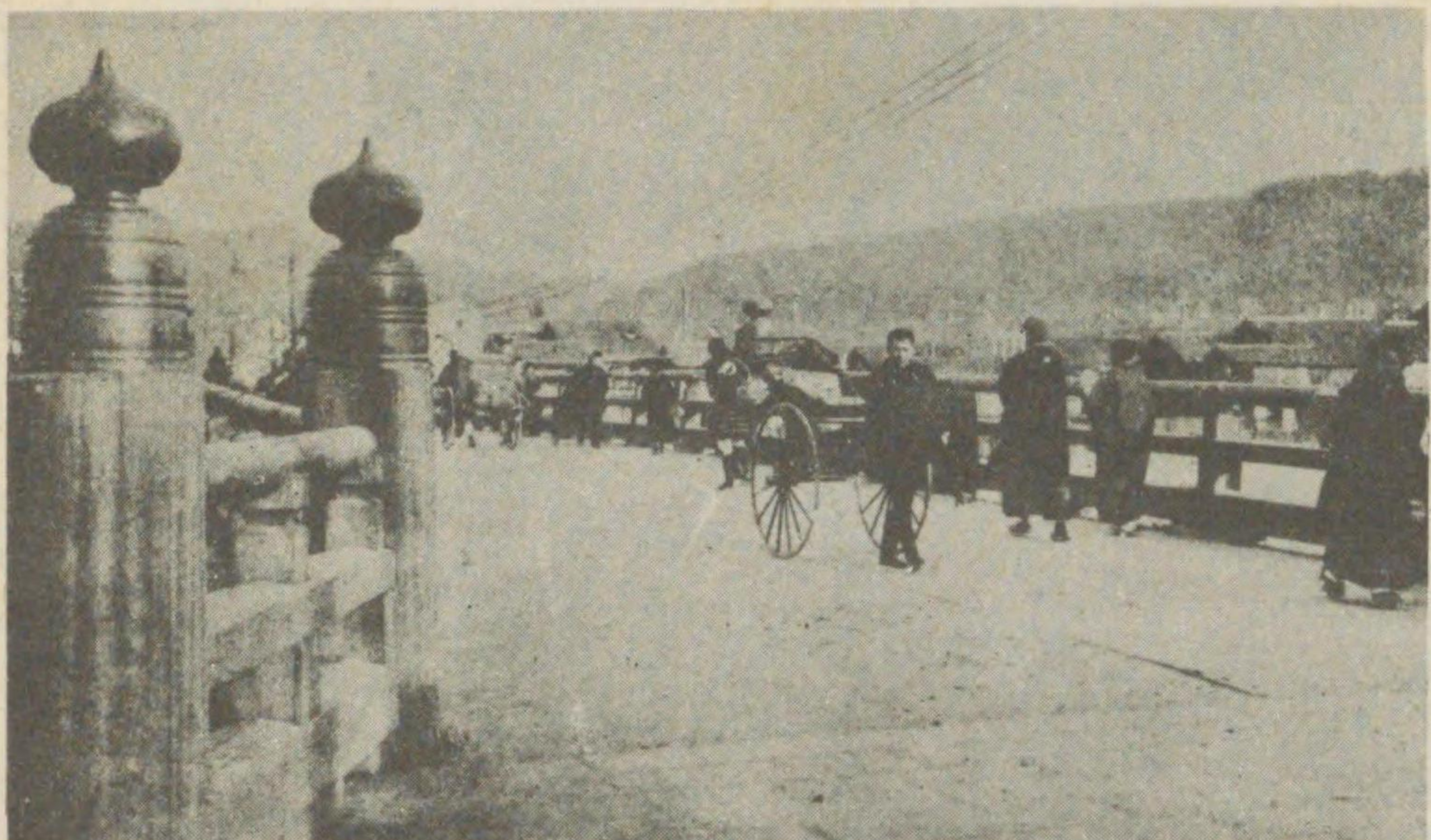
義敏、大に悦びて、京師に還り來り、六年十二月二十九日、
其父修理大夫入道持種と與に、入つて、義政、及び義親に
謁す。

時に、治部大輔義廉、家督たり。

貞親、眞藥の二人、更に、義廉を卻けて、義敏を立てんと
欲し、文正元年六月、義政に對して、嘆訴する所あり、義

南禪寺山

此れは京都市三條大橋を隔て、東山を望む光景に
して右は華頂山左は南禪寺山其中間の處を粟田口
となす秋庭元明の障地は此南禪寺山の附近なり



政、復た之れを
聽す。

左れども、尙、
未だ發せず。

義視、之れを知
り、八月、義廉

に通ず事、義政
に聞ゆれば、

忽ち赫と怒り、
『義視の振舞

こそ、奇怪な
れ、此上は、

疾く疾く、義
敏を以て、家

督と致せ』
二十五日、命じ

て、義廉の出仕
を停め、且、使

を違はして、

『勘解由の屋鋪は、左兵衛佐に、引き渡すべし』

との嚴命を下す、義廉、時に、宗全の女を娶るの約あり、
義廉、乃ち馳せて、之れを宗全に訴ふれば、忽ち勃然とし
て怒り、

『扱ても、言語道斷の御沙汰にこそあれ、此儀に於ては、
如何に、上意なりと雖も、入道、従ふべきにあらず、勘
解由小路の宅に、罷り下つて、上使を支ふべし』

と意氣捲く、諸臣、聞きて、大に驚き、十三人の連署を以
て、切に、諫争すれども、宗全、首を掉つて、肯んぜず、

『源、濁れば、委、澄まず、政、亂るれば、民、安から
ず、諸侯、若し、過失あらば、管領に謀り、諸司に諮り

てこそ、處分せらるべきに、唯、嬖臣の密請を納れて、
妄りに、三職の進退を行はる、こそ、奇怪なれ、今日は、

義廉が上、明日は、我等の身に懸らんこと、何の疑ふこ
とかあらん、左ればこそ、入道一人、勘解由小路の宅に、

馳せ下つて、義廉と與に、腹を切らんと存するなれ、諫
言無用ぞ』

と告げて、頑として、聴き入れず、諸臣、

『此上は、是非に及ばず』

終に、宗全の意に従ひ、募兵、若し出づれば、直に、出陣せんと、犇おしき合ふ。

山名の一族は、言ふに及ばず、土岐、一色、六角の面々、亦、之れを聞きて、兵を聚む。

都下、騒然として、流言飛語、連りに湧く、誰言ふとなく、

『今出川殿こそ、治部大輔に與みし給ひけれ』

と言ひ觸らせば、義政、聞いて怒り、終に、此れと義絶すれば、義視、潛に一色伊豫守範直、色九郎親元を従へて、勝元の第に入る。

宗全、又一族、及び同志の諸侯と與に、連署の訴狀を呈して、貞親の構態を彈劾し、且、之れを誅せんことを請へば、貞親、大に懼れ、九月六日、眞藥と與に、伊勢に奔る。

義敏、亦、北國に走れば、是九月十四日、義政、復た義廉を以て、斯波の家督となす。義政、尋いで、義視と和す。昨是今非、朝令暮改、廟議の變化、宛あたから、猫眼の如し。

十

宗全、既に、斯波義廉を援けて、義敏を排す、更に、畠山義就を援けて、政長を卻けんと欲し、姉の安清院を以て、義政の夫人富子に對し、

『畠山右衛門佐の、久しく牢籠らうろう候こと、如何なる不忠に據り候や、勇士、志を當世に得ずして、身を山林に隠し候こと、天下の御爲めとも存し奉つらず、あはれ、恩免の命を蒙りて、若君の御爲めに盡させ候ばや』

と請ふこと、再三に及べば、夫人も、捨て置きがたく、終に、義政に請うて、赦免の命を下す。

義就、時に、大和の北山に在り、宗全、急使を發して、之れを召せば、義就、大に悦び、

『多年の墊懷、今ぞ開けぬ、急げや殿原、猶豫すべからず』

文正元年九月上旬、急に、北山を發して、河内に入る。遊佐河内守長直、時に、政長の爲めに、若江城を守る、義就の來るを聞きて、恐れて、大和に走れば、義就、直に、城に入りて、其兵を併はす。

十二月二十五日、義就、兵五千餘騎を率ゐて、京師に入り、千本の地藏院を以て、宿陣とし、夜に入りて、幕府に候す。

尋いで、宗全の第に到りて、芳志を謝すれば、宗全、亦、悦びて、通宵、宴を開く。

何者の所爲なりけん、其翌くる朝、地藏院の門扉に、落書せるものあり、

右衛門佐いたゞくものが二つある

山名の足と御所のさかづき

從兵、見て、早々、削り去る、今や、山名の足を戴くもの、漸く増加せんとす。

十一

翌くれば、文正二年、元を改めて、應仁と稱せらる、天下の大亂、實に、此年より起る。

從來、正月二日は、將軍、親しく、管領の第に臨みて、塊かたまり飯の饗應を受くるを以て、恒例とす。

今の管領は、畠山左衛門督政長なり、政長、乃ち從來の例に據りて、諸般の準備を調へ居たるに、思ひ懸けなくも、其前日、

『思召さる、仔細あり、明日の御成は、一先、延引あらせらる』

と告げて、其出仕を止む、事、意外に出づれば、政長の噴惋、大方ならず、

『我れ、管領となりてより、此に四年、其間、曠れの大禮を務むること、八ヶ度に及びて、奉公、他に異なる、宜しく、御感にこそ、預かるべきに、却て、斯かる御不興を蒙むるとは、何事ぞや』

深く、時事の非なるを嘆す。斯くと聞ける義就、手の舞ひ、足の踏むところを知らざるまでに、打ち喜ぶ、

『政長、既に、勸氣を蒙むるからは、片時も、足を京師に留むること、叶ふまじ、イザ左らば、彼の館に移らん、假令、政長、忍びて、其處に在りとも、ヨモ否とは、言ひ得まじ、嬉れしや、多年の鬱懷を散すべき時、今ぞ來つる』

と勇み立てば、遊佐、譽田、隅屋、甲斐庄の諸臣、亦、皆、打ち悦ぶ。

然れども、政長は、勇將なり、特に、勝元此れを援助するからは、之れを奪取せんこと、容易にあらず。

『如何にして、取り返すべきぞ』
皆、首を鳩めて、策を議するも、事、儀に決せず。

政長の執事神保宗右衛門尉長誠、早くも、此事を聞き知り、『我等は、佐殿の御在所に、取り懸けて、本意を達すべき所に、却て、彼方より、屋形受取の爲めに、押し寄すこそ、幸なれ、然らば、屋形の近所に、引き移つて、待ち受けん』

二條京極の宅より、屋形の門前佛陀寺に移りて、樓櫓を建て、桎梏を列ね、守備を調へ、待ち構う。

義就、之れを聞きて、容易に迫らず、荏苒、日を送る。

正月八日、義政、終に、政長の管領を罷め、斯波治部大輔義廉を以て、此れに代ふ。

義政の意は、今や、宗全の方に傾きつゝあり、皆、夫人富子の、側より操つるところ。

十五日、宗全、一族、及び一味の諸侯を招きて、碗飯の饗宴を開く。

來り會するもの、吉良左京大夫義勝、斯波左兵衛佐義廉、

畠山右衛門佐義就、畠山左衛門佐義統、畠山宮内大輔教國、

畠山左馬助政榮、畠山右馬頭政純、畠山中務少輔政光、畠

山播磨守教光、一色左京大夫義直、一色兵部少輔義遠、一

色五郎政光、一色左馬助政兼、一色治部少輔政熙、一色民

部少輔親信、一色刑部大輔貫益、一色刑部少輔教長、仁木

右馬助教將、土岐美濃守成頼、山内宮内大輔政綱を始め、

一族には、彈正少弼教豐、兵部大輔政清、相模守教清、攝

津入道永椿、左馬助豐光、五郎宗幸、宮田民部少輔教實、

宮内少輔豐之、上總七郎政光等、總て三十餘人。

宴、終れども、敢て散せず、先づ、義視の今出川の第に到

り、

『急ぎ室町の御所に、成らせ給へ』

と促がせば、義視、何事にやと、打ち驚き、取る物も取り

敢へず、室町の幕府に、馳せ到る。

宗全、續いて、幕府に候し、三十餘人の諸侯を以て、幕府

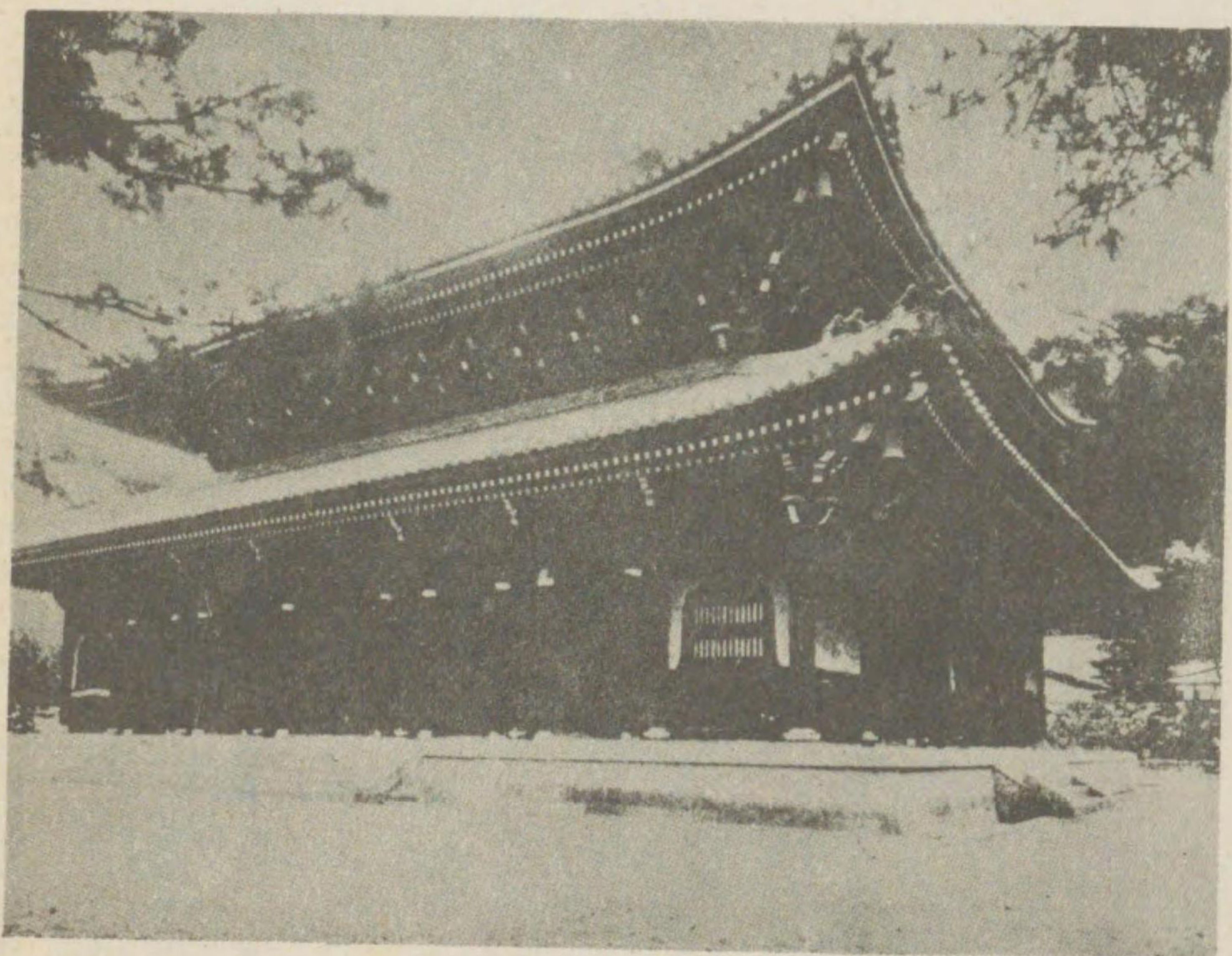
を取り巻きつゝ、

『畠山右衛門佐、御赦免を蒙り候上は、萬里小路の館に、

『御所勢、攻め來らんとす』

南禪寺の本堂

南禪寺は京都市上京區南禪寺町に在り臨濟宗南禪寺派の大本山なり應仁の亂に兵燹に罹りて一山悉く焦土と化す此れは其本堂なり。



と聞き
と愕き、
人心、
亦、恟々
として、
其堵に
安んぜ
ず。勝
元の一
族、及
び一黨、
亦、此
形勢を
見て、
其第に
馳せ集
まる。

引き移らんと存する所に、細川右京大夫、却て、畠山左衛門督を援けて、違亂に及び候こと、且は、上意に背き、且は、叛逆を企て候ものか、此上は、上使を遣はされて、其仔細を御尋ねあり、且は、政長の援助を御傍止あらせ給はんやう』

と強請すれば、義政、

『山名入道が申すところ、其理由あり』

と告げて、之れを聽し、軀て、使を遣はして、命を傳ふれば、勝元、

『御返事は、是れより、言上候はん』

と答へて、命を奉ぜず、事態、漸く切迫し來る。

十二

政長、義就の紛争は、轉じて、勝元、宗全の對抗となる、彼我の衝突、今や、免かるべからざるの勢あり。時に、流言、連りに飛び、訛傳、熾んに行はる、幕府にては、

『細川勢、押し寄せんとす』

と聞きて驚き、勝元の第にては、

其面々を擧ぐれば、一黨には、吉良右兵衛佐義直、吉良上總介義富、赤松次郎政則、赤松伊豆守貞祐、赤松道祖松丸、山名彈正忠是豊、佐々木大膳大夫入道正觀、佐々木中務少輔勝秀、佐々木四郎政信、武田大膳大夫信賢、武田治部少輔四信、富樫鶴童丸、仁木兵部少輔成長、仁木四郎政永、一門には、讚岐寺成之、兵部大輔勝久、右馬頭入道道賢、中務少輔政國、民部少輔教春、淡路守成春、阿波守勝信、刑部少輔勝吉等、總て二十餘人、勝元の猶子六郎を推して、將となす。

畠山左兵衛督政長、亦、兵を集めて、萬里小路の筈を守る。是に於て、各々兵を出だして、傍近の辻々に備ふ、對峙の勢、全く成る。年、新にして、駘蕩たる春風、庭樹を吹くの時、漠々たる兵塵、都門の天に、漲り立つ。

十三

宗全、兵を以て、幕府を守り、義政に迫りて、勝元、政長を討伐せんと欲し、自ら義政に謁して、

「勝元、政長を御退治あらせ給はずんば、天下の安靜は、

る、の條、奇怪なり」と惠めば、義就、

「御下知の趣、我等の最も庶幾する所にこそ候へ、單身、雌雄を決せんことは、我等の多年熱望せる所に候、明日、我等の手勢のみを以て、政長の宿所、春日萬里小路に押し寄せて、一家の興亡、一身の生死を決し候はん、各々敵味方の剛憶如何を、見物せられ候へ」と言ひ放つ、意氣、虹霓の如し。

幕命、今は、塵よりも輕し、勝元こそ、此命に服従すべけれ、宗全は、決して、此令を奉ずるものにはあらず。神保宗右衛門尉長誠、思慮あり、此夜、政長に謁して、

「細川殿は、日頃の御約諾も候、此殿、君に合力あらせ候は、京極殿も、亦、援助あらせ給ふべしと存じ候へるに、臺命、黙止しがたく、細川殿には、終に、合力せざる旨、御請けに及ばれ候由、其風聞の候、敵は、諸家と一所に、御所に候、如何に、上意なりとも、密に、敵に加勢すべきは、必然に候、然るに、此屋形は、要害もなき平場に候、大軍を引き受けて、防戦すべき場所には

決して、望まれ候まじ、疾く、御教書を下し給へ」と請ふ、されども、事は、皆、宗全、義就の上より起るを知れば、さしもの義政も、躊躇して、之れを聽さず、京童、聞きて、

春來れば又うちかへす畠山

猶いさかひの種をまくらん

と落書して、之れを嘲る。

宗全、義就と謀り、或は、車駕を迎へて、勝元、政長を討伐せんことを計り、或は、院宣を請うて、二人を誅戮せんことを討る、策動至らざるなし。

義政、深く、之れを憂ひ、十八日、令を下して、各々黨を結ぶを禁じ、且、

「義就と、政長と、怨を結んで、和せずんば、各々一隊の兵を率ゐて、雌雄を決せよ、若し、之れを援くるものあらば、謀叛の罪を以て、論ぜん」と諭す、宗全、

「我等は、去る十五日より、今日に至るまで、晝夜四日の間、只管、愁訴せる甲斐もなく、却て、徒黨を禁ぜら

候はず、此處は、サラリと、打ち捨て、上御靈の森に、立て籠り、藪を小楯に、一戦あらせ給ふべし、萬一、合戦難儀に及び候とも、此處は、細川殿の矢倉の前に候、ヨモ見殺しには致され候まじ、老臣安富民部丞綱元は某の愠懣に候、細川殿、君を援けずとも、民部は、某を援け候はん、假し、民部、某を援けずとも、細川殿は、君を援け給ふべし、疾く、思し立たせ給へ」と説けば、政長、實にもと領づき、其夜、火を縱つて、第を焚き拂ひ、兵六千騎を率ゐて、出で、上御靈の森に陣す、士卒、途より、逃げ亡せて、此處に従ひ來るもの、纔に、二千騎に過ぎず。

勝元、初め、政長を援けんとす、義政、伊勢備中守貞藤、飯尾下總守爲數の二人を遣はし、内書を下して、之れを止む。

勝元、尙、服せず。

義視、更に、細川民部少輔教春を遣はして、懇諭するに及び、勝元、始めて、命を奉ず。

政長、今や、全然、孤立の身となる。然れども、意氣、泰然として、驚かず、飽までも、孤軍を提さげて、血戦せんと欲す。

十四

天、明くれば、義就、院宣を奉じて、來り攻む。宗全、兵を遣はして、之れを援け、斯波左兵衛佐義廉、山名彈正少弼教豐等も、亦、之れを援く。

上御靈の森は、京師の北端に在り、南には、相國寺の藪あり、西には、細川の第あり、義就、乃ち東より迫れば、朝倉彈正左衛門尉孝景は、北より攻む、義就、

『戦場の習ひ、一步を進めば、鼠も虎となり、一步を退けば、虎も鼠となるものぞ、軍の利は、勝に乗つて、北ぐるを逐ふに在り、進めや、唯、進んで、敵を撃ち碎けや』

と呼ばれば、遊佐河内守順盛、忽ち、馬より、飛び降りて、眞先に、奮ひ進む、それと見たる全軍、

『あれ討たすな、續けや續け』

と呼ばりつ、皆、馬より、飛び降り、怒濤の如くに、

競ひ進む。

勇氣、烈しと雖も、寒氣、更に烈し、愛宕風の寒風、雪を吹いて、身は冷え、手は凍え、弓を引き、矢を番ふことも叶はず、皆、敵陣を睨んで立つ。

待ち構へたる政長の兵、皆、奮ひ立つ、竹田與次等の精兵、各、鎌を揃へて、差し詰め、引き詰め、矢を放つこと、霰の如く、眞先に進める坂戸以下、見る、倒れ死するもの、五六百人。

北口に進める朝倉の勢も、亦、樹陰、藪陰より、散々に、射立てられて、死傷するもの、算なく、攻戦、卯より、酉に至る六時、未だ一步も、敵の陣地を踏むこと能はず。

山名教豐、三千餘騎を率ゐて、代り攻むれども、政長、亦、能く拒ぎ戦うて、屈せず。

既にして、日、全く暮るれば、寄手の兵、少しく、陣を引きて、人馬の息を繼ぐ。

神保宗右衛門尉長誠、使者を、安富民部丞元綱の許に遣はして、

『合戦、朝より、暮に及びて、人も疲れ、馬も勞れ候ひ

十五

義就、既に勝つ。

宗全、義就、是れより、跋扈横暴、至らざるなし。

上巳の節會には、宗全、彈正少弼教豐、相模守教清、兵部大輔政清、及び斯波右兵衛佐義廉、畠山右衛門佐義就、畠山左衛門佐義統、一色左京大夫義直、土岐左京大夫成頼、六角四郎高頼以下の諸侯を率ゐて、室町の幕府に候し、更に、義視の今出川殿に候す、其距離、相近きを以て、各、徒歩して行く、衣服、美を盡し、刀劍、善を盡し、手には、各、一朵の花を携ふ、觀るもの、皆、眉を擡む。

勝元、屏居して、出でず、日夜、密に、謀議を凝らす、叔父右馬頭入道道賢、慨然として、一座を見遣りつ、

『去ぬる正月の事を、如何思し候ぞ、幕府の命を重んずるとは言へ、味方の兵を棄つるは、弓矢の道にあらず、此會稽の恥辱を雪がずんば、世上の嗤笑を如何にかすべき、何ど、疾く思ひ立ち給はざる、情なき人々の覺悟や』

老眼に、涙を揮うて、激勵すれば、番西元直、香川元光、安富元綱、奈良元吉、秋庭元高、藥師寺與一、安養寺佐左

ぬ、上意の重きところ、御加勢なきも、是非なき事とは申せ、枉げて、一樽の酒を贈り給はり候へ、主人左兵衛督に獻じて、最後の宴を開かんと存するにこそ候へ』と請へども、元綱、此れをも、拒んで、與へず、政長、聞きて、

『右京大夫、我れを援けざるからは、此處を保つも、詮なし、今の内に、立ち去らん』

と思ひ定め、夜半の比、火を御靈の社頭に縱ちて、潜に、相國寺の竹林中より、何處ともなく、遁れ去る。

義就、火炎を望み見て、馳せ到り、三個の死屍を、灰燼中より發見して、政長既に死せりと思ひ、高く、凱歌を奏じて、兵を旋へす。

政長、時に、左兵衛督を以て、尾張守を兼ね、京童、細川は淵俣川と名のれかし

尾張そこなふ川とこそ聞け

との落書を作りて、勝元の政長を援けざるを嘲ければ、勝元、聞きて、心に、之れを恥づ。

衛門等の諸老臣、皆、一齊に、

『疾く、思立たせ給へ』

と勸む、勝元、亦、愁然として、涙を垂れつゝ、

『當家は、未だ會て一日も、御敵となりたる事のあらざるに、今や、彼の面々に、疎隔せられて、心ならずも、

御敵の名を取るこそ、口惜しけれ、イザさらば、彼の惡人共を退治して、世の安穩を計り候はん』

と陳べ、終に、意を決して、宗全、義就の二人を除かんと思ひ極む。

今は、躊躇すべからず、勝元、直に檄を發して、兵を募る、其一族は、攝津、丹波、土佐、讃岐、阿波、淡路、參河、備中、和泉の九國、畠山左衛門督政長は、紀伊、河内、越中の三國、佐々木大膳大夫入道正親は、出雲、隱岐、飛騨の三國、武田治部少輔信國は、安藝、石見の二國、斯波左兵衛佐義敏、赤松次郎政則等は、其手勢を以て、各、此れに應ず、其總勢、十六萬一千餘人。

急に、濠を鑿ち、塀を構へ、矢倉を建て列ねて、嚴しく、守備を修む。

宗全、之れを聞きて、忽ち、哄然として笑ふ、

『眼前の急をも救はざる身を以て、徒に、賊後の弓を彎かんとするこそ、可笑しけれ、何程の事かあるべき』

初めは、冷然として、意に介せざりしも、扱て止むべきにあらねば、亦、檄を飛ばして、兵を募る、

其一族は、但馬、播磨、伯耆、因幡、美作、石見、備前、備後の八國、斯波左兵衛佐義廉は、越前、尾張、遠江の三國、畠山右衛門佐義就は、大和、河内の二國、畠山左衛門佐義統は、能登、一色左京大夫義直は、丹後、伊勢、土佐の三國、佐々木大膳大夫高頼は、近江、大内介政弘は、周防、豊前、筑前、安藝、石見の五國、河野一族は、伊豫の兵を以て、此れに加はる、其總勢、十一萬六千餘人。

勝元の陣は、東に在り、宗全の陣は、西に在り、故に、一を東陣と曰ひ、一を西陣と稱す、兩陣、相持して、未だ戦はず。

人馬、東西に馳せ違ひ、旌旗、天空に鳴りはためく。

義視、大に、天下の戦亂とならんことを憂ひ、先づ、勝元の陣に入つて、和解を試み、更に、宗全の陣に到りて、慰

撫を加ふ。

二人、勉めて、此れに従ひ、暫く、柵を撤し、備を弛ぶ。

然れども、未だ幾ばくならずして、復た柵を構へ、備を立て、義政、乃ち令を下して、

『誰彼に論なく、先づ、戦を開くものは、謀叛の罪を以て、之れを論ぜん』

と戒む、然れども、幕府の成望、今や、全く衰へ、世人は、唯、細川、山名あるを知りて、義政、義視あることを口にせず、其命令、殆ど行はれず。

十六

宗全の孫婿一色左京大夫義直の第は、室町幕府の北門前に在り、勝元、

『實相院と、正實坊とを收めて、味方の陣營となし、赤松伊豆守の屋敷、及び細川讃岐守の屋敷との聯絡を保たば、左京大夫は、忽ち孤立して、永く其地を保つこと能はざるべし』

と計り、五月二十四日、武田大膳大夫信賢を遣はして、實相院を收めしめ、又大和の淨心院を遣はして、正實坊を取

らしむれば、義直、聞きて、大に驚き、其夜、倉皇、馳せて、宗全の西陣に走る。

義直の第、既に東陣の手に落つれば、室町幕府も、亦、自から勝元の手へ歸す、

『左京大夫、既に、引き退く上は、我れ、御所を警固せん』

其翌二十五日、勝元、自ら兵を率ゐ、往きて、幕府の諸門を守り、征旗を請うて、宗全を討ず。

勝元、先づ、機先を制す。宗全、大に驚きて、實相院、及び正實坊を奪回せんと欲し、二十六日、垣屋越前守宗忠、垣屋越中守等を遣はして、之れを攻めしめ、山名攝津入道永椿、山名左馬助豊光等、亦、之れを援く、總勢一萬五六千騎、哄と、吶喊を發して、押し寄す。

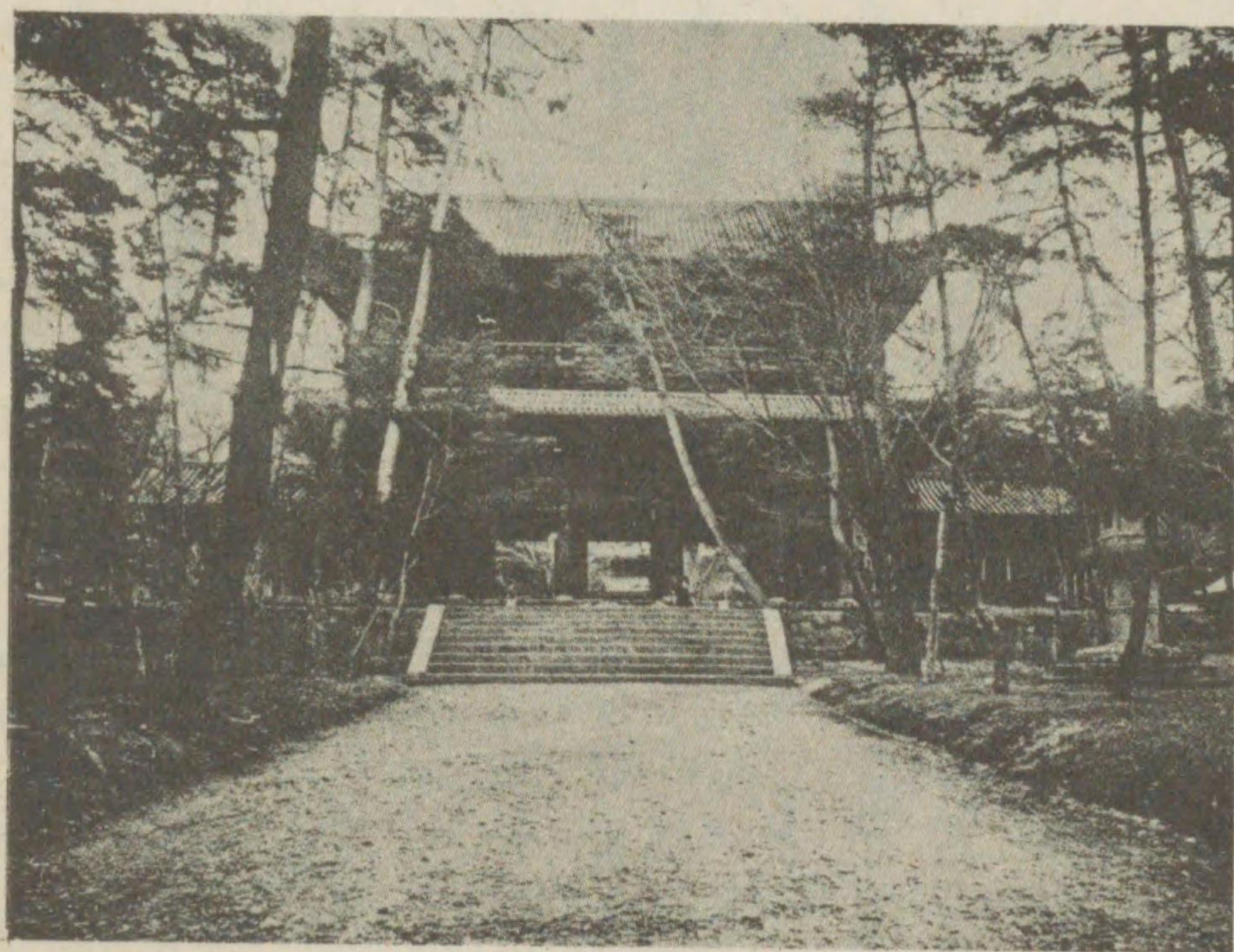
武田大膳大夫信賢、及び香西元直、安富元綱等、此處を守る、亦、鯨波を合せて、拒ぎ戦ふ。

大鼓堂の前よりは、一色左京大夫義直、來り攻め、舟橋口よりは、山名修理大夫政清、來り攻むれば、花の坊は、畠

山右衛門佐義就、大宮口は、山名彈正少弼教豊、亦、皆、一齊に、來り攻む。戰鬪、其處にも起り、此處にも起りて、喊聲、高く、馬煙と與に、渦巻き騰る。宗全の兵、火を花開院に縱てば、炎粉、飛んで、落花の如く、水落寺、花の坊、集好院等の堂舎、忽ちにして、烏有に歸し去る。兩軍、之れを事ともせず、皆、漠々たる煙中を冒して、奮ひ鬪ふ、勝敗、決せず、日、終に暮る。

十七

廬山寺の南、一條大宮に、細川備中守の第あり、獨り離れて、敵地に在り。宗全、乃ち斯波左兵衛佐義廉を遣はして、之れを攻めしむ、甲斐、朝倉、織田等の諸士、此れに従ふ、其勢一萬餘騎、猛威を奮うて、來り攻む。館中には、細川讚岐守政之の兵あり、身を死地に置きて、何どか、命を惜まん、奮鬪血戰、矢石を飛ばして、近づき敵を追ひ拂ふ、銳鋒、當るべからず。



攻戰、數刻に亘れば、山名相模守教清、布施左衛門佐等、新手の兵を率ゐて、來り援け、銳氣を鼓して、嚴しく、攻南禪寺の三門
此れは京都市上京區南禪寺町にある南禪寺の山門なり。

め立つ。館中の兵、漸く疲れ、一條大宮の口、早、破るんとす。斯かる折柄、佐々木大膳大夫入道正觀、一

萬餘騎を率ゐて、馳せ來り、哄と、鯨波を作つて、寄手の兵に、攻め懸かる。館中の士卒、此れに、力を得て、勇氣、頓に加はり來り、内外、力を發せて、敵を逐ひ拂はんと、意氣込む。

義廉の老臣織田、鹿野の面々、敵の陣勢、尙、整はざるに乘じて、嚴しく、攻め懸かれば、甲斐、瓜生の面々、亦、同じく、喚き呼んで、攻め懸かる。

正觀、猛氣なりと雖も、場所、狹隘にして、自由に、兵を操つること能はず、敵の銳鋒に、切り立てられて、終に、政之の館に、引き退く。

館中の兵は、少しも、怯まず、敵、近づけば、逐ひ拂ひ、敵、退けば、逐ひ撃つ、籠城四日、士卒、過半は、撃たるれども、尙、固守して、屈せず。

赤松次郎政則は、宗全を敵視すること、最も甚し、備中守の苦戰を聞くより、忽ち憤然として起つ、

『備中守を見殺さんは、弓矢取る身の瑕瑾ぞ、來れや殿原、中に馳せ入つて、備中守と與に、對死せん』
と叫ぶるや否や、手勢三百騎を提さげて、正親町通より、

猪熊通を、北へ、一散に、駈けつけ駈けつけ、近づく儘に、
『赤松と云ふ剛の者が、來つて、備中守に、力を合はせ候ぞ、勇めや館中の人々、奮へや味方の面々』
と呼はり呼はり、無二無三に、突き立つ。
敵兵多しと雖も、小路の軍は、進退、心に任せず、攻戰四日に互りて、兵も疲れ、馬も勞れて、拒ぎ戰はん勇氣もなく、此新手の小勢に、逐ひ立てられて、皆、搦と、廬山寺の西に、奔り退く。

政則、此隙に、備中守以下を援ひ出だし、屋舗に、火を縱つて、成之の館に、引き揚ぐ。

十八

それと見たる寄手の兵、復た取つて返し、堀川以西にある細川淡路守成春の第をも焚き、村雲寺をも焚き、百萬遍寺をも焚き、草堂をも焚きて、兵勢を助け、村雲橋を渡りて、細川讚岐守政之の第に、攻め寄す。

此處には、政之を始めとして、佐々木大膳大夫入道正觀あり、細川備中守あり、各々兵を率ゐて、突出し、追つ、追はれつ、寄せつ、寄せられつ、鎧を削つて、奮ひ鬪ふ。

兵士、火花を散らして戦ふの時、魔風、火勢を煽りて、冷泉殿をも焚き、赤松伊豆守の第をも焚き、山名左衛門佐の第をも焚きて、勢銳とく、燃え廣がる。

戦鬪は、二十六日の曉に始まりて、二十九日の暮に終る、兩軍、各々奮闘すること四晝夜、死者、傷者道路に充滿して、東の陣は、上は、大馬庭、西藏口より、下は、小川一條に至るまで、西の陣は、千本、北野、西の京に至るまで、足を踏み入るべき餘地さへあらず。

伏屍、山を成し、流血、川を爲して、腥風、都門を吹き捲くる。

十九

此戦鬪、今、一日に涉らば、西陣の敗れに歸すべきところ。初めは、敵を蔑視したる宗全、俄に、檄を飛ばして、兵を募る。

勝元は、自ら兵五千を率ゐて、幕府を守り、固く四門を鎖して、内外の交通を絶つ。

義政、圍中に在りて、一人をも、出だすこと能はず、宗全の形勢、漸く非なり。

六月八日午の刻、無頼の徒ありて、火を、一色五郎政氏の中御門猪熊の家に縦ち、更に、吉田祠官の近衛町の家にも縦つ。

折りしも、南風、烈しく吹き起りて、火勢を煽れば、紛々たる火氣、雨の如く、霰の如くに、降り懸り、濺ぎ懸りて、大厦高樓も、見る見る、一團の火塊となりて、崩れ落つ。それと見たる兩陣の士卒、競うて、民家に押し入り、當るに任せて、金銀財寶を奪ひ取る状、宛から惡鬼羅刹の如し。市民、火に艱み、兵に惱みて、復た之れを濟さんとするものなく、纒に、老を扶け、幼を拉へて、命からがらに、逃げ行く。

火勢、風勢、荒れに荒れて、上は、御靈辻子より、下は、二條まで、東は、室町より、西は大舎人に至るまで、廣袤百餘町の間、公家、武家、社家、寺家、大家、小家の別なく、皆、一瞬の間に、灰燼に化し去る、其家數、凡三萬餘宇。

華洛の繁華、忽ち、荒涼の焦土と化し畢てぬ。

廿

戦鬪、未だ終らず、火災、忽ち起り、火災、纒に熄めば、戦鬪、又忽ち起る。

勝元、大内介政弘の、分國、及び伊豫の兵を率ゐて、宗全を來り援くるを聞き、

『然らば、其上洛するに先だち、武衛の陣を、逐ひ落して、下京の通路を開かん』

と決し、細川右馬頭入道道賢、細川下野守之親、武田大膳大夫信賢、及び香川元光、安富盛長等を遣はして、之れを攻めしむ。

斯波左兵衛佐義廉の武衛の第は、勅解由小路の室町に在り、道賢等、乃ち兵を率ゐて、往きて、之れを攻む、義廉、能く拒ぎ、攻戦、二十日に涉れども、尙、援くること能はず。七月二十五日、又之れを攻む、能勢源左衛門尉頼弘、其子彌五郎等、奮闘して、此れに死すれども、終に、援くること能はず。

既にして、大内介政弘、大兵を率ゐて、上洛し、西陣の兵勢、頓に振ふ。

宗全、大に喜び、援兵を發して、信賢等の兵を逐ひ拂ひ、武衛の壕を撃ち、塀を構へ、此處を、根據として、東陣に迫らんとす。

當時の皇居は、土御門に在り。

武田大膳大夫信賢の弟安藝守基綱、三寶院に陣して、皇居を警衛し奉つる。

三寶院は、東陣の一の城門なり、宗全、乃ち先づ三寶院を奪取して、更に、相國寺を占領し、御靈口を塞ぎて、勝元の進路を沮まんと欲す。

是に於て、畠山右衛門佐義就、畠山左衛門佐義統、大内介政弘、土岐美濃守成頼、一色左京大夫義直、佐々木大膳大夫高頼等、兵五萬餘騎を率ゐて、三寶院を攻む。

基綱、夙に、勇名を以て著はる、特に、正門の片扉を開きて、待ち設け、敵兵、寄せ來れば、逐ひ拂ひ、突き入れば、撃ち退くること、十餘度。

基綱、寡兵を以て、三十倍の大敵に當り、奮闘激戦、死を顧みず、血に塗みる、刀刃、ポッキと折るゝに至りて、悠々、引き退く。

三寶院、既に陥る、進んで、淨花院に迫れば、守兵、戦はずして、引き去る。

是に於て、西陣の兵、更に進んで、相國寺に迫らんと欲す。

廿一

勝元、尙、幕府を守る。

會々義政の近臣中、西陣に通ずるものありとの説あり、勝元、聞きて驚き、八月十八日、老臣香川元光、安富元綱等を召して、

『將軍家の近臣、及び伺候の輩の中、密に、敵に内通するものありと聞き及ぶ、捨て置かば、不思議の事も、出て來ぬらん、此事、如何にや爲すべき』

と問へば、何れも、大に、打ち驚き、

『此事、一刻も、猶豫すべきに候はず、疾く疾く、上聞に達して、叛逆の輩を、追放あらせ給ふべし』

と答ふ、勝元、及ち甲兵六千騎を以て、幕府の四方を圍み、嚴しく、近臣の出入を禁ずれば、義政、聞きて、

『這は、何事ぞ』

と懼れ驚く、勝元、驅て、細川民部少輔教春を以て、

『君の御近臣中、潛に、西陣に内應するものありとこそ承はれ、若し、速に制止し給はずんば、必ず、不思議の變を生ず候はん』

と懇ふれば、義政、益々驚き、三條大納言公春、吉良右兵衛佐義信の二人を以て、

『西陣に内通するものは、全部なりや、一部なりや、若し、全部にあらずば、其交名を言上候へ』

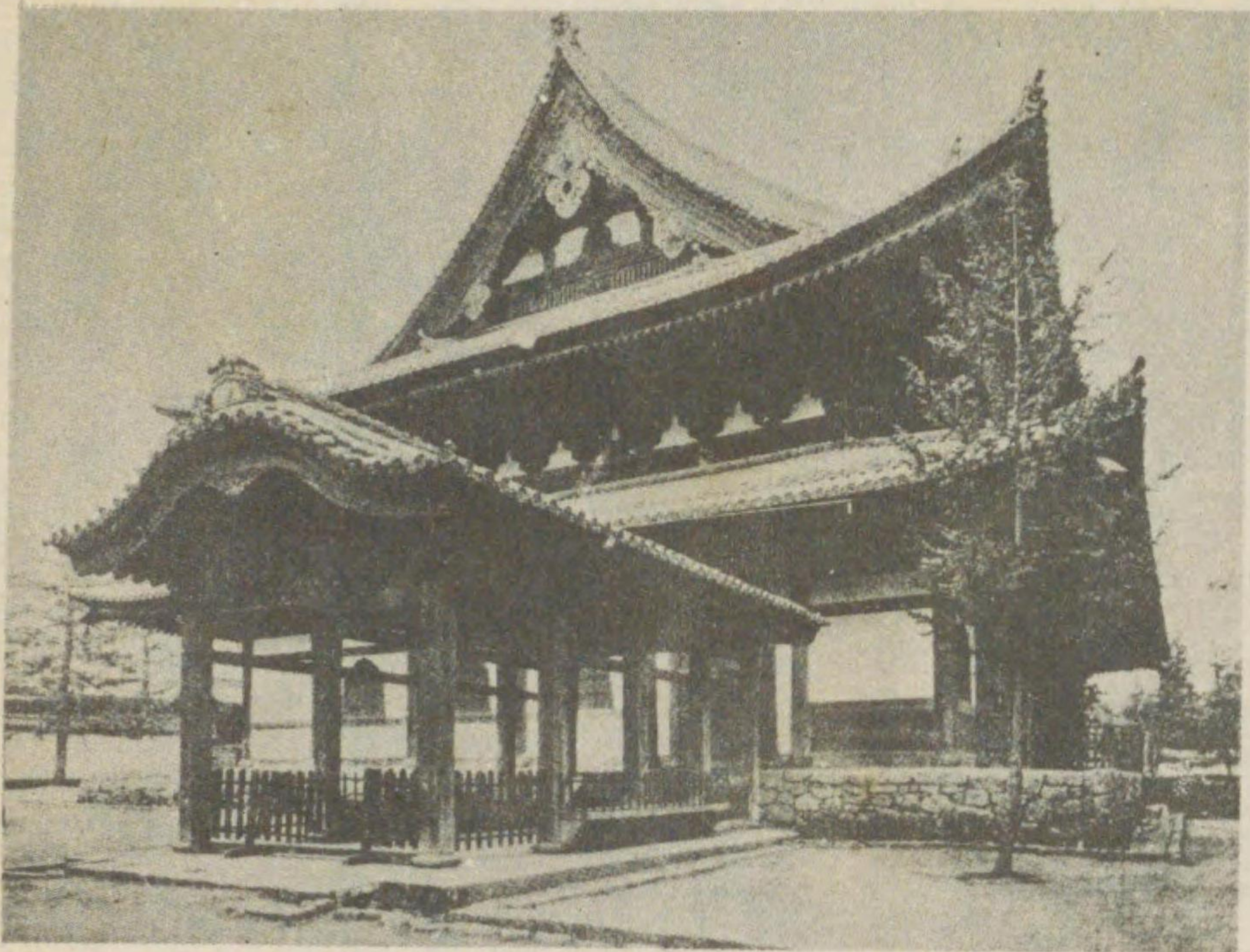
と告ぐ、勝元、乃ち其人名を調査し、二十三日に至りて、之れを義政に呈す、義政、披き見れば、一色式部少輔、佐々木大夫判官、上野刑部少輔、宮下野守、結城下野守、伊勢備中守、荒尾民部少輔、三上三郎、齋藤新兵衛尉、宮若狹守、齋藤五郎、及び同朋專阿彌の十二人の名を記しあり。

今は、止むべからず、義政、乃ち十二人を召して、其交名を示し、

『此上は、疾く疾く、殿中を立ち去り、且は、勝元の鬱憤を散じ、且は、諸人の憂念を解かんこそ、然るべけれ』と諭せば、一同、謹んで、

『上意、畏まり奉つる』

相國寺の法堂
相國寺は京都市上京區相國寺門前町に在り臨濟宗相國寺派の本山なり。應仁の亂に戰場となり一山焦土と化す。此れは其法堂なり。



室町幕府址

と述べ、

其席を退きて、

三條大

納言、

吉良右

兵衛佐

の前に

出で、

『殿

中に

於て、

心を

西陣

に寄

する

は、

唯、我等若輩の者のみには候はず、上の御心、西に向かせ候時、下の心、争かて、東に傾き候べき、敵方、利を得たりと聞きては、笑を含み、味方、捷を獲たりと聞きては、眉を擧め候もの、殿中、誰か然らざらん、然るに、唯、我等十二人のもの、み、其れと名指され候こと、誠に、是非もなき事にこそ候へ、然りと雖も、翻つて思へば、此れも、亦、我等の面目にも候べきか、此上は、右京大夫の前に出でて、腹を切り、金吾に運びたる志の程を、示さんとこそ存するにて候へ』

と述べ、更に、一同、
『イサ左らば、思ふ存分に、働きて、義名を、後代に貽さん』

と言ひ合はせ、部下八百人を率ゐて、最後の血戦を爲さんと、意氣捲く、二人、大に驚き、
『逸まり給ふな人々、若し、各々にして、討つて出でられなば、御所も、安穩ならず、上も、御無事には候まじ、唯今、一時、勘當せられ候とも、事、終らば、再び召し還し給はん御内意に候ぞ、唯、穩かに、退出せられ候へ』

理を悉し、言を盡くして、説き諭せば、一同、此れに服して、無事に退散するに決す。

幕府を圍める勝元の兵士、斯くと聞きて、

『左らば、途中にて、討ち取らん』

皆、一條、室町、烏丸の方に、馳せ集まれば、飯尾下總守爲數、其間に、小門を開きて、相國寺の中に、落し遣る。

廿二

此日、又西陣より、内裏に參入して、主上を取り奉つらんとすとの噂あり、勝元、聞きて、

『其は一大事ぞ、早く、此れへ、行幸を仰ぎ奉つらん』

義政に請うて、畠山左衛門督政長を、權りに、從三位と爲し、兵を帥ゐて、馳せて、禁闕に詣り、主上、上皇、及び神器を奉じて、幕府に迎へ來らしむ。

事、倉卒に發して、儀仗を整ふるに違あらず、月卿雲客、皆、戒衣を着して、供奉す、細川民部少輔教春、前驅を承はれば、吉良右兵衛佐義信、赤松伊豆守貞裕、後衛を仕ふまつる。

頓て、幕府に着御あらせ給へば、義政、行宮を設けて、乘

輿を迎へ奉つる。

勝元の意たる、義政にして、若し、己れを棄て、宗全を援くることあらば、天子を奉じて、征旗を建てんと欲するに在り。

廿三

西軍の三寶院を援き、更に、淨花院を奪ふや、勝元、急に、柵を相國寺に構へ、安富民部丞元綱に命じて、兵三千餘騎を率ゐて、之れを守らしむ。

九月十三日、三寶院の近傍より、火を發して、忽ち四方に延焼し、花山院を始めとして、公家にては、近衛、鷹司、日野、廣橋、西園寺、三條、轉法輪等の邸第三十七ヶ所、武家にては、吉良右兵衛佐義信、細川下野守、飯尾肥前守以下の邸宅八十餘ヶ所、寺院にては、三寶院、淨花院等、亦、皆、灰燼に化す。

嚮に、右京の火災に、類焼したるもの、一條小川より東、今出川までの大路に、小屋を建て、難を避く、圖らずも、今回の火に類焼して、纒に残れる什器家財を、烏有に歸し去る、其慘狀、目も當られず。

廿四

嚮に、大内介政弘の大兵を率ゐて、上洛するや、勝元、攝津の守護代秋庭備中守元明に命じて、之れを途中に拒がしむ。

元明、乃ち赤松勢三百餘騎と與に、諸所に、要害を構へて、扼せんとす。

赤松勢、勇敢なりと雖も、争でか、百倍の大敵に當り得べけん、忽ちにして、其撃破する所となる。

元明、更に、兵を募りて、三千騎を得たり、乃ち之れを率ゐて、京師に上り、東寺より、大宮を上りて、細川讚岐守政之の第に入らんとす。

進んで、五條に到れば、敵兵、來り拒ぐ、元明、敢て戦はず、五條を、東に折れ、六條河原を、迂回して、三十三間堂の北より、小松谷を越え、南禪寺の上方、岩倉に陣す。時に、九月十七日、日、既に暮るれば、林木を伐りて、熾んに、篝火を焚く、煌々たる火光、白晝を欺く。西陣の兵、望み見て、之れを撃攘せんとし、十八日の早曉、諸將、各々兵を率ゐて、來り迫る。

大内介政弘の兵は、南禪寺の方より、攻め上る。

元明、其猛勢を避けて、藤木越より、三井寺の方に退かんとす、既にして、其軍の寡單なるを見て、

『あれ見よ、外には、續く兵もなきぞ、疾く逐ひ拂へや』と呼はり、大木巨石を取つて、投げ下せば、敵兵、大に驚き慌て、皆、挫と、谷底に、崩れ落つ。

既にして、山名一族の兵、栗田口日岡峠の方より、攻め上る。

元明、復た熾んに、木石を投げ下せば、此れも、亦、辟易して、走り退く。

稍々後れて、畠山右衛門佐義就の兵、山科口より、來り迫る、遊佐、譽田の輩、眞先に在り。

元明の兵、既に、二隊の敵兵を撃退して、意氣、益々奮ひ、又盛んに、木石を投げ下せば、此れも、亦、怖れて、逃げ還る。

一時ばかりを経て、斯波左兵衛佐義廉の兵、如意ヶ嶽より、攻め來る、甲斐、朝倉の輩、先登に立つ。

元明の兵、勝ちに馴れて、驚かず、敵を好き程に、引き寄

せて、又々木石を投げ下せば、此れも、亦、頭を割られ、骨を碎れて、敗れ還る。
今は、攻め來らん敵もあらず、元明、乃ち凱歌を奏して、神樂岡より、御靈口を、勝元の第に入る。
無頼の徒、此戦争に紛れて、南禪寺を焼き拂ひ、知恩院、青蓮院、元應寺等を侵して、其財寶を掠め取る。
洛中の士庶、其貨財を、此方面に預けたるもの、皆、其奪取する所となる。

廿五

東西兩軍の勝敗は、一に繋つて、相國寺を得ると、失ふとに在り。
宗全、嚮に、三寶院、淨花院を抜くや、直に、相國寺を奪はんと欲す、勝元の兵、既に、據守せるを以て、果さず。
然れども、敢て其志を棄てず、機を見て、之れを攻略せんと欲す。

會々十月三日、相國寺より、火を發して、黒煙、高く天を衝く、此れぞ、宗全の兇僧に命じて、放火せしめたるもの。
『素破や、合圖の煙は、颯りつるぞ、進めや進め』

形の御供申して、賀茂の邊に到り、其れより、丹波の方へ、落し參らすべし、當手の合戦、透間なきに就けても、御所の合戦は、一入、難儀なるべし、疾く往け』
と促す折りしも、東門、忽ち破れて、敵兵、撞と押し入れば、

『あれ逐ひ出せや』

元綱、盛長、憤然として、馳せ行き、士卒を叱咤して、奮ひ戦ひ、終に、敵を逐ひ卻く。
敵箭、忽ち飛び來つて、元綱の胸板に、突つ立つ、さしもの勇士も、急所の痛手に、何かは堪へ得べけん、其儘、撞と倒るれば、

『今は、此れまでぞ』

盛長、亦、敵の勇士と、引つ組みつゝ、終に、刺し違へて倒る。
既にして、日、全く暮る。
交戦終日、敵も、味方も、皆、疲るれば、終に、相引きに、引き退く。

總門の死傷、最も多し、政弘、成頼、其取りたる首を、東

畠山右衛門佐義就、畠山左衛門佐義統、大内介政弘、一色左京大夫義直、土岐右京大夫成頼、佐々木六角四郎高頼等、兵三萬餘騎を率ゐて、一條室町より、馳せに馳せて、烏丸に出て、東洞院より、高倉より、哄とばかりに、相國寺の總門に、押し寄す。

此處は、勝元の老臣安富民部丞元綱兄弟の守るところ、元綱、夙に、善謀善闘を以て、敵味方の間に著はる。
敵兵、猛然として、石橋より、殺到し來るもの七度、元綱、悉く、撃つて、之れを卻く、殺傷、算なく、死屍、見る見る、溝中に滿つ。

政弘、成頼等、此門に向ふ、攻むれども、破ること能はず、兩人、心を焦ちつゝ、

『民部の在る間は、此處を落さんこと、叶ふべからず、如何にもして、彼れを射取らばや』

と謀る、今や、戦、益々急なり、安富、其弟盛長を召して、
『敵も、味方も、今日を、限りとこそ覺ゆれ、此寺の守備、破れなば、必ず、屋形の大事に及ばん、汝は、如何にもして、此鹿苑院の方より、花御所に、馳せ參り、屋

八輛に積みて、之れを西陣に送る。

廿六

戦争、漸く終る頃には、相國寺も、亦、一場の焦土と化し去る。

一色左京大夫義直、六角四郎高頼は、後陣に在りて、此攻戦に與からず。

二人、乃ち進んで、相國寺に入り、義直は、山門の跡に陣し、高頼は、佛堂の跡に陣す、此れぞ、東陣の死命を制せんと欲するもの。

其れと聞ける細川讚岐守政之、急ぎ、勝元の許に到り、

『敵兵、相國寺の燒跡を固め候ことは、味方に取りて、由々しき一大事にこそ候へ、斯くては、喉を扼して、背を打たるも同然、此御所をも保つ能はざるに至るは、必然に候、疾く、軍勢を差し向けて、逐ひ拂ひ給ふべし』
と説く、勝元、

『我等も、さこそ存ずれば、先刻、山名彈正忠に、申し遣はしたる所、百々口の防禦、大切にして、寸時も、此

處を退きがたしと申し來り候、誰をがな遣はし候べき』と問へば、秋庭備中守元明、此席に在り、

『畠山左衛門督殿こそ、然るべけれ、千騎、萬騎の敵を、押し崩さんもの、唯、此殿のみとこそ存するにて候へ』と薦む、勝元、實にもと領づき、元明を遣はして、政長を招き、

『疾く、相國寺の敵を、追伐せられ候へ、是れ軍中第一の武功にして、如何なる軍忠も、此れに過ぎずとこそ存するにて候へ』

と促す、政長、

『我等も、さこそは存じ候へ、御靈森の合戦以來、士卒離散して、手にも過ぎざる小勢に候、敵は、畠山右衛門佐、大内介、一色、土岐、六角の兵、二三萬も候はんか、誰をがな、加勢を賜はり候へ』

と答ふれば、政之、

『我等、御加勢申さんと存ずれども、我等の構をも、離れがたし、東條近江守を召具せられ候へ』

と告げ、直に近江守元次を召して、政長を援助せんことを

と答ふ、此時、神保宗右衛門尉長誠、進み出で、

『凡、小勢を以て、大敵に當るは、合戦の大事に候、備を一所に固めて、進まば、敵は、小勢と侮りて、包み撃たざるこや候べき、其時、一方に突き進まば、何どか、打崩さで止み候はん、此千人の一隊、一つ枕に、討死候はん、ヨモ勝利を得られぬことは候まじ、さらば、懸らせ給へ』

と説き終るや、楯を眞向に、差し翳して、敵の虎口に、奮ひ進み、近づく儘に、サツと、楯を投げ捨て、各々槍を揮うて、無二無三に、突き進む。

東條元次、亦、東の方より、横さまに、突き進めば、高頼の兵、見る、五六十人を討たれて、思はず、撞とばかりに、崩れ走る。

政長、元次、透間もなく、逐ひ迫れば、高頼の敗軍、遠慮もなく、義直の陣に、なだれ懸かる。

義直、奮然として、拒ぎ戦はんとすれども、敵味方、一時に、崩れ懸り、追ひ迫りて、何れを敵、何れを味方とも、見分けがたく、空しく、躊躇する間に、政長、元次、容赦

命ず、政長、馬上に立つて、顧眄しつ、

『敵軍、假令、何百萬騎候とも、何條、切り崩さで置き候べき、當陣の人々、相構へて、御心安く思され候へ、此合戦、打ち勝ち候は、今度の弓矢は、政長一人の高名とこそ、各々證人せられ候へ』

と昂言しつ、元次と與に、室町幕府の北門を出で、室町通を上り行く。

普廣院の燒跡を過ぎて、東の方、相國寺に向ふ、頓て、元次に對して、

『御邊は、東河原に到り、西を受けて、横槍を入れ候へ』と命じ、馬より降りて、屹と、南を見遣れば、佛殿の跡より、山門の前まで、ズラリと立ち並べる敵兵、凡七八千、政長、

『あれは、誰が手にやあらん』

と問へば、左右、

『佛殿の跡に控へたるは、六角の手に候、山門の後なるは、一色の手に候、又總門前の石橋のあたりに控へたるは、右衛門佐殿にこそ候へ』

もなく、突き立て、切り立つれば、今は、踏み留まらんやうもなく、崩れ走りて、蓮池に陥り、其藻掻くところを、討たれ死するもの、六百餘人。

政長、六角、一色兩軍の首級八百餘を獲て、勇み立ち、

『總門の合戦にて獲たる首を、車八輛に積み、西陣へ送られ候由、唯今、此方へ、八百の首を給はりて候、尙、不足に候はんか、其れとも、餘分に候はんか』

と呼はり、尙も、嚴しく、敵を逐ひ行く。

畠山義就、總門前の石橋に在り、遙に、敵の旗章を望み見て、

『あれこそ、尾張守が手なれ、我が望む所の敵ぞ、イヤ懸かれ』

蹴起して、此れに當らんとすれども、味方の敗兵、掩ひ懸りて、兵を進むること能はず。

時に、日、既に暮る、を以て、兩軍、俱に、兵を收む。

爾來、相國寺の間に、濠を掘り、柵を樹て、時久の計を爲す。

此戦、應仁元年五月二十五日に始まりて、文明九年十一月

に終り、年を経ること、實に十一年。
 二雄の争は、延いて、群雄の争となり、京師の亂は、散じて、諸國の亂となり、終に、戰國の亂世を現出するに至る。
 京都市上京區の西北部を、西陣と曰ふ、古の錦部郷にして、機業を以て、海内に著はる、應仁の亂に、西軍山名宗全の陣所たりしを以て、西陣と曰ひ、終に、地名となりしなり。
 東軍細川勝元の東陣と稱せしも、此れは、地名としては傳はらず。



日本史蹟大系
 第八卷

昭和十一年一月二十二日印刷
 昭和十一年二月二十七日發行

〔二圓八十錢〕

著者 熊田葦城

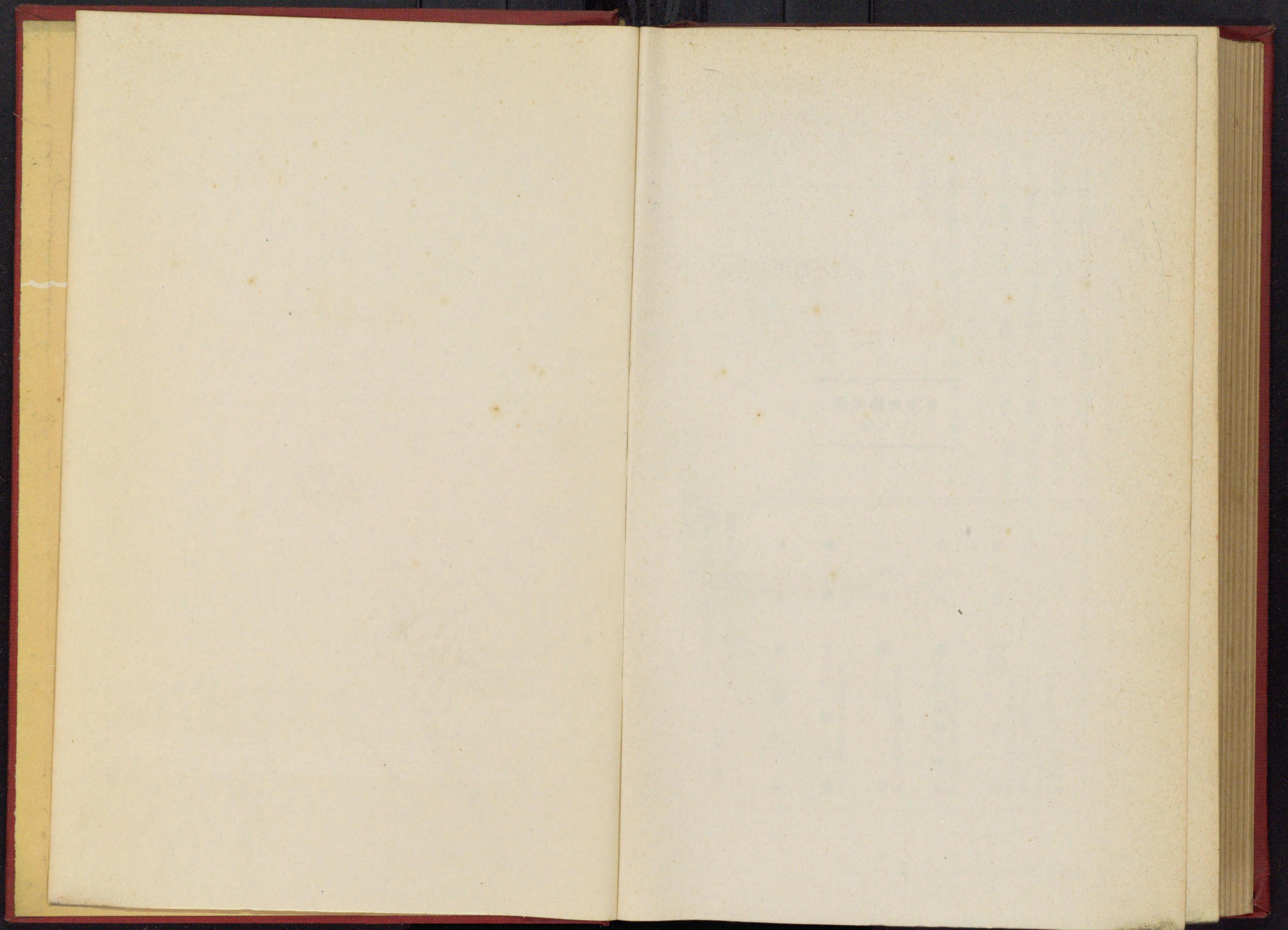
發行者 下中彌三郎
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷者 關口一男
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷所 單式印刷株式會社
東京市芝區芝浦一ノ二三

發行所 株式會社 平凡社
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

振替 東京二九六三九番
 電話日本橋 一五五八番
 一五五七番
 一五五九番



670
25



